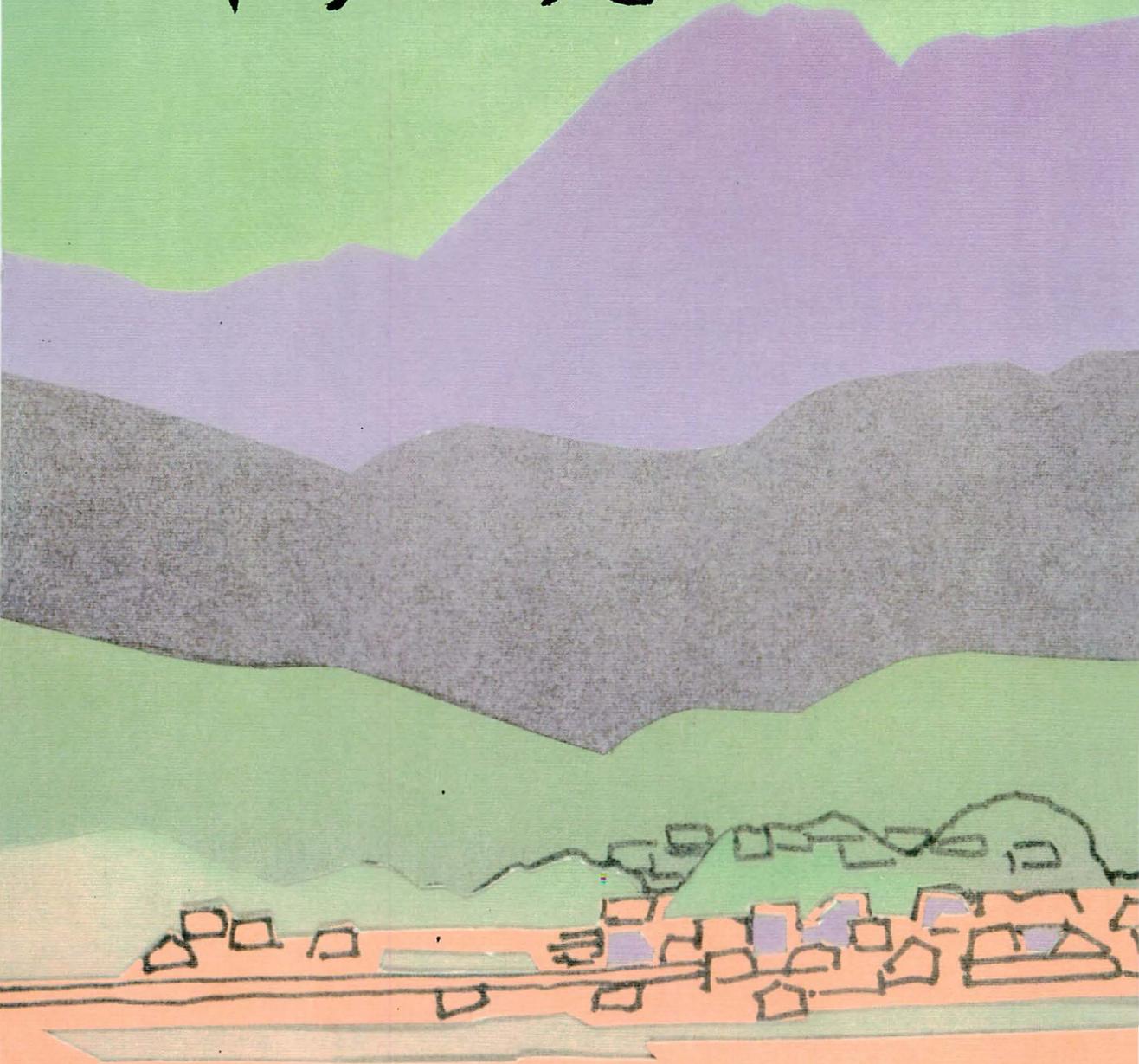


ふる里の記録

くらしの思い出



ふる里の記録
くまの思い出

川内町老人クラブ連合会

「ふる里の記録」発刊を祝して



わがふる里川内町は、讃岐金毘羅街道の宿場として栄え、人馬の往来も繁く交通の要路として賑わい、文化、経済の中心地でありました。

明治、大正、昭和と三代を経た今日、自然科学の発達と科学技術の進歩により、経済は大きく成長し、文化も著しく向上しました。

こうした現象を受けて、ふる里のひとびとの生活様式も大きく様変わりし、日常生活にも合理主義が求められる中で、新しい文化の創造と伝統的な文化の良さを見出し、これを継承しようとする生活の余裕もできてきました。

それにつけても郷土の先人の、祖先から有形、無形の財産を受け継ぎ、習慣や行事を守り幾多の風雪にも耐えきびしい自然条件を克服しながら、生き抜いた姿に、深い感動をおぼえます。

今日、川内町の発展の陰にはこれら先人のご苦労の多かつたことを偲び、ふる里への認識を深め古いものの中に新しいものを探ね繁栄への誓いを新たにします。

川内町老人クラブ連合会のみなさんが、クラブ活動の一環として、古老から語り継がれたふる里の歴史や、若き日の生活体験を収録し、後世に伝えようとすることは誠に意義深く、ふる里づくり運動の推進力になるものと確信し、賞讃する次第であります。

「ふる里の記録」を発刊するに当り、編集委員各位をはじめご指導とご協力いただいた方々に、深甚の謝意を捧げる次第であります。

昭和五十九年二月十一日

川内町社会福祉協議会長

藤井 正

編集に寄せて



このたび川内町老人クラブ連合会では、「ふる里の記録」年中行事篇に続いて、「くらしの思い出」を編集することになりました。

これは老人クラブ活動の一環として自分たちが古老から聞きとった話や、自からの生活体験の中から、心に残る二十八篇を選び、これを若者たちに伝えふる里つくりに役立ててほしいとの願いから綴ったものです。

私たちが生き抜いてきた明治、大正、昭和の御世ふる里は素朴で貧しく苦しくとも義理人情はこまやかで、日本の生活には心の豊かさが漂っていました。私たちは祖父母のきびしい生きざまの中から祖先を祭り、大自然のたたかいに明け暮れ、生活の知恵と工夫と見出し、農耕に汗を流し、ふる里の発展と伝統を守り続けてきました。この本は、ふる里の人々の営みが時代の変遷とどうかかわってきたか、過去のくらしの思い出の中から写真を通しつつ浮き彫りにし、若い人達がふる里の昔のくらしを知る上で手がかりともなれば幸いです。

「くらしの思い出」を編集するにあたり、川老連「昔話を集める会」のみなさんが、資料収集に取組み編集委員各位がこれを分折調査し、それぞれ分担執筆したもので、これらの方々を支えてきた会員のみなさんのご支援に対し、厚くお礼を申し上げます。

さらに陰に陽に「ご指導ご援助を賜った町当局をはじめ、ご助言ご激励いただいた諸先生、先輩各位に心から感謝を捧げます。

昭和五十九年二月十一日

川内町老人クラブ連合会長

東 太市

目次

「ふるさとの記録」刊行を祝して

川内町社会福祉協議会長 藤井 正

編集に寄せて

川内町老人クラブ連合会長 東 太市

白かべの残る家	1
赤いポスト	6
学校のくすの木	10
浄瑠璃の盛衰	16
明治大正の時代の少年団と子供相撲	20
金毘羅街道と桜三里	23
横河原橋と交通の移り変り	27
貯金先生	31
川上村前松瀬川青年団の金毘羅参り	32
河之内音田の繁昌記	36
お灸とまじない	37

前松瀬川主婦会の歩み	41
雪窓会の思い出	46
宮相撲の盛んな頃	53
お蚕さん	57
結 婚	58
おきぬ婆さん	61
大早魁の思い出	64
いろいろのある暮し	68
男の一人前	69
障子ヶ谷の池普請	74
お 弔 い	75
川内と俳詣	82
医王寺の釣鐘の応召	81
製 炭 業	89
井内の幸	91
猪 追 い	94
苧機を囲んで昔を語る	96

白かべの残る家

この写真は坂本家六代豊左衛門、六十八才。明治八年のものである。



坂本豊左衛門

年のものである。

現当主の曾祖父にあ

たる方で、この地では

古い写真の一つである。

坂本豊左衛門が坂本

家の家長時代のこと、

松山城主松平勝成公が

御回領のため川内町へおいでになった。今からおよそ百二十四年前、安政五年三月二十日のことである。

「御廻領御行列、御宿之覚」の史料によると殿様の行列はものものしいもので郷筒を先頭に豪華絢爛そのものであったという。

二十日の夜は北方村、南方村、現川上町を中心に分

宿した。

藩主勝成公は北方村西中村庄屋重松弥三郎に、御家

老菅五郎左衛門外十四名は北方村渡部喜一郎（西門）

へ、御奉行近藤弥市右衛門外十五名は南方村坂本豊左

衛門（かぎ屋）に、その他御側役、御用人、御目付な

ど上級の武士をはじめ足軽にいたるまで二百三十名の

武士と、お泊り宿

見繕い用掛など、

事前準備の人々を

いれると総勢二百

名に達する一行が

二十六軒の農家に

宿泊した。（史料

参考）

明けて三月二十

一日、北方村御蔵

元に勢揃いした一

行は、午前八時頃

川上神社前通り、

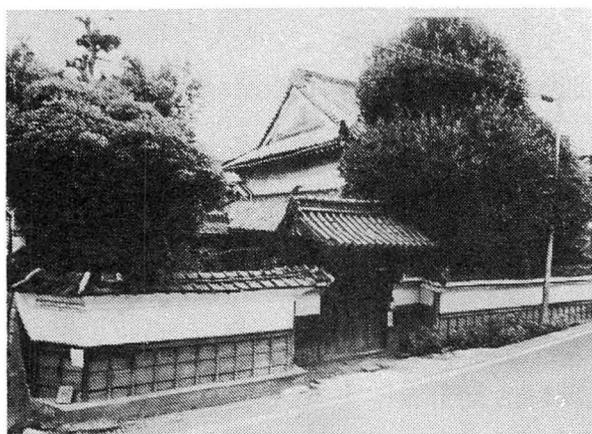


大名行列

金毘羅街道上より御拝、それから則之内安国寺お立寄り、河之内金毘羅寺お立寄りとなる。

春や昔十五万石の城下かな

その後、御回領ごかいりやうのあった十三代藩主松平勝成公の居城松山城は、やがて廃藩置県はいはんちけんを迎え、放火や戦火に見舞われるなど、幾多の変遷へんせんはあったが、今、その多くは復元され昔そのままの偉容を道後平野に一きわ高く聳そびえさせている。

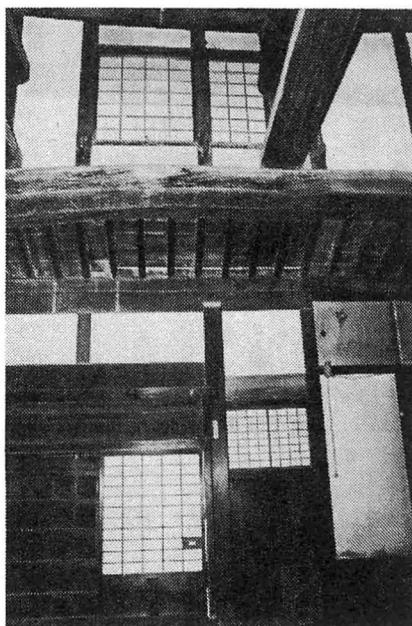


白かべの残る家

その昔、わがふる里も松山藩の藩主や武士たちと深いかわりがあった。城主や御家老、御奉行などがお泊りになったことは田舎いなかの北方村や南方村にとっては大変な出来事であつ

たにちがいない。

当時のなごりが白かべの残る坂本家に見られる。当主のお話によると、家屋は百四、五十年前の建築だそうである。敷地八百坪（約二千六百平方メートル）、六棟の御蔵があつたが今はその内の三棟が残っている。二重戸を開けて一步広く薄暗い土間に足を踏みいれと、まず天井の高さと用材の大きさに目を見張る。



広い坂本家の土間

奥深い天井の一隅には明治の中期に使っていた古ぼけた木製箱型の消防ポンプがつるしてある。

「頼もう」の聲が母屋おもやに伝わるまでには、かなりの時間がかかりそうな気がする。松山藩の御奉行が泊つ

た奥座敷までは、警固の武士がつめていたであろう居間を通り抜けていかねばならない。

坂本豊左衛門の写真は、奥座敷から中庭一つへだてた向かいの、日頃愛用されていた座敷に、安政五年藩主御回領時の様子を語りかけているかのように掲げている。

写真を前に静かに座していると色々な思いが頭をよぎってくる。

北方村や南方村、松瀬川村まで多くの農民が狩り出され、城主御回領の準備に大わらわの姿、辻々には一晚中たいまつが焚かれていただろう。宿泊の仕出し、献立てを見ると、平にはわらび・干し大根・いずし・とある。わらびはおそらく松瀬川村からのえりすぐった献上品ではあるまいか。皿には香の物とあるから坂本家伝来の香の物が使われたのではなからうか。汁は菜っ葉の芯とある、おそらくひりつとした春さきの高菜の芯にちがいない。

準備の下見や御奉行をはじめ十六名の接待をしている豊左衛門のあわただしく緊張した姿、そうしてその

昔、千俵に余る定米を受付けていた豪農のありようがしのばれてくる。

ちなみに坂本家から見つかった明治十七年発刊の「愛媛県長者番付」によると松山の仲田、道後の鮎田、久米の後藤、東方の渡部など県下上位に伍して北方村から六名、南方村から五名の者が堂々顔をのぞかせている。県下的に見ても一目で川上に長者が集中していることがわかる。城主一行の宿泊を引受けることができたのもむべなるかなと思う。

なお坂本家に、豊左衛門や先代の仁兵衛宛の、松山藩世襲家老服部家をはじめ、上席役人の御用係から送られた五十通に余る手紙が残されている。それは「江戸詰めになったので近々お江戸入りをする」とか「正妻に男子出生」あるいは「妾腹に子女出生」「若君が殿様に賞詞をいただいた」など日常のこまごましたしらせのものが多く、家老をはじめ松山藩中枢部の人々と深い交際があり、密接につながっていたことを物語っている。そうして、片田舎ではあるが相当な力を得ていたことが想像される。

史料

「御廻領御行列、御宿之覚」

第十三代松山藩主松平勝成公、川内御回領時の行列

は左の通り。

郷筒二こうづつ 御先馬ごせんば 沓籠くつかご 御先払ごせんはら 御足輕二ごあしかり 御具足ごぐそく
 櫃びつ 御持筒一ごもちづつ 御挾箱二ごはさばこ 御拝領鑓二ごはいりやう 御歩行二ごあち
 御長刀ながなた 御纏鑓まとやり 御脇差わきざし 御歩行小頭ごあちりやう 大小姓二おほいせう
 御進物番二ごしんぶつばん 御馬ごま (藩主) 御目付ごめづ 御歩行頭ごあちりやう 御鋏形十文字ごあがた
 御側筒二ごそばづつ 御菅笠すげがさ 長柄傘ながへがさ 御召替馬ごめしかえ 御拝領鑓ごはいりやう
 御床几ごとこ 御杖ごえ
 沓籠くつかご 御駕ごか 御召替駕ごめしかえ 御茶弁当ごちあて 御薬篋ごやく
 御菓子篋ごかし 御坊主一ごぼくしゆ 下目付しもめづ 中押御足輕二なかつおごあしかり
 小使三せうし 又者合羽籠またものかっぱご 五荷ごに 御側役騎馬ごせりやく 御側役小姓ごせりやく
 騎馬ごま 同どう 同どう 御医師駕ごいし 同どう 御絵方駕ごえか 御奉ごほう
 行騎馬ごりきま 御用人騎馬ごにんりきま 御歩行頭騎馬ごあちりやう 御目付ごめづ 御家ごけ
 老おきな 押足輕二おしあしかり 以上

藩主一行の御宿

藩主松平勝成↓ 北方村西中村庄屋重松弥二郎宅

家老菅五郎左衛門外十四名↓北方村渡部喜一郎宅、

用人竹内九郎兵衛外七名↓ 北方村渡部沢右衛門宅

小姓奥平左内外十四名↓ 北方村政右衛門宅

医師室節林呂外五名↓ 北方村七右衛門宅

膳所野中藏之丞、祐筆岡七郎左衛門、絵方萩山雅窓

の三名↓ 北方村源四郎宅

目付小林入之丞外二十四名↓北方村渡部喜一郎別宅

御廻領付添手代西村弥四郎外七名↓北方村吉之助宅

坊主得郷有淳外十一名↓ 北方村好兵衛宅

持筒十一名↓ 北方村太吉宅

先筒六名↓ 北方村奎左衛門宅

手廻十六名↓ 北方村伊左衛門宅

馬宿九名↓ 北方村庄屋元勘太郎宅

歩行目付藤田作左衛門外五名↓ 北方村安兵衛宅

中間八名↓ 北方村助右衛門宅

奉行近藤弥市右衛門外十五名↓南方村坂本豊左衛門宅

側役池内嘉兵衛外七名↓ 南方村為助宅

御進物番飯塚小源太外七名↓ 南方村権六宅

歩行小頭伴多惣次外十一名↓ 南方村新五郎宅

諸改浅井三郎外十二名↓ 南方村文六宅

次祐筆西山寛蔵外二名↓ 南方村徳三郎宅

はか手直し十二名↓ 南方村源兵衛宅

郡奉行片岡、代官猪田外十名↓南方村多之右衛門宅

他に事前準備のため使用された家

御宿見繕い用掛南久米村幸太郎、古川村作次郎、○

○村新平、郷筒代鷹の子村嘉右衛門、郷筒代北方村

利衛門、郷筒代○村源兵衛、郷筒代○村藤右衛

門、諸請引北方村与頭忠八郎、同政太郎、以上九名

が八郎宅

元殿御手代中↓ 庄屋東勇右衛門宅

惣用掛↓ 五郎兵衛宅

右宿仕出し方引受け宿が庄屋前与平太宅

その他「人馬北方村御蔵元揃」とある。

宿泊の仕出し献立

夕食 平 わらび、干し大根、いずし

皿 香の物

汁 わかめ

朝食 平 いそいとこぶ、花がたふ

皿 香の物

汁 菜っ葉の芯

弁当 箱入れ飯

刻みこんぶ、干し大根、いずし

香の物

以上

「この史料は松山市平井町重松隆之氏御提供、

川内町南方野口晃氏読解による」

(宿をしたお宅や準備係など名前だけで姓がなく、

全く見当がつきません。もし心当りがある方は

電話川内局(六六一三〇〇三)に御一報頂ければ

幸いです)

赤いポスト

我が国に新式郵便制度が導入されたのは明治四年で、この地の取扱所は三年おくれの同七年十一月に開設された。発祥の地は松瀬川一番地で上之町区、中山寺の道路をへだてた向こう側で今は創立百年の記念碑が建っている。初代局長は宇和川虎太郎であった。

それまでの通信伝達は、すべて飛脚制度により届けられていたし、そのより所を「伝馬屋」と呼んでいた。つまり伝馬屋が郵便取扱所に衣替えした訳で、まだ郵便局とは言われていない。

全国の隅々みまで、しかも急速に新設せねばならぬこの制度だが、明治新政府にはその資金がない。そこで官尊民卑の時代であったため地方の素封家に官員としての誇りを与える代わりに資本と個人的信用におんぶし、拡大充実を図りつつ、身分も希望により世襲

制を優先したものである。

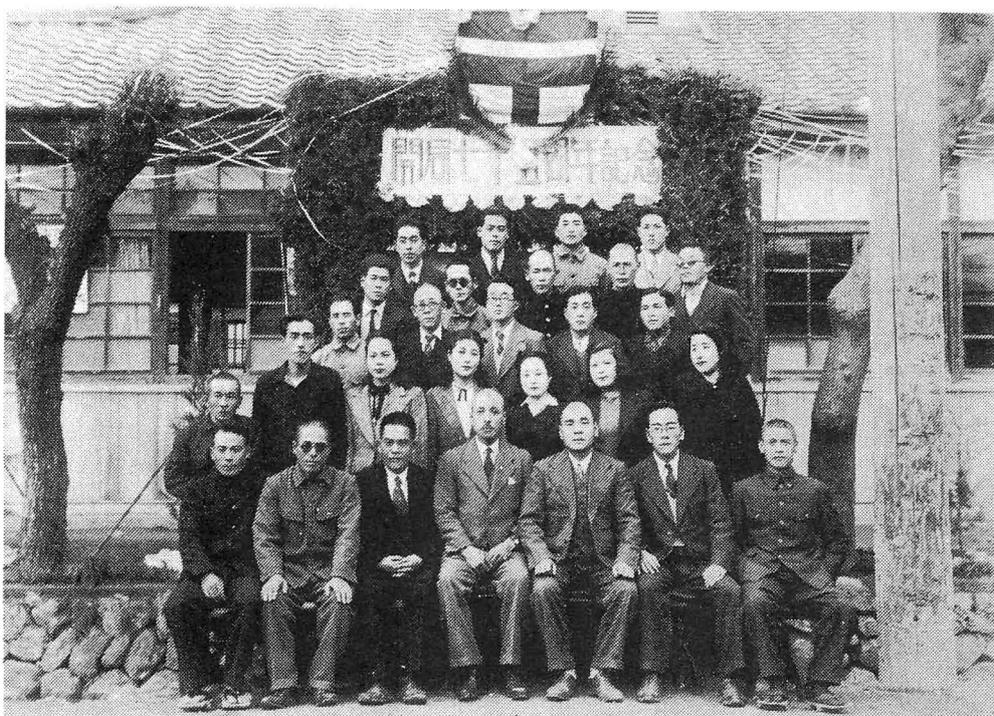
初代局長、宇和川は明治二十年頃まで健在であったらしく、中山寺境内に法華供養塔建立に寄与していた模様で、その後の消息は残念ながら分らない。

二代渡部満弘は屋号『大黒屋』の旦那で、二代川上村長の経歴も持つ地主でもあった。現在下之町の重松病院がその邸宅跡で、局舎も自宅の西隣に移していた。この広い自宅も明治の終わりに火災にあい、これを機会に松山へ出ている。長男満匡は松山南町郵便局を開



上の地区川内郵便局発祥地の碑

設し、自ら局長となり、またその二男満元がこれを継いだ。親子三代の郵政人といえよう。三代城謙三とその子四代寛平と続くが、いずれも短命に終わっている。城家は累代、頭脳明晰で、諸事明快に対処していた。城哲三



郵便局開局75周年記念従業員一同（昭和23年）

は城北に北豫中学を起こし、城ノブは阪神の地で婦人運動に貢献し世に知られている。

日露戦争の後、城の後を坂本公直が受け継ぎ局舎を中之町、現在石丸商店の東側に移した。古い家を改造したのか天井の低い暗い格子窓で非健康的な構えであった。この頃の思い出になると老人の記憶には残っていないはず。公直は坂本家の弟、つまり新宅と呼び、私宅は市場区にあった。今は町役場に変身し、庭園の古木が数本残っている。大正九年まで二十年近くも続いたが、故あって退き代って下之町屋号『西門』で知られる旧家、渡部綱久となり昭和四年今上陛下御大典紀念に自宅前に新築移転している。やがて長男満久に譲り、戦時を乗り越え、昭和四十二年退職するまで親子で約半世紀の永きにわたった。これを最後に局舎も現在地、下沖区に洋式二階建てで官立されたに伴い局長の世襲制度も崩れて今日に至る。

郵便局制度にも触れておこう。郵便局はその規模により一、二、三等にランクされ、田舎の局は総て三等局といって局長が局舎を提供し、業務運行はもちろん

従業員の給与一切を渡し切りによる請負制度にしていたため局員の身分、待遇は局長の自由裁量に委ねられていた。従って一、二等局職員に比べ身分上の格差は次第に広がり不遇であった。にもかかわらず地元通勤の便利があり安定した職場だけに居心地がよいためか親子兄弟または夫婦といった近親間の就職も稀れではなかった。しかし、とかく問題の多いこの制度も、時代と共に改革され、ついに昭和十二年には政府直轄に改められている。

明治の頃には上之町、宇和川作次が開局以来四十年余り逋送人夫として勤続し、また下沖区渡部団正も昭和年代に局長代理として生涯を尽くしている。ここに珍しいのは、後年三内村長として敏腕を振った西谷田井一十郎も明治の終わり、齢十八歳から日給三十銭で在職している。初任給では同じ年齢で、昭和初期には月給二十円、終戦時は月千四百円で、三十年経た現在高卒九万円と変化し、貨幣価値の変動を立証し、しかも男女平等は時代思想の変遷を物語っている。

業務運行に移ろう。郵便集配の受持ち区域は遠く重

信町全域までまたがり、いかに人口が少なく利用度が低いとはいえ、道も悪く車もない時代に、徒歩で相当困難をきわめたに違いない。重信川出水の場合を想定してもおよそ想像できよう。この不便は大正六年田窪局が増置されるまで永く続けられた。

輸送、継越にしても同様で、いわゆる金毘羅街道が本筋で松山・多度津間の中継所にもなっていた。

後ろに大きな柵の付いた手引車で運び、多度津から船に乗せて本州に送る。また別に杣野線といって黒森峠を越えて面河、渋草に至る線も請負っていた。中山峠や黒森峠を上り下りするに、山賊にそなえピストルを持参したことも笑えぬエピソードである。

郵便ハガキが一銭五厘、封書三銭の時代は永く続き、老人の頭にこびり付いていると思う。この間、酒・煙草は何回か値上げされたが、郵便料は昭和十二年まで不動のものだった。半銭の小硬貨や、二銭のやや太目の銅貨が幅を利かしたところである。

郵便の配達はもちろん徒歩であったが、正確、迅速で知る郵便さんの姿を見て、田圃で働く農夫らは昼食

時の目安とした。担当の受持区域は、各自固定していたので、毎日顔を会わす住民との親近感^{せんとく}は密接で、時には私的な日用品や言づけも頼まれることもある。また老婆に手紙を読んでくれとか、子供の自慢や辛味話をながなが聞かされたともいう。

小包郵便は明治二十九年にはもう始まっている。正月の餅や五月の苗代時の焼米は故郷の味として都会に送られその反対に盆、正月には中元、歳暮の品が返ってきた。

何といっても、通信の革命は明治四十三年の電信線の架設であって、モールス符号による一打は一瞬にして喜怒哀楽を全国に送信した。が、それも局相互間だけのことで受取人の手許までは及ばない。赤塗りの自転車が配備されたのは大正も九年というから人的・物的の対応は随分のんびりしていたものだ。

電話の単独通話が始まったのは大正十二年だから関東大震災には間に合っていない。それでも電話通話は時代の寵児と騒がれ尊ばれた。嘘のような本当の話である。それから七年遅れて、昭和に入り四年にあこが

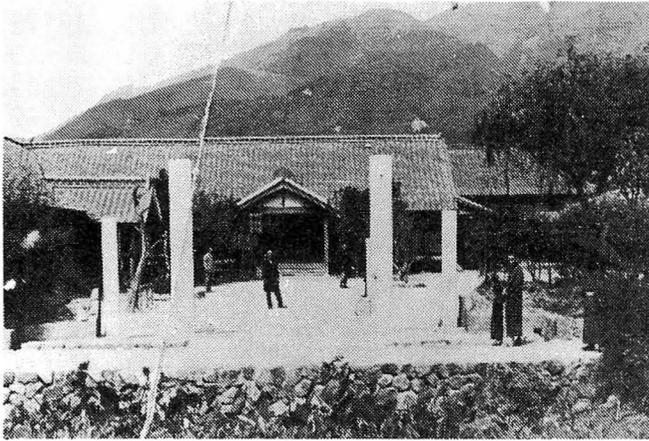
れの電話交換業務が開始された。といっても加入電話はわずか二十二個で出発している。それも大半は公共的な施設で、個人加入は数える程しかない。それもそのはずで、電話加入に当時の金で二百円を負担しなければならぬからだ。従って電話の有無は個人資産の象徴とされ、装飾品の役目も持っていた。それが今日町内二千五百個で一戸一個は遠くおい越し、その上町内有線の併設を思えば全く隔世の感があるといえよう。

郵便貯金の制度は比較的早く、明治十八年にはすでに始まっていた。二宮尊徳式の勤儉貯蓄の思想は、富国強兵の国是と相共に拍車をかけた。庶民に忘れられないのは敗戦のインフレによる貨幣の切替いで永年苦心の結晶が水泡に帰したことである。

これにより一応は国民経済は平等の立場になったが、今また別の形で貧富の差が広がりつつある。このこともまた、赤いポストの一ページとして書き残しておきたい。

学校のくすの木

この写真は、現川上小学校の前身、明治三十年代のものである。現在川上幼稚園の校門と石橋にそのなごりをとどめている。



川上小学校のクドさん校舎

をとどめている。

写真の左側には
枳殻きこくの生け垣が見える。

校門の右側に見えるくすの木は、
明治三十一年、いわゆるクドさん校舎が新築されたときに植えられたものではないかと言われているが、確

かなことはわからない。ただ、板戸の大西のおじいさんは明治二十七年生まれ、すでに故人になっておられるが、生前「自分の子どもの頃校門のくすの木に石を投げて遊んでいたら、木の皮が大きくむけた。その時学校の記念になる大切な木だとひどく叱られて、子ども心に大変心配した。」と話されたことがあったそうである。

おそらくこの木は、川上小学校の移り変わりをじっと見守っているいちばん古い木ではないだろうか。今、幾多の苦難に耐えて、学校の歴史を物語っているかのように、ひととき高く堂々とした威容いようを仰ぐと、何か心うたれる思いがする。

確たる証拠は見つからないが、学校創立記念樹と考えてよいのではないか。大切に守りたいものである。

川上小学校の変遷へんせんについては、学校創立九十周年の記念誌に詳しく紹介されているので、一応おくことにして、明治末期から大正年代、昭和の初めにかけて、当時子どもであった七十五歳前後の老人クラブの皆さんが、子どもの当時を思い出して話して下さったこと

を紹介してみよう。

一 衣

天気の良い日は例外なく父や祖父が作ってくれた「ち

りぞうり」か「あしな

か」をはいた。なかに

は上等の竹の皮ぞうり

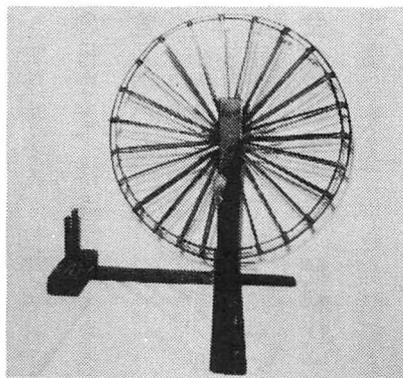
の子もいた。雨の日は

下駄が多く、鼻緒はなむは縄

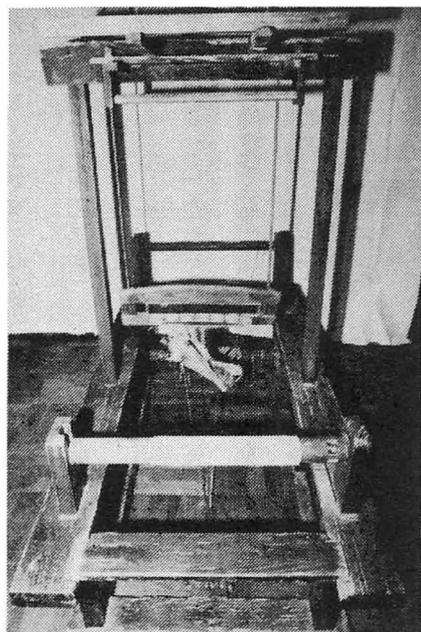
のものが多かった。よ

そ行きの下駄は、お盆

かお正月に買ってもら



糸 車



織 機

った。

大正の中頃からゴム靴が流行して、雨の日も晴れの

日も、夏も冬もゴム靴一色であった。川遊びの時など

ゴム靴ままで川にはいり、大変便利な履物はきものであった。

着物は、母親が糸をつむいで織ってくれた木綿もめんの着物

に半てん、それが小学生の一般的なスタイルであった。

卒業式など学校の大切な行事には、羽織、袴はかまの正装

の子も多くいた。

大正の終わり頃から、珍しく学生服を着てくる子を

見かけるようになった。帽子は揃って学生帽、学用品

は風呂敷に包んで腰にくくりつける。これは、体裁は

良くないがいたって活動的であった。

大正の末期から昭和のはじめにかけて、肩掛けかば

んの子がだんだん多くなった。冬は、大人はインバ、

青少年はマントを着用した。

二 食

主食は、お麦のご飯で、米麦半々くらいが普通であ

った。家によっては麦七分、米三分、栄養は別として

食べづらいものであった。学校の弁当は、母親の心づ

かいで、なるべくお米の寄っているところを入れてくれた。どの家の子も、お米のご飯を待ちわびたものである。

毎月おついたち(一日)、お十五日、お八日(三日)、にはどの家でも白いお米のご飯を炊いて祝うならわしがあったので、とてもうれしかった。「オーイ、きょうはおついたちぞえ、お米のご飯ぞ！」と、子どもたちは、お互いに楽しんでしゃいだものである。

お庚申さん、初子さん、お亥子さん、お金毘羅さんの日など、待ちに待ったお米のご飯で、その日をよく覚えていた。

小作農がほとんどで、収穫したお米の半分くらいは「定米」として地主に納め、残ったお米を、なるべく食べないで売り、肥料代や盆、暮れの支払い、日常の出費に充てていた当時であるから、いかにお米を大切にしていたか容易に想像される。

戦後の農地解放により農家はほとんど自作農になり、小作農が全く姿を消してしまった今、隔世の感がある。特にお米をなるべく作らないようにと減反政策を進め

ている現在から考えると、想像もつかない時代であった。副食は漬物や野菜が主で、茄子の頃は茄子の煮物、茄子の漬物、茄子の焼物など朝から晩まで茄子づくめだった。農家ではあまり牛肉を口にしなかった。仏教の影響もあつたであろうが、農家では農耕のためどの家でも牛を飼っていたから、牛を大切にしていた表れであろうか。お祭りやお正月には魚を買った。お正月には大きなブリを台所につるして、お年始のお客さんがある度に切り取って肴にしている風景がよく見られた。

普段の食事には、塩物や干物の外には、あまり生の魚はつかなかった。豊漁の年など、イワシを安く売りにきたので焼いて食べた味、イリコをひしおに混ぜていただいた味など今に忘れられない。

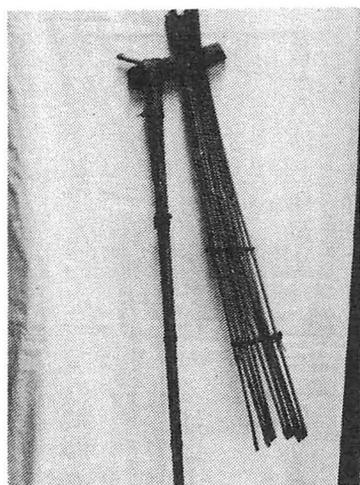
家での食事は、茶の間の上段に、戸主である父親を中心に、左右に男の子が座る。母親や女の子は、板張りの落間でいただいた。家長の父親は足付きの高膳、家族の者は箱膳を用いた。男尊女卑の封建性の強い時代であつた。

三 住

当時の子どもたちは学校から帰ると、まず手伝いが待っていた。

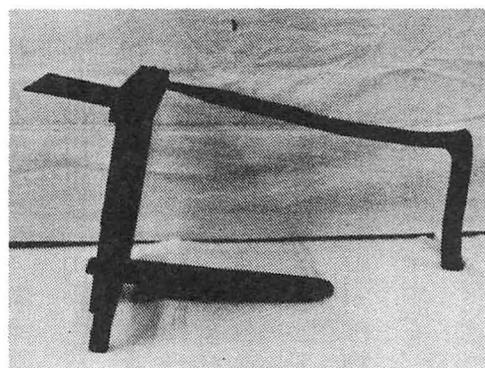
麦の脱穀は、田んぼで刈り干した麦を一握りずつ「千歯」という農具を使って穂を扱ぎ落とし、よく乾燥させてから「からさお」でたいて脱穀していたので、麦運びやむしろ干しの始末などのお手伝い子どもたちも大変であった。

田植え時の苗運び、稲田のころがし、草取り、子守り、風呂わかし、台所の用意、秋の稲運び、冬期は、どの家の表にも、小高い山のように薪の束が積み上げられ、その高さ束のりっぱさを競いあっているよう



お さ ら か

であった。
父母が手伝いをあてにしていたので、学校から帰るとお手伝いで精一ぱいであ



千 歯

った。時には学校を早引きして手伝った。

父や母は、朝暗いうちから夜は星をいただいて働いた。田植えだ、麦まきだ、という忙しい晩など、父親が仕事のまままで寝ている姿を見かけたことがある。

現在のように機械化していない時代であったから、特に父母がたくたくに疲れて、田んぼから帰ってくる姿が目には焼きついていく。だから手伝いについて子どもに不平はなかった。早く学校を卒業して父母を楽にしたいという気持ちが強かった。

勉強は夜させてくれた。ランプの灯は薄暗く、昼間の手伝いだからだが疲れているので、そう長くはできなかつた。復習が主で読本の文章の暗記、漢字の書きとり、計算など、単純であったが徹底して繰り返し勉強した。



昭和2年 中等学校入学記念

大正七年から十年にかけて南方部落にはじめて電灯がついた。家にたった一つの電灯のもとで父は藁細工、母は縫い物、兄弟姉妹が集まって、「明るいのう」と十燭の電灯に感謝の気持ち一ぱいで勉強したことを思い出す。

老人のひとりが言った。「今の子どもは恵まれ過ぎている。不自由や苦勞を知らない。勉強のできるあり

がたさがわからない。耐える心や感謝の気持ちが乏しい。」と。
当時は、尋常科六か年が義務教育で、高等科二か年は希望入学であった。

大部分の子

は高等科へ進学させてもらったが、子どもが尋常科を卒業すると家業や職人の見習い、丁稚奉公として、実社会に出す家もあった。

十一歳か十二歳で働きに出される子は本当にいたましかった。NHKテレビ「おしん」は当時のようすを如実に物語っている。

中学校は五年制、高等女学校は四年制か、五年制で、この近辺では松山市にあるのみで、郡部にはなかった。昭和の初期でクラスの十%くらいの子が進学した。

学費や交通費が高くて、一般にはなかなか進学させてもらえなかった。横河原駅から松山の立花駅まで、一か月の汽車賃三円十二銭はかなり大きい負担で、母が伊予ガスを織って、その賃金でまかなってくれた事情をよく覚えている。

今はその面影も見られないが、当時は藁ぶきの家が多く、農家には、きまって門口に小便用の便所がつけられてあった。下肥が作物の肥料として重要視されていたので、町家の下肥を、野菜などと交換して買っている農家もあった。



わらぶきの農家

野菜を下肥しもこえで作

っていたことや、

衛生思想の低さも

あって、当時の子

どもにはおなかに

回虫のいる子が多

かった。学校では、

一斉に虫下しのカ

イニンソウを飲ま

せる風景が見られ

た。葉がきいてく

ると体長十センチメートル前後の白い回虫が便に混まじ

って四、五匹も出た体験はほとんどの子が持っていた

ようである。

四遊び

男の子は季節を問わず「輪回わまわし」が盛んであった。

これは、直径三十センチから五十センチくらいの金の

輪を、走りながら回すのである。登下校時、お使いに

行く時、遊ぶとき、いつもよく輪回わまわしをした。当時は、

まだ自転車に乗る人が珍しく、自動車も一日に一台か

二台くらい走る程度で、他に人力車、荷馬車、客馬車

が時々通るくらい、のんびりした国道であったから、

輪回わまわしが思いきりできた。この輪回わまわしは子どもの頃の

体力づくりに大変役立ったように思う。冬期が主であ

ったが「どん馬ま」「陣取り」「鬼ごっこ」「丸さんごき」

「国取り」など跳んだり、走ったり、男の子も女の子

も農閑期のうかんきにはよく遊んだ。

竹製の遊び物には「水鉄砲」「すす玉鉄砲」「杉玉鉄

砲」「紙鉄砲」「竹馬」「ぶん回し」「竹とんぼ」「七つ

箇ご」これらはほとんど自作か、父に作ってもらったも

のであり、買った物はなかったようである。手にもよく

傷をつけたが小刀や鎌を器用にこなしたものである。

正月を中心に、冬期は男子の「コマ回し」「パッチ

ン」、女の子は「お手玉遊び」が盛んであった。

たたいて回す「ぶちゴマ」は木をけずった自作のも

の。音の出るブリキ製のものは買ってもらった。コマ

に芯が通っている「オタフクゴマ」「ケンカゴマ」の

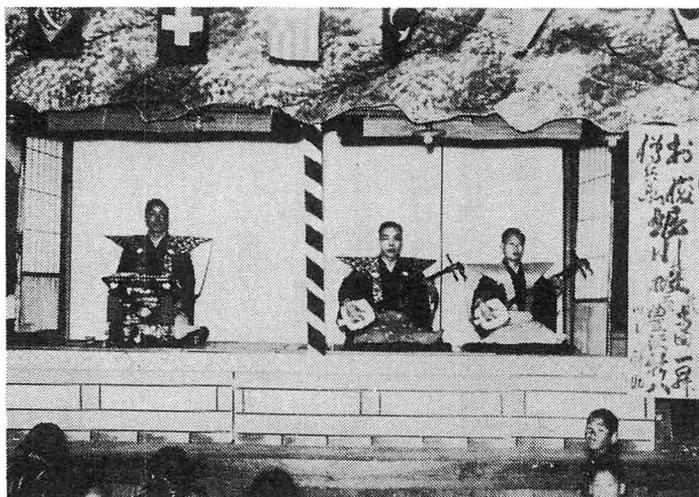
遊びは技術がやや高等で主に中・高学年生の間で盛ん

であった。お手玉は色とりどりの布切れを縫い合わせ、中に小豆や大豆などを入れてつくった。唄を歌いながら器用な手つきで遊んだ。(この唄の歌詞は「ふるさとの記録 年中行事篇」の正月の項にくわしく紹介してあります。)

戸外では木登りをよくやった。「昔の子はからだは小さいが体力があった。今の子はからだは大きいが体力がない。」とよくいわれているが、遊びや手伝いが、大きく体力づくりに役立っていたのではないかと思う。

浄瑠璃の盛衰

「歌は世につれ、世は歌につれ」の名文句の通りその時代時代の世相によって歌は移り変わる。浄曲と歌謡、演歌ではいささかその趣きを異にするとはいえ、



浄瑠璃大会

心を歌うという本質は変わりはない。義理人情を強く訴え、太竿の三弦をかき鳴らす撥さばきより発する音色は、明治の若者の心をとらえたものである。浄瑠璃を一段しあげるには、ひと財産を潰すとまでいわれるだけあって、旦那芸とか道楽芸とかいわれたのもうなずける。

明治、大正のころは、全国的に浄瑠璃の全盛期で、わが川内の里も例外ではなかった。日露戦争後、常設館である「名越座」がはなばなしく開設されるや、この地は浄瑠璃

のメッカとなった。

このころの模様をつぶさに知る生き字引は、西谷保免区に住する北條藤奈八さんで、八十六歳の高齢ながら今も尚、毎日三味線と共に明け暮れておられる、しんからの愛好家だ。この方は、生まれつき音曲に才能があつて、しかも努力人でもあつた。特に三味線の音律にひかれて十五歳から五か年浄曲を井内の小梶太夫に、また、三味線を上之町区の豊澤廣勝師匠に教わ



浄 瑠 璃 愛 好 者

つた。しかし、本筋はやはり三味線の方で、芸名も「廣之助」と銘打っていた。素人だけに師匠の姓「豊澤」の名字は名乗れない。二十歳から五十歳までは、生計のため一応休止していたが、この

間も良き師匠やプロの本太夫が松山に來演するときば、必ず出かけて研鑽を怠らなかつた。五十歳で終戦となるとピシヤリと家業を子に譲り、再びこの道に没頭し精進した。取材に訪れると、血色もよく耳目等の五官すべて壯者を凌ぐ健康体で徐ろに答えてくれた。まず井内大根木口に小梶太夫がいた。本名を東米次と呼び、若いころ大阪で修業し、帰ってからは阿波源之丞一座に加わり、専属太夫として関西各地を廻るという全くのプロである。初めは梶登太夫を名乗っていたが、後に師匠の名を継ぎ三代小梶太夫と改める。透き通る大きな声で『伊勢音頭油屋の段』とか『嬢景清日向島の段』を得意としていたし、また多くの弟子も育てている。

元來、井内西谷は昔から名人逸材を輩出したところだ、この世界もまた多くの太夫が育っている。西谷則之内宿野に富久友吉がいて、子供のころから本場大阪で修業した。長ずるに及び頭角を現し遂に師匠の豊竹姓を貰い名も音羽太夫と命名する。阿波源之丞に加わり各地を打って名声を博したが、老來故郷に帰り子弟

を育てたという。時代は少し下るが、これも同じ西谷は三島区に白戸小富士がいる。本名は彦一で、これも大阪に出て修業して帰る。それだけに多くの外題をこなし、中でも『三勝半七艶容女舞衣』等の艶物語りを十八番としたし、素人四国コンクールには「四国大関」に登った。また、この地方大寄せ大会には点者（審査員）もつとめる権威者でもあった。

河之内では、後年いわゆる時の人となつた近藤金四郎翁も、若い頃は「山王」と名乗り高座に登つたことを知る人も少なくなつてきた。

奥松瀬川添谷に渡部呂昇がいた。本名丑平といつて最近まで老人憩の家で度々披露もしていた。大寄せには出演し高点を取つて大関に進んだこともある。柔らかない声で聴衆を軽く包み込むようなムードぶりで『撰洲合邦が辻』をよくした。色白の丸い顔で婦人に受けたが一生独身で通した。

前松瀬川に移ろう。西組に田井緑（實一）がいてはつきりした大きな声で『三十三間堂棟木の由来』を語ればこれに及ぶ者がないという。司法書士を業とし社

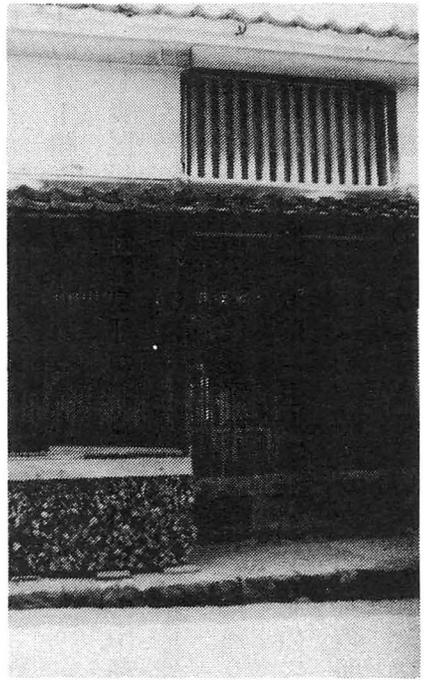
交も広がったが、晩年東京で逝く。

同じ松瀬川に寺田雅光がいるがこの人は三味線の方が得意で『壺坂靈験記』おさと澤市の世話物を弾き語りもする。

北方西の側に花山旭がいた。筒の太い（喉の太い）声で『太閤記十段目、尼が崎の段』を語ればプロ並みでこのほかどの外題もこなしていたという。後年下之町に出て多くの弟子を育てていたが一座に加わり旅に出たという。

南方森区に中島愛水がいたことをこの道で知らぬ者はない。なんでも山之内の出身でしわがれた難声ながら腹力があつて場内のすみずみまで響き渡り聴衆を圧倒した。得意の武者ものを語れば右に出る者がないという評判だった。

町節にまわれれば、遊芸どころか師匠のお膝元でもあり、多士済済である。古くは中之町に田中頼太夫がいる。石丸商店の先々代で本名を藤十郎という。木偶芝居の専属太夫として各地を廻るプロだったが、晩年は余り活躍しなかつた。



連子格子のある家

長野一昇（茂一）と渡部一定（定一）の両、四国大関の出現で、浄瑠璃熱はいやが上にも盛り上がった。一昇はきれいな声で、艶物を得意とし、身振り手振りで身をそらし張り扇を使う技巧派だった。『傾城阿波の鳴戸娘巡礼の段』になると場内よりすすり泣きの声も聞こえた。

これに対し、一定は太い声を縦横に使い分け、荒物を十八番とした。『太閤記』あるいは『一の谷嫩軍記』で場内を湧かせた。町筋を東から指折ると天神町に名越節太郎と花山友一が道路を隔てて、たがいに唸っていたし、市場区の近藤國栄も『太閤記』を得意とし

ていた。

ここに珍しいのは中之町エビスヤ薬局の先々代に当る渡部辨次郎と、その長男渡部清、弟高義の兄弟である。親子三人が浄瑠璃好きで、父辨次郎は三味線の弾き語りもする。兄の清は北史と名付けて艶物を、また弟の高義は御國と名乗り『太十』のような荒物を得意としていたのも面白い。

下之町に下れば、高須賀自鏡がいる。本名を秀之と呼んで美声の艶物の語りで世に知られていた。

三味線では、上之町に豊澤廣助とその子廣勝、弟の新八がいて浄瑠璃と三味線を教えていた。宗家、豊澤を名乗るには、それだけの経歴と実力をかね備えなければ大阪本場の許しがもらえない。今も宮西区に残る古い連子格子の隙間から、夜となく昼となく三味の音がもれていた。この家から多くの素人太夫が育った訳である。その弟子の中に露口三玉がいた。三味弾きが本筋で本名與太郎という。この人の父も同じ三玉と名乗ったが、父の方は浄瑠璃語りが専門であった。

あれほどいた愛好家も、年と共に欠け、今に残るの

は五指の数にも足りない。井内の高須賀富太郎は百歳の天寿を保ち、谷三や太十を語らせば、若い力強い声で壮者も及ばない。時には施設慰問に出かけ、長寿の秘訣と趣味を身を以って示している。芸名を富士戸と呼ぶ。中之町に住まいした佐伯喜代松は文昇と名乗って太閤記とか朝顔日記を語り当時としては最少年者ながらよくやっていた。今は道後に移っていると聞く。

河之内に近藤長作もいた。大阪に学び、師匠の名を貰い津作太夫として世に知られ、三勝半七を得意としていたが先年松山に転住している。

娘義太夫はと問うならば、即座に、井内に八千代がいたと答える。今は南方森区に嫁す菅野マツエで娘巡礼の外十題位は習っているはず。

同じ森区に田井野重郎がいる、初め近くの中島愛水に手ほどきを受け名も師の一字を貰って「愛玉」と名乗り後改めて松山の二代豊澤新八師のもとに通う。『艶容女舞衣酒屋の段』或は『壺坂靈験記』をものにした。

浄瑠璃を一段語るには約一時間かかり、その間全力投球で一語一曲の誤りも許されない。今の二分か三分

の演歌とは比較にならない程の精神力と体力を要求される。最大のポイントは情感の表現であって、太夫と三味線、それに人形の三位が一体にとけあってこそ初めて木偶が生き見物客を引きつけるもので、大変むづかしい芸だが、練習すればこの境地に達することができ。

昭和も後半に移り、若者の志向も変った。浄瑠璃の世界も後継者が出ないままに、年をおって衰微の道をたどる運命にある。

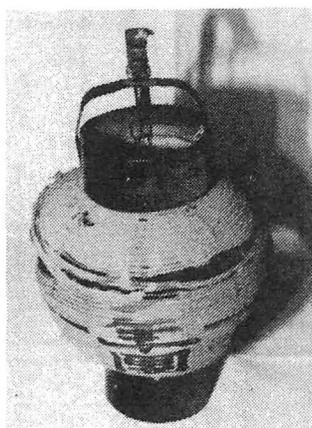
明治大正の時代の少年団と子供相撲

明治末期から大正時代、つづいて昭和二十年頃まで子供達は、学校以外の家庭や組内などでは、組織的なスポーツや、球技等のような用具を必要とするスポー

ツは、ほとんど行われていなかった。ただ一つ子供相撲だけが村内一様に、各地で盛大に行われていた。

相撲は、日本の国技といわれ、古い歴史を持ち、伝統として行われ、子供も大人も相撲を愛好し、相撲があると見物客も多く、熱を入れて応援するのが常であった。神社や寺院の縁日には、必ず相撲が行われ、学校や会堂等が新築されたり、公的な大きな行事がある時も記念行事として、相撲が行われた。

明治大正時代、町内に小行政区として「組」が結成されていた。北方東部地方を例にとってみると、海上・且之上・宝泉・西之側等があった。この組毎に小学校児童の自主的な少年団が結成されていて、お祭り事や相撲会が運営されていた。この少年団は、学校の指



曲里少年団のちようちん

導によるのではなく、又父兄の指導によるのでもなかった。先輩が残した伝統（ぶんづつ）によって、少年

達が自分の力で自主的に運営していたものであり、なお、友愛と礼儀と公平を中心とした立派な運営であった。

少年団のちようちんについてふれておこう。写真は、南方曲里少年団のちようちんであり、現在も保存されている。町内各少年団は、それぞれちようちんをつかって持っていた。少年団のシンボルで大切に保管していて、お祭りや相撲会の時使用された。ちようちんの数が少ないので五年生以上の者に配当があつて、自分のちようちんとして管理と使用が任される。このことが少年達にとって鬼の首でも取つたようにうれしく、又誇りでもあつた。そして少年団員としての自覚と責任が一層つちかわれていった。

少年団が主催する相撲会の運営について、北方東部地方の活躍の様子を紹介しよう。当時、北方東部に、海上・且之上・宝泉・西之側の四少年団があつた。各少年団は、毎年一回秋頃自主的に相撲会を開催した。準備の都合で日曜日の夜間に行われる。又他の少年団と期日が同じ日にならないように配慮をして期日が決

められる。四少年団が参加出来ることへの配慮である。経費の寄付集めと、土俵づくり、賞品づくり、夜間実施するため照明と保温のためかがり火をたくので、古木や木の切株などを寄付してもらおう。この木を「だいそく」といった。この準備が出来ると、他の三少年団へそれぞれ参加方の案内に行くのである。礼をつくした大人のような案内である。経費の寄付は現金で五銭か十銭位、白米三合から五合位いただいた。

相撲の晩である。「御案内有難とう」「よう来てくれました」との挨拶が交わされる。友情にみちた美しいことだった。東西の決め方は、各少年団の力士の人数と大体の力量が考慮されて主催の少年団が決定する。例えば、東は旦之上と西之側、西は海上と宝泉の少年団というように決められる。

いよいよ相撲の開始である。初めは「わり」という相撲である。力量の同じ位の力士を組合わせて一番勝負である。力士全員がつぎつぎと組合わされる。この「わり相撲」の賞品がふるっていた。「松風^{まつかぜ}」という菓子、おせんべいがあったが勝者が二枚、負けた者は



子供相撲

一枚が賞品だった。めったに菓子も買ってもらえない時代だったので、一枚か二枚のおせんべいの賞品が大変うれしかった。つづいて学年が決められたり、一度賞をとった者は出たはならないなどと

制限付で三番抜き、五番抜きの相撲がつづけられていった。相撲の最後は三役相撲である。小結び、中ぼね、大関と行われる。二役力士の決定も公平に、参加してくれた少年団に花をもたせるようにも配慮されていた。四少年団の力士も多数の出場だし、父兄も一つの娯楽として、又我が子の相撲なので力と熱が入って一勝負毎に歓声と応援の声がわいて年中行事の一つとして愛され、期待された子供相撲であった。夜空をこがすか

がり火のぱちぱちとなる音、花火のように舞い上る火の粉の美しさが印象的であった。

最後に大関の御幣ごへいを土俵の中央に立て、全力士が土俵のまわりをかこんで手打式を行う。「有難とう。お世話様、来年又ね。」が交される。大人のようなしぐさである。

参加した少年団へ、帰りの照明のためにローソクが配られる。伝統によって、いたれつくせりの運営と、友情と礼儀に結ばれた子供相撲によって少年達は美しく健全に育っていったと感銘を深くするものである。

金毘羅街道と桜三里

嘉永三年の道標が、中之町分署坂の米田屋の前にある。

そのころの松山方面よりの交通は、陸路であれば総てここを通過した重要な道であった。



分署の坂



道標

佐伯屋の前にさしかかる。

昔は数人の番頭に、女中まで使用する程の大店であったことをしのびつつ、横灘よこなだに至り、吹上池の北側を小鳥越とりこえへ。

ガリラヤ荘を後にして、ドンコ池に出て、鳥ノ子部落をさらに大鳥越へと進む。この地の事を小椴皮峠こひわたとも言っていたようである。

その道標には、正面に「讃洲金毘羅道」右側には「嘉永三庚戌極月吉辰」左側には「大門廿七里、願主米田屋仙助」と記されている。

これより、上之町の大宮神社の前を通り、旧



鈍齊先生の碑

下り坂の所には、三軒屋開発の先人「鈍齊先生碑」がある。

鈍齊先生は清水源左衛門信美、別号「休足堂鈍齊」

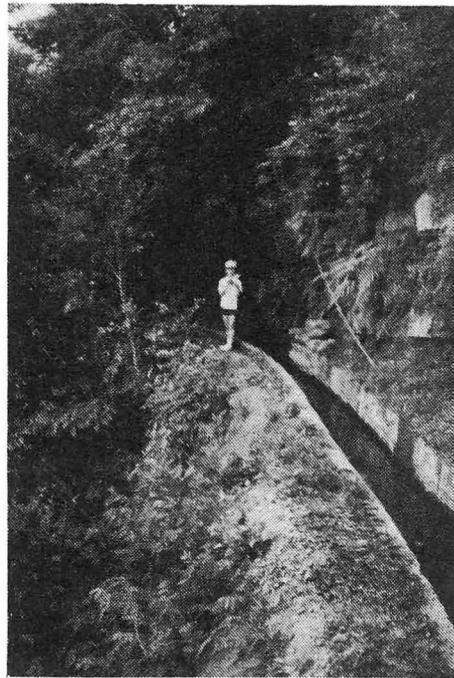
と稱し、元来松山藩の謡の師匠であったが、金毘羅街道沿いの三軒屋に住んだ。奥床しい人で殊に畑外の土木事業に熱心であった。

今から三百五十年前の話。三軒屋は灌漑用水をそこそこの小谷から引いていたが、早天かんてんの小谷の水は涸れ困っていた。鈍齊先生は意を決して土地の住民とはかり水路構築を思い立った。先ず三軒屋永寿橋ながひら上流から本谷川北岸の絶壁を掘り割り水路を造り音田下までのばして上流から本谷川の水を引き入れ三軒屋二十町歩の灌漑用水とした。

年を改めて鈍齊先生は三軒屋南部地の用水について、遠く添谷「ゆずりは」に池を造り延々水を引いて、船

野十五町歩の用水とし、船野山山麓に半里の水路を造って下窪畑を開墾し、五町歩の耕作を凶ったが地勢の関係で事業は成功しなかったという。

明治三十五年国道開通工事の頃まで、船野山山麓の下窪畑田に至る水路が延々見えていたと古老が話していた。



鈍齊先生が造った掘り割り

土地の住民たちは鈍齊先生を忘れず先生の碑をたてて、その功績を称えた。

三軒屋越山の登り口にある先生の碑は遠く世のうつつりかわりを物語っている。

その横を三軒屋部落に向かって行き、辻の坂を上れば二本の道標がある。

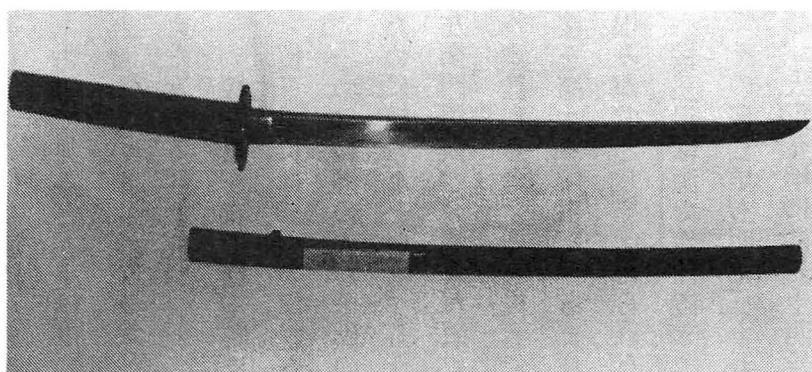
一本には「金毘羅道、施主世話人」もう一本には、

「大門廿六里、弘化四年」と記されている。

下り坂を降りて、三軒屋焼の前から永寿橋を過ぎ、中坪より、松皮へ着き、旧松瀬川小学校の跡を右に見ながら行く。昔は高等小学校まで併設されていた当時をしのぶ。

さらに進むと松皮の家並みの中に、花山光重氏の宅がある。

同家には伝家の宝刀が秘蔵されているというので、その由来を聞いてみると、昔松山藩の御家中が、奥松瀬川へ狩りに来たとき、鉄砲の操作をしているところを花山氏の先祖がその御家中の横顔を平手打ちにしたことがあった。後日藩から呼び出しを受け、どうなることかと心配して参上し「平に御容赦を」と、申出たところ、御家中は「何も心配はいらぬ。あの時とつさの平手打ちで身をよけさせてもらわなければ、命を落とすところであった。よく打ってくれた」と大変に喜



花山家に伝わる刀伝 関二代兼光

ばれ、そのお札にと戴いたのが所蔵の一刀である。無銘ではあるが、鑑定によると、関の二代目兼光の作だそうである。同家では家宝として大切に保存している。

歩を進めて、添谷口より右に折れると上り口に、御茶床という地名がある。休息所の跡で、七曲りを上れば松皮峠に至る。桜三里の中でも最も難所である。

峠より、伊予のサカサマ川といって、東に流れる川に添い一町程下ると、道の右に、五輪様の墓がある。

土谷の古老の話では、昔ここで、追剝三名が藩の家来によって首を斬られた所で、一人は即死、他の二人

も手負いとなり、本谷方面で死亡した由である。

また、進んで土谷に出る。部落の中程にある立石には「金毘羅大門廿五里」とあり、側面には、「土洲、久万山道」と記されている。つまりここは土佐や久万山方面からの交通の要衝であつたようである。さらに土谷小学校の跡を左に見て「茶七」という屋号で呼ばれていた昔の茶屋七兵衛の宿場跡を過ぎ、小僧地藏に頭を下げ、丸山を登り、盗谷を下る。そこには源太桜が二本残っている。ここを下りたところに、「曙橋」が架かっていた所がある。昔金毘羅のサヤ橋を造つた大工が架けたといわれ、橋には杉皮でふいた屋根があつたという。誠に珍しい橋といえよう。

橋詰めに、地藏様が建立されている。古老の話によれば、博勞が馬を数珠つなぎにして追つていて、次々と馬が川に流されて死んでしまったという。後にここを通ると馬の鈴の音がするというので、馬の供養のために立てたと伝えられている。

この地藏様には正面に「馬為菩提也」と、右横に、「嘉永六己六月」左横には「土谷茶屋七兵衛、米屋、

油屋」等と、五人の名が記されている。

これより左の方向に道を上ると、郡境の食堂に出る。さらに千原の茶堂場について、休憩したようである。

次に千羽ヶ嶽を左にみながら、鍋谷を通り落合へと進む。ここにも道標がある。

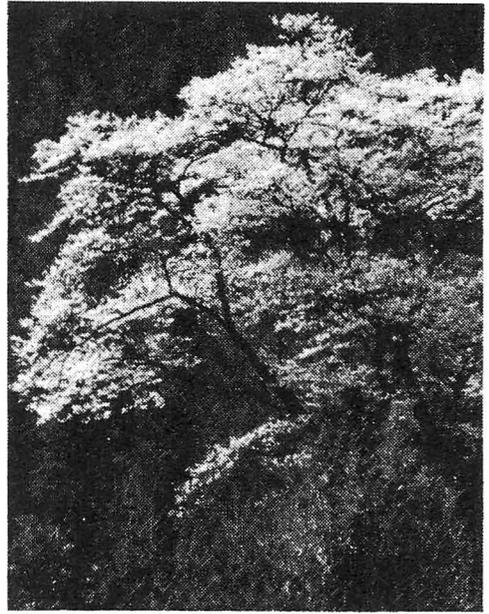
古書で見ると、小桧皮峠より落合までの間を桜三里と言っていたようである。この間に桜八二四〇本を植えたとある。

桜三里を夜で行く時は親にや是非なし妻恋し
桜三里には二つの伝説がある。

一つは鞍瀬の人が子供の死を悲しむのあまり供養のために植えたという。もう一つは、時の代官矢野五郎左衛門源太という人が植えたとある。八二四〇本という本数から考えると後者ではないかと思われる。その桜を植える仕事、あまりにも苛酷であつたのでその恨みが歌として伝えられたといわれる。

桜三里は源太が仕置き 花は咲くとも実はなるな

その桜三里も明治三十五年に国道三十一号線が貫通し、大正九年には二十四号線となり、昭和三十年の後



源 太 桜

半には国道が大改修されて、桜三里は一町道としての姿に変わり果てた。まことに今昔の感に堪えないものがある。

松皮峠にも一時は茶屋や二、三軒の家もあり、大野庄平さんの後を受けて橋本政次さんが、客馬車を横河原まで走らせていた時代もあった。

横河原橋と

交通の移り変り

昔の金毘羅街道に、二つの難所があった。その一つが、道後平野から道前平野に通ずる桜三里で知られている中山越えと、他の一つが、雨天時の重信川の横河原渡しであった。

川内町と重信町の平野部分の地形をみると、山之内の出口大畑おほはたけを中心にして、東は海上・原沖・下沖の線と、西は樋口ひのくち・志津川・西岡の線で、扇形の地形をしている。重信川は時代によって、洪水で東側の川内町の高台を浸蝕しんしょくし、また西は重信町の山すそをけずったり、大雨洪水で常に川の流れは移動していた。重信川が現在の位置に大体固定した後も、出水によって交通は難たぎ洪たぎしていた。

古老の話によると、江戸時代の終わり近くまで、降雨で出水すると、川止めになったり、川水が多少減水すると、川渡し人足によって川を渡してもらっていたらしい。茶堂部落の重松自動車修理工場の西側あたりに人足だまりとあって、川渡しをする人足が控えていた場所があったといわれている。また、川渡しの経理面で伝票が用いられていた。最近までこの伝票を保存していたという人もいる。人足による川渡しは、川水の水量によって、背負ったり、肩車したり、四人かつぎの乗せ台にのせてかついで渡したりしたので危険なことで、人々は大変難渋したものだ。

明治の前半までは、所用で松山へ行くのに、往復八里を歩いた。一日がかりの仕事だった。明治二十六年伊予鉄道の汽車が平井まで開通した。つづいて明治三十二年、横河原まで開通した。汽車の開通で交通は非常に便利になった。

明治三十五年、国道三十一号線が香川県から松山まで大改修された。周桑郡湯谷口から土谷までは、大體現在の国道十一号のように改修され、土谷から川

上までは松皮峠を越し、船野の山麓を通り、三軒屋・瀧の下へと新道が貫通した。今までの桜三里即ち中山越えは急坂で、道が悪く、徒歩か、かごに乗っての交通だったが、車や自動車の通る広い平坦道路に改修された。実に画期的なことであった。産業の振興と文化の向上に大きな役割りを果たしていった。

大正初年の頃、川内町で「乗合馬車」が出現した。松皮峠から川上・横河原駅へ、また河之内金毘羅前から川上・横河原駅への二線の客用定期馬車が、ラッパをプー、プーと鳴らしながら走った。パカ、パカと走る馬車の窓から、過ぎ去りゆく景色や、移り変わりゆく景色をみて、乙なものだったとはなしてくれた人もいた。料金は川上から横河原まで十五銭、川上から松皮峠まで十五銭だったと聞いている。

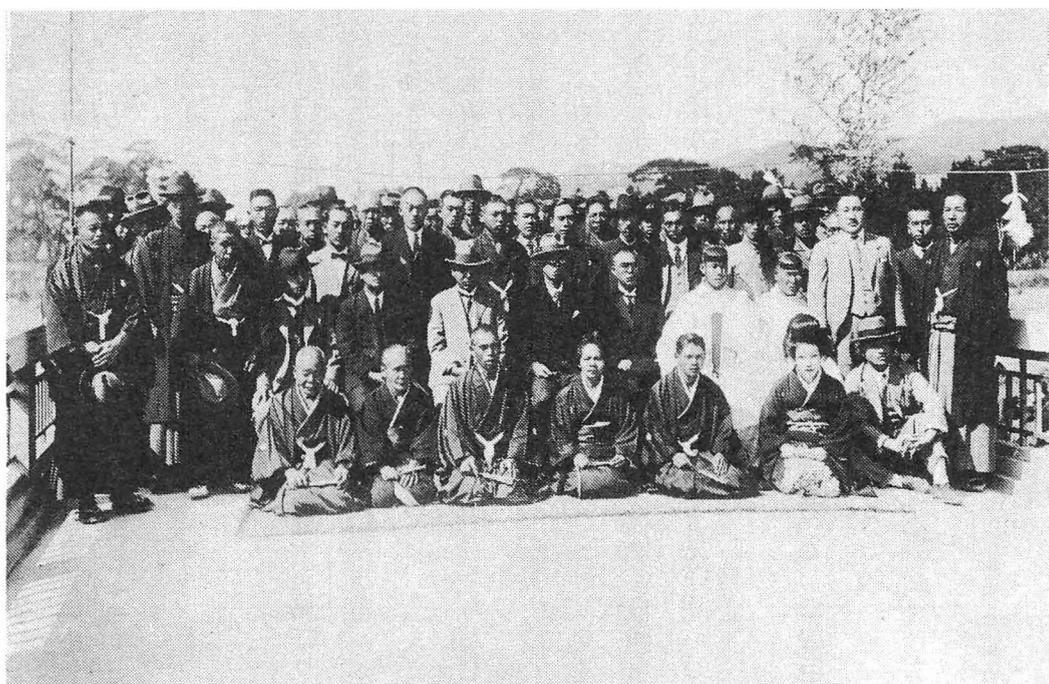
汽車の開通、馬車の出現で交通は便利になったが、重信川の横河原渡しには困っていた。河水が平常流れているのは、河原の中央あたりであったので、この水の流れているところへ橋がかげられた。しかし大雨が降ると橋が流失してしまう。流失すると又かける。自

然との戦いのようでもあった。流されない本格的な架橋が要望されていった。

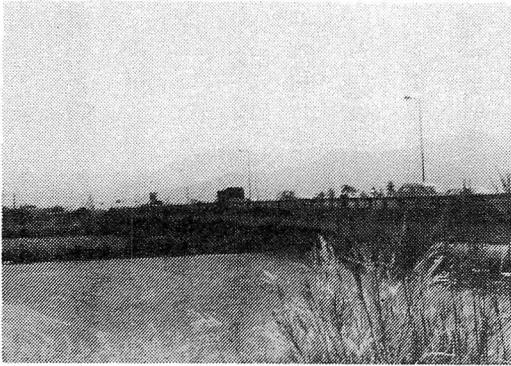
大正八年頃、この夢が実現した。木橋であった。全長一三〇メートル、高さ三メートル、今まで見たこともない長い橋、実に夢のかけ橋であった。茶室側の欄干らんかんの南の柱に、「札の辻より三里半」と字が刻まれていた記憶がある。

大正十二年、川内町市場の越智營六氏が定期自動車運行の営業をはじめた。川上自動車である。定期的に六人乗りの小型バスを走らせた。川上から河之内、川上から横河原駅・松山へと走らせた。個人経営であった。地域の人々は、先覚的な越智氏の事業に賞讃と敬意を表したものだ。二ケ年後、周桑自動車と合併して事業は大きく発展していった。周桑郡小松町へ定期バスを走らせて、道後平野と道前平野をつなぐパイプとして大きな役割を果たした。

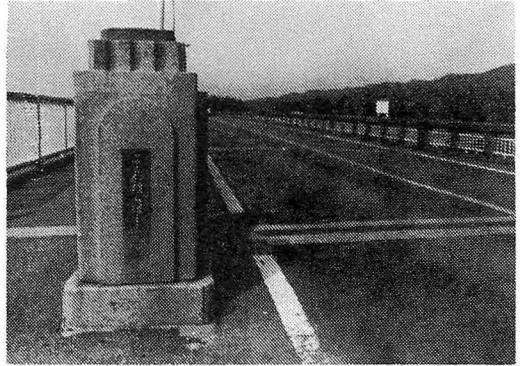
文化の進歩と共に、交通量の増大、交通の重量化等への対応として、昭和五年、コンクリート橋に改修された。また、その後も改修されて、歩道も付設され、



昭和5年 横河原橋渡り初め記念



横河原橋の遠望



横河原橋（コンクリート橋）

堂々たる美事な現在の横河原橋となった。

橋は何も語らないけれど、過ぎし日の、変遷の数多い思い出を秘めているし、現在も毎日の事象を見守っている。

コンクリート橋に改修された時の渡り始めの写真である。

一家で、祖父母・父母・子夫婦の三夫婦のそろっていられる方が選ばれて、通りぞめをするのである。

西中村の篠原家の方々のお顔が見られる。

横河原の両岸には、

三〇〇年をこす巨松が立ち並んでいたものだった。それが一本一本と枯れていった。横河原町の旧道の坂を登りつめたところに一本巨大な松が残っている。この巨松の近くを、かつて昔の金毘羅街道が通っていたと思われる。

三〇〇年間、横河原渡しの難所の様子を見守りつづけてきたことと思う。金毘羅街道を往来する、ふりわけ荷物を肩に、脚絆、草鞋姿の旅人や二、三人づれの金毘羅詣での人々、又、石鎚信仰の信者たちが七月の「お山開き」の頃、白装束でホラ貝を鳴らしながら、時には団体を組んで往来した様子など……。交通も、歩くことから、かご、馬、人力車、馬車、自動車、バスへと移り変っていった時代の進歩を見守りつづけてきた。そして横河原橋の変遷も……。

巨松は歴史を見つづけてきたと思うと、この巨松にひとしおの愛着を感じてやまないのである。

貯金先生

岡山正利先生は、大正の初期に、校長として土谷小学校に赴任してこられた。そして、九年間も勤務された。当時、土谷部落で現金収入の仕事は、主として山



岡山先生

林作業、製炭等であった。生活は豊かであった。従って浪費型で、雨でも降れば、国道筋の店先は酒飲客で賑わっていた。

貯蓄に対する観念はなく、頼母子講がぼつぼつあつたくらいである。郵便貯金などは、おそらくだれもしていないかっただろう。

岡山先生は、一念発起され、部落の人に、貯蓄心を昂揚させ、万一の事態に備えねばならないと、土谷部

落中を一戸一戸「郵便貯金を始めましょう」と説いてまわられた。その熱意により、全戸が加入したとのである。その集金については、先生自身がこれに当たり、校長、教師と多忙な身なので、主として夜提灯をさげ、近くは草履ばき、相の谷等は草鞋ばきで、『又お初穂を集めにきましたよ』と、倦むことなく続けられた。

学校においてもほとんどの子供達が郵便貯金通帳を持つようになった。

その頃の子供は、お年玉や、小遣い等大人からもらうことはなかったが、子供でも山から薪を運んだり、三極や楮の皮をはいだりして金を儲けた。また、その頃は養蚕が盛んであったので、小学生でも蛾一匹分の幼蚕を分けて貰い、山桑を取ってきて、親とは別に飼って少しの繭を作り、それを学校へ持って行き、まとめて売ってもらった。

先生は、そのような世話までよろこんでせられた。

それらの金額は一銭から集められたが、一銭では郵便局が預ってくれないので切手を買ひ、シートに貼り

一定の額に達すると預ってもらえた。

通帳の備考欄に「切手」と、朱印がおされていたのは、切手シートからの記入額であった。

校下の人達は先生を「草鞋先生」「貯金先生」と敬って感謝をした。

現在七十五歳の老人の郵便貯金通帳は、その小学校時代から延々と続いた幾冊目かのものであるとのことである。

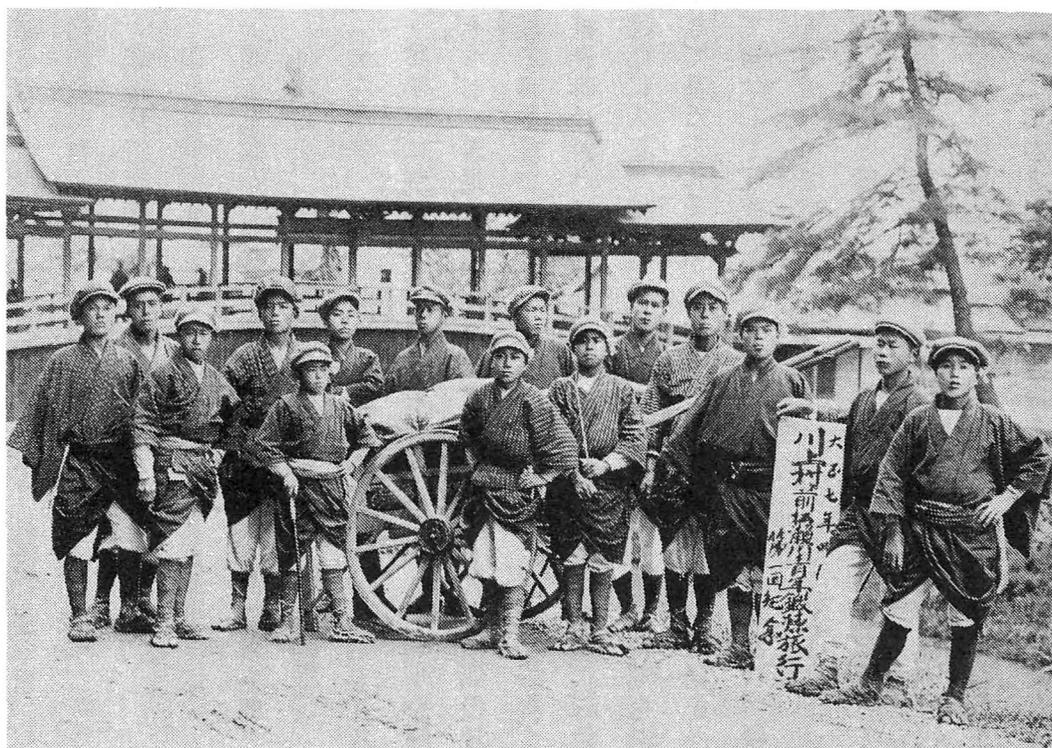
このような先生であるから転任された時は、去る先生も涙、残る校下の人達・大人も子供も別れを借んで、椋皮峠を越えるまで見送る涙の別れであったという。

土谷校五十周年記念式典には、先生をお招きして久しぶりの再会を手を取り合つてよろこび、昔の話に旧交を温めたのである。その時、先生が教職の身で異例の逋信大臣表彰を受けておられることを知り、全員がわがことのように喜び合った。

川上村前松瀬川

青年団の金毘羅参り

待望の金毘羅参拜に、沿道を見学しながら鍛練旅行をしては如何と計画したところ、多くの賛成を得て準備を整える。まず、荷仕度。鉄輪の棹車を借りて、米二斗、炊事用具、毛布、草鞋、ちよつと日持ちする野菜、雨具等を積み込んで、大正七年四月二十一日、天候に恵まれて、一行十五名元氣よく出発。当時は作業服もなく着物にシンボチカラゲ、ズボンに脚絆、草鞋鳥打帽子、写真の姿で車の先引き、後押しで軍歌を歌いながら、勇ましく椋皮峠を越す。カーブの多い、曲りくねった椋三里も中山川に沿って下り、周桑郡石根村青年団事務所で依頼して昼食。西条加茂川の青石の多い清流で茶食する。午後七時新居郡船木村役場到着、



大正7年 川上村前松瀬川青年鍛練旅行

意を通じて、婦人の方々で懇切こんせつに食事の仕度をしてくれた。楽しい一日を反省して就寝。

翌二十二日、曇天。厚く礼をのべて六時出発。七時関ノ戸を越えて宇摩郡に入る。九時豊岡村より三島まで馬車について走った。十二時、三島神社で昼食。午後三時製紙工場の町川之江を後にして香川県に入る。

箕浦での茶食の時、副食物の皿数が足りないので分け合って食べた。和田浜で四時、雨となった。

これから道を右に取って、琴平町に向かう。辻村小学校六時、名刺を通して私達は青年団の鍛練旅行であるが一宿を願いたいと乞う。快諾を得て自炊。食後夜学を見学した。

二十三日 晴天。三時起床。自炊。厚く礼を述べて出発、伊予見峠六時。讃岐富士および鞆橋を觀賞して八時待望の金毘羅参拝。高い高い石段であった。九時昼食、ゆっくり庭園を觀賞し、鞆橋で記念写真を撮影。今も写真は語りかけている。

若かりし十六歳の美少年も、六十五年が夢のように

過ぎ去った。同志十五名の親友も今は健在なる者三名となった。故人の冥福を祈る。

鍛練旅行に参加した者

田井俊明、成谷秀一、橋本義之、大石運平、

高須賀俊一、高須賀慶次郎、森秋平、渡部荒太郎、

仙波安正、佐伯文四郎、近藤金太郎、仙波鶴雄、

大石岸春、小倉仲四郎、渋谷忠一郎 以上十五名

琴平町に別れを告げて、象頭山五二メートルを仰

ぎつつ、善通寺に参拝。仏道を修養する若い僧侶の読

經きやうの聲が続いていた。十二時、三豊郡上高瀬で昼食。

観音寺に着いて琴弾八幡神社参拝。豊浜を後に六時愛

媛県に入る。川之江に午後十時着。集会所で時刻を過

ぎて甚だ失礼ですがと名刺を通して嘆願した。快諾を得

て自炊して、思い出の多かつた今日一日を語りつつ肩

を寄せ合つて就寝。

二十四日晴天。起床五時。ねんごろに謝辞を述べて

六時出発。製紙工場を見学。懇切に案内してくれた。

土産物の記念品にと紙二十束を拝受した。厚くお礼を

述べて、川之江を後に、三島を経て豊岡野田で昼食。

関ノ戸峠を越えて船木役場で、去る二十一日夜の礼を述べて去る。

新居郡飯岡村小学校七時着。「川上村青年団鍛練旅

行の者ですが一夜の宿をお願いいたします」と嘆願。

快諾を得て自炊。一同毎日の疲れで就寝。

二十五日晴天。四時起床。今日はいよいよ帰村だ。

五時礼を述べて足早やに出発。中川村の熊野神社を参

拝して十一時昼食。勇ましく軍歌と共に桜三里溪谷けいの清

流のささやき、千羽嶽四〇二メートルの麓に銅坑の旧跡

がある。小学生のとき銅の小石を拾った昔を思う。松

皮峠を見下ろして我が川上村は眼下に午後四時。一人

の落伍者もなく凱歌を上げた。

四月二十六日雨天。ちようど骨休みだ。ゴモク飯を

炊いてにぎやかに思い出を話し合い、長旅行の計算。

経費合計一円二十銭也。

鞆橋での写真は永久に語りかけるであろう。

善通寺町は多
善通寺考
善通寺考

大田
上高瀬

下藤岡
流岡

観音堂前
琴澤八幡宮
浮津

鞘指で記念写真を撮り
遊園を観望し
九時より昼食
其い、石殿で
待合又金平神社を拜
讃岐富士及鞘指と朝賀
仔子見峠大附
十三日晴天

过村小学校午後大船借泊
この水は道に右に取って琴平町に示

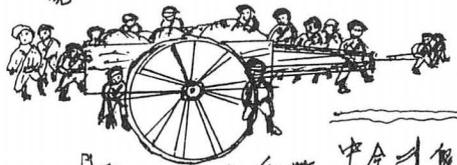
豊和田坂で雨の降る
午後三時着湯島にて
十二時三十分着湯島にて
三島迄二里の道に
宿舎新田村あり
二十一日湯島大船乗船

夜場は山内にて旅行一夜にすした
E-7項にて毎半に作した
婦人公堂にて懇切に夕食を準備

午後七時新田村船木村快砲
石根青年会堂で夜食

在るう山々神降り
杉皮峠中山川を下り
杉皮峠の温泉大浴場
獄輪の湯車に苦痛を覚へて湯を飲ぶ

川を前臨み青年団
大正七年四月二十一日由巻 一行十五名



香川温泉
午後六時温泉に帰り

川之江午後十時着
善会所にて宿を得て
思ひ出り夕方の今日一日の
旅の行軍は推察を替りつゝ
眉と事を含めて夜枕

二十四日晴天
川之江に製紙工場あり

湯島温泉にて昼食
湯島温泉にて昼食

湯島村にて二日。花を運へて去る
別子山より新田河川鉄橋を渡り
飯岡村小学校を夜七時
飯岡村より一宿を借し自炊

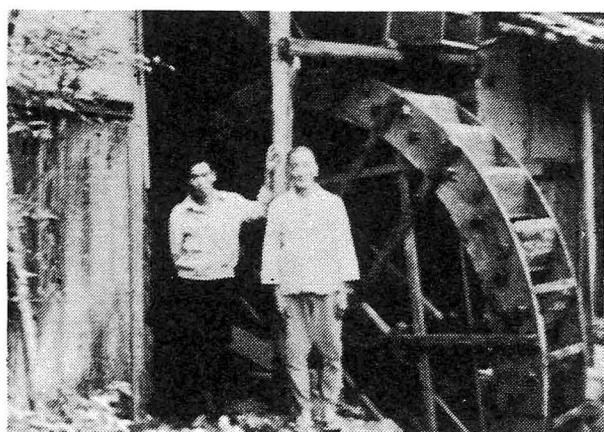
今日湯島村にて五時着
中川村湯島村を午後夜食

飯岡村の温泉清流のさき
千羽織の籠に鯛を
小の字生う時に鯛名を替りた
昔を思ふ
杉皮峠を見下して我が川上村
を眼下に午後四時一人の其後
若くは丸瀬を止りた

河之内音田の繁昌記

この写真は、大正の始めから昭和二十年ころまで、水力によって、米麦を精白した精米所である。

今から約百年くらい前の明治の初め頃までは、



水車

上浮穴郡笠方村方面の木材、薪炭、しいたけ、雑穀類を松山方面へ運送するため、狭い山路を通行して、黒森の近くの割石峠を越えて河之内間屋部落を中継地として、物資の集配を馬の背や人の背

負いまたは猫車や手車で行っていた。明治の三十年ごろ、黒森峠付近の官山の木を伐採して、弓折山より索道で運んで製材をした。市場とか駄馬の地名があり、おがくず淵の名があるのも当時の名残である。また日浦部落の山へ木馬道を作り木材を余野、松尾を経て運んだ。運搬終了後は、黒森山路は音田へ通じ、問屋に代わり物資の集散地となった。

明治の末ごろから、音田は日用品店や倉庫業者が出来、笠方地方と物資交流が多くなった。大正の初めころには酒造場が出来て「八重桜」「仁喜長」の地酒を販売した。また、やぐら搗きに替わって、水車で精米をした。倉庫業兼日用品店が七軒、下駄屋一軒、三河屋と瀧本屋の宿屋二軒、飲食店も兼業していた。上浮穴郡より来る物資は荷車が四、五十車。入れ代わり立ち代わり運送する。地元の荷車も十頭くらいはいた。黒森山路は狭くて、そのうえ余野と松尾坂の間は石墨道で雨降りの日はすべて特に難儀をする。音田より松山、三津、西條、郡中方面へは荷馬車運送業者が八名くらいおり朝は早く夜はおそくまで働いた。昭和

五年ころ「トラック」が二台音田に入り、馬車と競走をした。そのころの子供は音田の町と呼んでいた。また三味線の音も聞こえ節句ころや夏は雨瀧公園で賑わっていた。三津の魚売りは河之内が終点のため投げ売りをするので「魚買うなら河之内、薪炭買うなら三津が浜」というのが当時の流行語であった。大正七年ころまで音田の町は全盛であったが、松山、久万間の街道が砥部久谷方面に完成してから年々衰え始めた。炭俵に使用の縄も売れゆきが悪くなったが、養蚕は持続していた。

明治の中頃まで医院を開業していたという家が今も残っているし、学校敷地跡も大門と宮の元の二ヶ所あって田畑となっている。現在は五十年昔と比べたらあらゆる物が文化時代で進歩しているが、昔の盛んな時代の活力はなく寂しい。どこも同じ山間の部落となつたのである。繁昌期時代の日用品店が二軒と酒類販売店が一軒合計三商店が、後継者として土地の人のために便利を計っている。なつかしい思い出の店である。

お灸とまじない

古くから「ふり米」という言葉が残っていた。これは麦、芋、雑穀を常食としていた頃、貧民が長引く病気の時や今際のきわに米の入った袋を枕許で「これこの通り米がある。これを食べて元氣を取り戻せ。」と勢づけた物語で、今では明治生まれの老人でもその経験はない。それ程お米は美味しく滋養に富んでいたが、庶民には高嶺の花で手が届かなかつた時代があった。その滋養で連想されるのは、肉、魚、果物等で、肉類は昔から四ツ足は食べないといういわれから、食膳に上がらない。魚も赤い鯛類は高価で、病人向けでしかなく大衆は青い鯖、鰯などで辛抱していた。松前の魚売女さんが持つてくる煮干、干物で十分まかっていた。

野菜、果物は自作すれば豊富にあったものの、その



灸 お

種類も少なく味も形も野生に似たまずしいものだった。鶏卵も農家に四、五羽飼っていた程度で、もの数でない。

大正の初期に宮西区に高温滅菌の生牛乳が出来たがこれを飲用する者は

は余程の裕福者か、重病人に限られていた。

育児は総て母乳を与え、乳の出ない母は近くを走り廻つてのもらい乳か、重湯にジヨウセン飴を混ぜ、絹布で乳豆をつくり、嬰兒の口に含ませる。そのため空腹か栄養失調で夜泣きをする。母子もろとも枕をぬらす夜も度々であった。この惨さにたまりかねた母は、乳地藏さんや子育て観音に日参したり、あるいは乳もみ婆さんを訪ね施術をしてもらった。この思い出

は今の老人の頭の中にある。

医薬品は越中富山、大和奈良、近江八幡あたりからの置き葉があつて年に二、三回入れかえに廻つてきた。柳李の重ね籠に詰め、大きな黒い風呂敷包みを背負つた脚絆姿は印象的で、帰りには四角い紙の風船やゴムホウズキを置いて行つたのを覚えていた。

大道芸人が言葉巧みに売りさばく蝸蝓油は傷薬に、また、手風琴で客寄せして売る正露丸の胃腸薬はよく効いたし、その他漢方の生薬も、軽い風邪引きや腹痛には充分間にあつた。

その頃にも何人かの開業医はいたが、入院の施設はどこにもない。もし重病人が出た時は、組中の屈強者が出て雨戸板に乗せ、交替でかつぎ松山へ下げる。従つて人力も費用も大変で、ひと財産をつぶす場合もある。

明治、大正の頃、上之町に仙波磯次郎という岡山医専出の若い医者が出て、その頃としては珍しく自転車です、又、遠い所は馬で往診に出かけるスピードぶりだったが、診察が終われば接待を受けて帰る悠長さもあ

った。医療費は益・節季の二回払いで、それも掛取りさんが集金して廻る習わしだった。

病気が長引いたり、不幸が続くと、迷いに迷った末医者に向わず、山伏、巫女の占術や祈祷に走った。

道教から来る方位や生まれ年によって異なる六・三の星占いに除厄の心願をする。祈祷の最中に生霊、死霊、さては犬神・猫神などの姿が現れ、恨み言を並べたり屋敷神さんの祟りとけしかけると信者はたまらないうでない。今も節分の日には社寺で追儺（ついな）の鬼打ち招福の行事がいとも厳肅に取り行われて善男善女が参拝している。この行事は真言密教のある限り将来も続くであろう。

鍼灸の施しも忘れられない。四国は弘法大師靈草の道後温泉湯晒御艾の施術もあつて、足・腰・背中患部、いわゆるツボに灸をすえる。柔らかい皮膚に直接火であぶるので、焼けつくような痛みがあるが、それも気持よく我慢できる。

子供に疳虫が出たといつては、母は泣く幼子を両膝

でおさえて灸をすえた。「可愛い吾が子に灸をすえる」という鉄火のような熱い愛情と氷のような理性を今日の甘えの世界にある母子に求めるのは無理であろうか。その灸も月によって違う。ウンコウ日には効き目がないと忌み嫌う。

衛生思想も対策も哀れなくらい幼稚であった。

コレラ、赤痢、チフスの悪疫が流行しかけると、隣組中が総出で境界線に縄を張り巡らせ、それに鬼や天狗の面をつるし、あるいはめっぼう大きい草鞋をぶら下げて病魔を威喝した。

ここから組中へ入るな、との印だ。なおこれにあき足らぬ連中は、怨敵退散と神仏に祈願して自らを慰め、その後で組連中や親類縁者が飲食を共にする非常識なことも平気です。現在、南方の発展途上国では、こうした風習がテレビに出ているが同じ心境であろう。

川上地区では、宮西区に藁ぶきの避病舎があつたことを知る人は少なく、下沖団地に四方を枳殻樹に囲まれた瓦葺の堅固な建物があつたのはつい最近のことです、知る人は多い。三内地区の避病舎は、一ヶ谷の小

高い丘の上にあつた。

住民の衛生は、役場と警察が担当していて、患者が出る時、白い事務服を着た衛生係と人夫がきて、生石灰や石炭酸を散布する。中には世間体を恐れて患者を隠す風潮があつたことも否めない。そういうことが病気のひろがりのもととなつた。年一回各戸の大掃除も義務的に行わされ、その成否をサーベル帯刀の警官が臨検して廻り、違反者は料金が罰金に処せられる厳しいものだつた。

いちばんに悩まされたのは蠅・蚊・蚤の三敵で、特に梅雨期に田に出た牛馬の仲介で追えども押し寄せる黒い蠅の群集で焦げた麦飯が一層黒く映つたが、空腹を抱え重労働にあえぐ農民は平気でこれをかき込んだ。蚊も蚤も夏の短夜の安眠を妨げた。

女兒の頭には黒くて長い毛虱がわくと、すぐに級友に移り勉強に響く。時代は少し下るが終戦時に大陸から連れてきた白い麦粒大の虱は主婦を驚かせたが、D T等で今では昔の語り草となつている。

大正から昭和の一桁時代をピークに肺結核であたら

有為の青年が秋の落葉のように散つていった。それも秀才型の者が多く、人生もイザこれからという時だけに惜しみても余りがある。この病は遺伝するか、伝染するかいずれにしても不治の病として恐れられ、時には家族の縁談にさえ影響したとも聞く。結核は当時の死亡率の第一だつたが見奈良に国立療養所が開設され療法が進歩するようになり、今は治療し易く、これを恐れる者はない。現在南方の開発途上国ベトナムでは飢えと結核に呻吟して我が国半世紀前と同じ道をたどつてゐる。

前松瀬川主婦会の歩み

主婦会員 六十五名

戸主会員 三十五名

青年団員 十 五名

女子団員 二 十名

(当時は処女会員)

大正の初期、世界的な不況がそろそろ日本の経済界に及び寄りつつあり、四国の峰に風さわぐ頃、若き小壮実業家として鳴らしていた故仙波茂三郎氏は、我が郷土松瀬川に理想郷を建設しようとの理想に燃えて、

大正四年二月「前松瀬川戸主会」を設立した。続いて一家の繁栄は夫婦の和合にあるとして、車の両輪の如く「主婦会」の創立を進め、四月二十八日第一回主婦会の設立総会を断行し、ここに前松瀬川主婦会は創設されたのである。

当日来賓として、左記の諸氏の御来席があった。

露口松山高等女学校長 古谷郡農会技師

松木川上村長 大野川上小学校長

佐伯文四郎 名越啓次郎

川上小学校職員 六名

文字通り部落の総力をあげての設立総会となり、仙波ユイ女史が初代会長に就任、盛会をきわめ力強い出発とはなったのである。

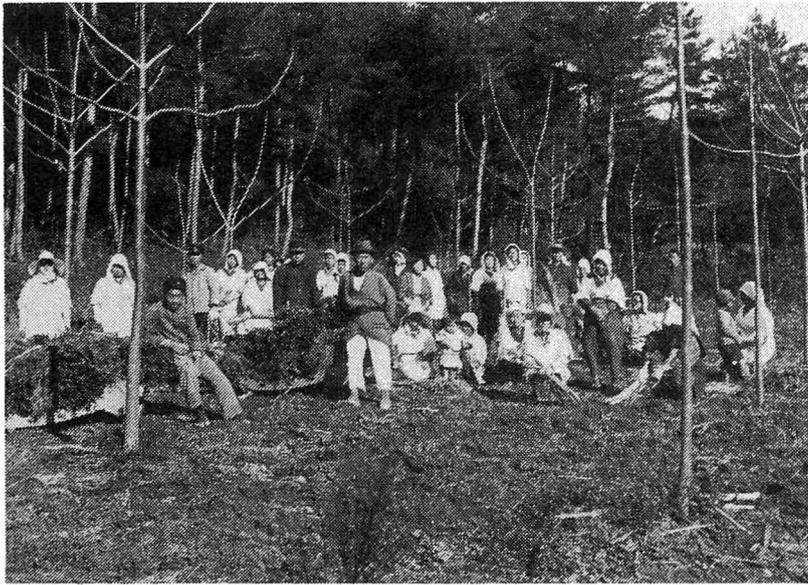
最初戸主会は備荒貯蓄を奨励し、主婦会は毎月主婦会貯金を励行する申し合せとなり、現在に至っている。年一回高齢者を招いて敬老会を催してきた。

会員の死亡に際しては訃報に接するや戸主の者は戸主会員が、主婦の者は主婦会員が、葬儀に参列し、哀悼の意を表し、故人の冥福を祈ってきたものである。

毎年の総会には名士高僧等を招請し、講演訓話等をきいて婦徳の啓蒙にも努めてきたものである。

大正十年、主婦会の誕生より七年の歳月が流れた。

会の役員も長年の指導と体験により、堂々とした役員に成長していたし指導力も身につけてきた。すべて



昭和16年 川上村松瀬川主婦会共同作業桐畑

の行事に率先して範を示すようになった。

この年四月、黒穂山に山畑を造成し、桐苗二五〇本を植えこみ、会員の手により育成されていった。十月よりは、蔬菜そさいの委託販売所を設置し、川端商店、魚

又商店を委託販売店として指命し、処女会の手により集荷搬出して販売するようにした。

川上村くらいで消費する野菜は、純農村である村内で自給し、営農改善の一助にしようという気持で出発した運動であった。

主婦会には仙波茂三郎、三津山保太郎の両氏が顧問となり、大変な熱意で指導し続けてきたものである。

その功績は、忘れてはならないものであって、記録の各所に見られる。それは純粹なまでに理想郷を建設せんとの執念にも似た一念であり、人作りであった。

大正十一年には皇太子殿下行啓の記念事業として、また、山畑二反歩を開墾かいくんして、竹林の造植を実施した。

このころより伊予いよ紼ひなを会員の手で織るようになり、三反以上織った人には賞状を贈り奨励金も出して励ましたものである。その後農家の副業として定着し、隆盛の一途をたどった。記念のために一人ひとりの織り切れを集め、主婦会で保存しているが、五十六名の多きに達している。

この年、主婦会歌作成の相談をしている。

十二年三月の総会より、松瀬川主婦会の歌は歌い続けられて行く。

松瀬川主婦会の歌

- 一、東に高き石鎚の 雪の姿のうるわしく
西はるかなる小湊の 浜辺の波の静かなる
二、ときわの松の影うけて 流れたえせぬ谷川の
音も清けき松瀬川の 我が住む里の目出度さよ
三、外にあらすだすきかえすいたずきふかくしのびつつ
内に家おしおさむるは 農家の主婦のつとめなり
四、農事は国のもといぞと かしこきさとし身にしまて
村のみためをはかりつつ女の道をいそしまん
五、そのいそしみはやがていま五尺の稲の穂にいでて
咲くや盛かりの富の花 栄え久さしく仰がれん

景浦先生の作詞

主婦会員の口よりこの歌は堂々と歌いつづけられていった。外にあらすだすきかえす、いたずき深かくしのびつつ、不況の中に一家を持ち赤貧せきひんの中に子供を育てつつ親達が夫婦して唱和し、そこに限りない愛情も生まれていった。一步一步理想郷建設の道は開かれて



下刈間伐作業

行く。
大正十三年、戸主会との協議と協力により渋谷山へ主婦会の基本財産として青年分団（植林）の隣りに、九反二畝歩、松の植込みを実施する。毎年会員の手により、下刈間伐を

行い、美事に成長していった。

この年また伊予絣織り高の表彰があった。

- 九〇反以上 二名
五〇反以上 三名
二五反以上 一名
二〇反未満 一三名

この年は織り高の数も最高を示し、品評会出品者も五十名に達した。それで当時の女の現金収入は伊予が

すりの織り賃が第一番であった。

世界的な不況はますます深刻となり、部落の大地主は次々に倒産してゆき、農地の異動も激しくなり、今まで小作者であった農民が次第に自作者になって行った。

養蚕もこのころより盛んになった。そして一時は部落のほとんどの家が蚕かじを飼うようになった。米国で人絹（人造絹糸）がつくられるにおよんでわが国の生糸は大打撃を受けるにおよび、養蚕もやがて下火になった。昭和九年に大かんばつに見舞われた。ほとんど米はとれない状態であった。

この年の戸主会の総会に、私は青年分団の代表として招かれ出席した。時の会長三津山保太郎氏は「今年は無曾有の大かんばつで部落も大変な年である。しかし私は一年くらい米が取れなくとも微動だにしない。なぜなら私には備荒貯金があるからだ。戸主会設立の時から懸命にみなさんに備荒貯金を勧めてきたつもりである。非常時に備えるというのは今のよう時に備えておくことなのだ。常に備えている人といない人と

では天地の差である。一日一日、牛のよだれのように気長く貯めて、備えていくという心掛けをけっしてばかにしてはならない。私は金額をいうのではない。その心掛けをいうのだ」と実に声涙せいのともにくだる指導であった。私は初めて戸主会の総会に参加し、その熱意と、すさまじいまでの指導者の真剣さに打たれたのである。それは生涯忘れることのできない思い出となった。

またある家では、娘さんが年頃になりお嫁入りがきまった。親父は今年の米代くらいは持つて行かれるだろうと覚悟していた。ところがある日嫁入り道具一切が運びこまれた。仰天まよてんした親父が、「おかあ、これどうしたんぞ」というと、母親はにこにこ笑いながら、「私は娘が生まれた時から、せめて嫁入り道具は私の手でと思い貯めていた主婦会の貯金をおろして来たんですよ。」と平然と言つてのけた。しぶちんの親父が絶句して目をむいた。

この話を聞いた三津山翁の頬にはしてやったりと、にんまりと微笑が浮かんでいた。それは老いにしかつ

ての指導者の心からなる満足のほほえみであった。

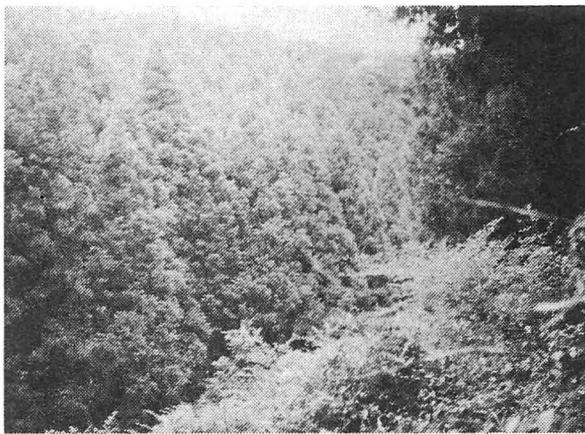
昭和二十一年九月二十九日第三十五回総会において永年勤続の役員に表彰状と記念品が贈られた。氏名を左に紹介する。

二十四年	三津山リュウ	十二年	大石	久技
十九年	田井 カタヨ	十一年	大石	隆子
十八年	仙波 カメ	十年	渡部	シンヨ
十八年	高須賀 政栄	十年	高須賀	ダイ
十五年	仙波 ユイ	十年	山本	キヌ
十四年	仙波 イワノ	十年	渡部	センヨ
十三年	酒井 サキヨ			
十三年	藤山 シズ子			
十三年	三津山ミネヨ			
十三年	寺田 スミ子			
十三年	田井 テル			
十二年	仙波 タメ			

以上十八名の方々は草創期より主婦会の役員として、寝食を忘れて永年努力してきた人達である。すでに大方は故人となっておられる。この方々によって

仙波・三津山両顧問の念願であった理想郷の建設、物心両面の成長の助手として、主婦会発展の原動力となった功績は、忘れてはならないと思う。

日華事変から発展して突入した第二次世界大戦も昭和二十年八月十五日、ついに敗戦で終わった。長い悪夢のような戦争であった。戦後の混乱から、ようやく日本も徐々に経済的にも立ちなおっていった。農地解放により、ほとんどの農家が自作農となり、機械化への道を歩みはじめ



美 林

農村の様相も一変した。

主婦会も、若い世代の手により、堅実な歩みをつけて行っている。

昭和三十四年二月十四日、主婦会の山が松山市の渡部製材に一〇〇万

円で買われて行った。先輩達の苦勞が今実ったのである。早速公民館の台所改善に当てた。完成後、先輩古老の勞をねぎらう慰安会を催したところ、感謝された。残りは基本金にして、一号山、二号山の植林育成費に充てている。

その植林も、一号山―九反二畝、二号山―一町五反共に立派に成長している。いまでは草創期の人達はほとんど故人となられ、二、三の人の名を留むるのみである。明治は遠くなりにつけりの感ひとしおのものがあ



松瀬川主婦会のみなさん

る。
伝統と歴史の重みを双肩に、若い世代の婦人たちの手で、松瀬川の主婦会はがっちりを守られている。

「雪窓会」の思い出



雪窓会の会旗

この写真は、今から約七十年前の大正初年頃から、昭和二十年頃までの間、旧川上村・三内村の出身者で松山の中学校・女学校へ通学していた学生の会、「雪窓会」の会旗である。

昭和三年頃、市場に塩出酒造店があった。塩出家に娘さんがいて松山高等女学校に在学し、雪窓会会員であった。家庭の都合で、アメリカへ移住していくことになったので、別れを惜しんで雪窓会で送別会を催した。一家は大変感激されて何か記念にと、この会旗を寄贈して下さった。友情



昭和4年度 第15回 雪窓会卒業記念

で結ばれたうるわしい会旗である。蛍と窓の雪がデザ
インされている立派な会旗である。(現在川内中学
校に保管)

「雪窓会」という会の命名については学生全員でよ
く考えて、学生らしい希望にみちた会名ということ
「雪窓会」とした。学生は勉学が本分、小学校の卒
業式で歌われた印象的な歌「蛍の光、窓の雪」にあや
かって「雪窓会」と名付けられた。「蛍の光、窓の雪」
とは、昔、中国の車胤しゅいんが蛍の光で、また、孫康そんこうが雪

のうす明かりで勉
強して大成したと
いう故事から生ま
れた歌の文句で、
こうした意味を含
んだ会の名前であ
る。

上の写真は、昭
和四年度雪窓会卒
業記念の写真であ
る。男子の帽章や

女子の制服で学校名がわかる。松山中学校・北予中学
校・松山商業学校・松山農業学校・松山高等女学校・
城北高等女学校・済美高等女学校・松山技芸女学校・
崇徳すたく女学校の生徒がみられる。当時松山にはこの外、
愛媛師範学校しはん・松山工業学校・ミッシオン女学校・美
善女学校があった。右上の円内は川上小学校校長の高
橋環先生で雪窓会の会長であった。中央の和服姿が副
会長の寺田又三郎、左は先輩の野中正邦である。前か
ら二列目の男子四名と女子五名が卒業生だった。毎年
茶菓で送別会を催し卒業を祝い、社会への船出の幸多
からんことを祈ったものだった。

昭和四年頃の入試状況や学生気質、通学、学生生活
にふれてみよう。川上小学校から松山の中等学校への
進学は毎年大体十余名位だった。入学試験は私立校、
県立校が同日におこなわれるので併願することが出来
なくて、一発勝負であった。松山中学校で定員二五〇
名に対し、受験者は二倍の五〇〇名位だった。厳しい
試験地獄だった。不合格者は次の年、高等科一年生で
再度受験する。又失敗すると、高等科二年生で三度目

の受験をする。三度目に松山中学校へ合格した者もいた。七転八起というか、根性があったというか、昔の少年の意志の強さと努力に賞讃しょうさんの外ないと思う。

通学はバスのない時代だったので、伊予鉄の汽車通学だった。学校の始業は年間、午前八時十分頃だったから、横河原駅午前七時発の汽車で通学した。汽車は松山まで一時間を要した。

昭和初年頃は、平和な時代ではあったが、世界的な不景気の時代でもあった。特に農家は現金収入の道が少なく、貧困で儉約けんやくと勤勉けんみんの世渡りであった。したがって学生は、横河原駅までは、ほとんどの者が歩いての通学で、自転車使用の者は二、三人だった。よく儉約生活をしたものだ。靴にしても、横の方に穴があいて、小指が出たりするまで履いたし、服もすねやひじがぬけたのを上から当てつぎをして平気で着用していた。又、靴の消耗することを惜しんで、横河原駅前の知人等の宅へ靴を預けておき、履きかえて、家庭までの往復は下駄あしで通学した。厚あつはまの高下駄をカラコロ、カラコロと歩いたものだった。

朝七時発の汽車に乗車しなければならぬので、冬など六時頃に家を出る者もいた。河之内の女学生は勿論のこと、北方海上などの女学生は、ちようちんをつけて、母親が途中まで見送っていた。ちようちんをつけて通学とは嘘うそのような本当の話である。

朝、横河原駅で、汽車が発車して、シユシユと動き出した頃、おくれかかった学生が、必死で駅の構外こうがいまで汽車を追う情景も時々あった。すべての客車の窓から学生の顔が出て、「早よう」「早よう」「走って」「走って」と、男子も女子も口々に声援を送ったものだった。機関士も心得たもの、追いつけ、追いつけ、といっているように速力を落としてくれていた。本当にほへましい朝の一コマであった。

昭和二十二年の新制中学校制になるまで、男女共学の中等学校は一校もなかった。「男女七才にして席を同じうせず」とかいう封建的な教えの時代だったのであるうか、「親おやしき仲にも礼儀あり。」の徹した時代だったのだろうか、汽車の客車が六両連結されていると、前三両を女学生、後三両を男子が乗車し、誰だれ一人この

不文律を破った者はいなかった。実に整然としたものだった。

しかし、反面小学校時代同級生で、おしゃべりもし、けんかもした仲だった男女が、松山の学校へ通学し始めてから、男子と女子が遠い人ようになって、同じ方向から同じ道を通学していて、「お早よう。」の挨拶もしなくなり、話などもしないようになった。足速あしはやに通りぬけて、一緒に歩いたりしなくなった。男女問題は学校も厳しいように感ぜられたし、上級生の目もこわかったし、社会の声もやかましかったと思える。しかし、向かい会って出会った時など、目のやり場に困ったり、顔が赤くなるのを感じたものだった。これが恋の芽生えだったのだろうか。青春というものだったのだろう。心は燃えど色に出さず、恋をして恋をし得ずなどと誰かがいったことを思い出す。しかし、私達が通学していたその頃、一人も、一件も、恋愛関係や、恋愛問題を耳にしたことはなかった。まじめで、学生の本分に徹した学生達だったのだろう。

雪窓会という機関を通してというか、会の運営のこ

とや、野球・卓球・庭球・登山などのスポーツ活動や文化活動の場面で、一対一でなく、グループ対グループの集団場面で、男女の話し合いや、談笑の場面もあって、自然の姿での男女の交わりであり、最も理想的な姿だったと思う。

雪窓会の運営や活動を紹介しよう。川上小学校の校長及び先生方及び先輩の指導も得て、学生達の努力で立派な自主的な運営がされていた。勉学と友情をモットーに、スポーツと文化活動を通して人生修業の一助と考え、運営されていた。スポーツでは、野球部・卓球部・庭球部・登山部を持ち、文化活動では文芸部・弁論部べんろんがあった。これらの活動は、土曜日の午後、夏休・冬休が利用された。余暇の活用だった。

野球は大正十年頃から急速に愛好され、学生も熱を入れた。土曜日の午後学校からの帰りに川上小学校で練習をした。東温の各村にも学生の会が結成されていた。北吉井村に石嶺会せきりょう、南吉井村に白楊会はくよう、小野村に翠松会すいしょう、久米村に溪水会けいすい等である。土曜日に各村の学生と親善野球をやつて、スポーツに興ずると共に、

お互いに親交を深めていった。学生の野球熱と共に、村内一般も野球に対する理解と興味を深めていった、学生達のために、雪窓会を盛り上げる意味で野球大会を開催しようとの運動がおこって、ついに川上村体育後援会が結成されて、大正十四年第一回東温野球大会が開催された。東温各村の学生のチーム、実業団のチームが参加出場して川上村で、はじめて野球大会が盛大に行われるようになった。大会はお盆の三日間行われ、観覧のため小屋掛けまでして、村内多数の観覧があり、各村からも応援団が繰り出して実に盛大な大会であった。後援会は医師の山本房次先生、商工会の田井正計会長が中心になってお世話をされていた。

雪窓会も熱意に答える意味と、学生自身若者として野球を心から愛好して一層練習に励んだ。夏休みになると川上小学校の裁縫室を借りて合宿までして、練習に輪をかけた。監督・コーチは川上小学校勤務の桧垣先生であった。毎日先生は献身的に御指導下さった。先輩として、田井敏光・寺田又三郎・野中正邦・丹生谷澄夫・仙波光等々の諸兄が毎日のように来られて、

しつた激励して下さい。練習中は、実にきびしい先輩であった。練習が終ると一変して、選手一人ひとりにいたわりの言葉をかけてくれる、実に優しい兄のような先輩であった。練習中先輩のきびしいと無理なことだと思えるしつたにあって、自分の技術の不足と無理だと思えるしつたに対して反感的な涙も度々流したものだ。しかし先輩のやさしい心に出会って先輩の真意がわかり信頼と尊敬の念と変り、先輩後輩が美しく結ばれていった。そして一人も野球をやめる者はいなかった。合宿中の食事は、女子学生が当番制で動して世話をしてくれた。食事はイリコ飯か、ゴモク飯、おかずはたくあんと決っていた。女子学生も若く、家庭でもあまり飯をたいたこともない女子学生もいたのだろう、よくこげつかせた飯、かたかったり、やおかつたりの飯にであわせた。しかしいつも最高にうまかった。食欲旺盛な若者だったから、又女子学生の手作りの食事だったからだろう。他の地方の野球大会にも度々出場した。久万町の野球大会、丹原町の野球大会等は旅館や公会堂に宿泊して参加出場した。松山で

の大会にも出場した。参加中印象深い数々の思い出がある。東温野球大会で優勝するだろうと予想された年、第一回戦で一つの失策で敗退した時、十余人の選手が残念で泣きに泣いたことなど今に忘れられない。若者は野球を通して、こうした中に育っていったと思う。



昭和12年度 優勝の雪窓会チーム

上の写真は、

昭和十二年度、雪窓会が、第十二回東温野球大会に優勝した時の記念写真である。雪窓会はじめての優勝である。コーチの仙波知氏の顔が見える。童

文芸部で毎年文集を発刊したり、昭和の初年頃、数年間、夏休中に、旧川上村役場の二階の大会場で、雪窓会と青年団が対抗雄弁大会を共催した。意気盛んな青春の論戦をたたかわしたものだ。聴衆も多数来て盛会だった。

登山部の活動について、特筆すべきものが二つある。面河登山と皿ヶ峰登山である。

面河探勝登山は女子会員の要望で実施された。野中正邦副会長と他に先輩二人の引率である。昭和四年の夏休中のことである。当時としては女子学生が二泊三日の登山は画期的なことでもあった。家庭で、女子がそんな登山はいけないと、許可がもらえず断念した者もいたらしい。参加女子会員は、六、七名だった。午前二時、川上出発、河之内から黒森峠を越えて面河溪に着き探勝、関門にあった旅館に一泊した。一流旅館でなくて、夜「ノミ」の攻撃にあつて困惑と苦笑の一夜だった。二日目、朝、霧の面河溪を探勝して、仕七川を経て岩屋寺に参拝、古岩屋の絶景をめで、久万町に到着した。ここで久万町主催の野球大会出場のため来

顔の十五、六才の選手諸氏も現在は六十才を越えていよう。実に思い出深いなつかしい写真である。

町していた野球部員と合流した。宿泊は「泉熊旅館」^{いづくま}だった。夜、トランプに興じ、忘れ得ぬ思い出となった。三日目、二日間の歩行で、足のみめがつぶれて歩行困難な者、またつかれ切った者もいておぼつかない足どりだったが、顔だけはえみをたたえ、登山の喜びにみちている表情だった。久万街道を北上した。久万町を出て間もなくトラックが通りかかった。便乗を哀願した。法規上違反だが心よく乗せてくれた。親切な運ちゃんとして人情のきびにふれたうれしさと、感謝の気持ちをも今も思い出すと女子会員の一人が話してくれた。三坂峠の手前六部堂でトラックをおり、山道に入ると、縦の木峠を越して拝志村に下り帰村した。はじめて見た天下の絶景の雄大さ、自然の偉大さを体得し、三日間の歩行の困難に打ち勝ったこと。友達同志の友情を深めたこと、等々生きた人生勉強であった。実に楽しい有意義な登山だったと、同行会員は言っていた。

昭和十六年頃、女子会員にせがまれて、橋本鬼士男、相原芳明の先輩二人で引率して、皿ヶ嶺登山を実施したことがあった。テントや毛布、食料品を背負い、少

し登っては休みの連続で、やっと皿ヶ嶺に到達した。その頃から天候がぐずれ始め、夕方にはとうとう雨になってしまった。幸いにも山小屋があったのでたてこもった。夜になって雨は激しくなり、風も出てきて大嵐となってしまった。どしゃぶりの雨、原始林の巨木がうなる。小さな山小屋も吹きとばされそうだった。ローソクの火は、つけてもつけても吹き消されてしまう。電光石火というか、どぎつく光る稲光、頭上すれすれというか、実に近くでの雷鳴、ピカピカゴロゴロの連続、その度にかん高い悲鳴、生きた心地もない大嵐の夜だった。おそらく二度と経験することもないと思われる恐怖の一夜だった。しかし朝になって小雨となり、正午頃には太陽の光がさしはじめ天候が回復した。女子学生達は、何事もなかったように、ほがらかにしゃいでいる。美しいというか、純粹無垢^{ひじやく}というか、乙女心の美しさを初めて見たような気がした。恐怖の体験と太陽の光の有難さに、それぞれに感ずるところがあったようだった。またまた、若者はこうした体験の中で育っていくのだと感を深くした。

学生達は、この雪窓会の活動を通して、勉学に、人生修業に、健康的な余暇利用に、青春のエネルギーを発散させつつ育っていったと思う。「あ、我等雪窓会」の感を深くするのである。

若き男女の学生達が、青春の熱意をこめて、口ずさんだ「雪窓会」の会歌は、次のとおりである。

「雪窓会」の歌

光り流るる東ひがしに

今日も明けゆく石鉄せきてつの

紫紺しこんに映はゆる高嶺こうれいや

雲うんの五彩ごさいを眺ながめては

嬉うれしからずや若き日の

ああ我等雪窓会

宮相撲の盛んな頃

松山地方に素人相撲があった頃、川内町を中心に東温地方を支配した小松川三代の頭取小松川四作の古い葉書の束を見ても、大正十年頃まで素人相撲が盛んであったことがよくわかる。慰安の少ない郷土の人を相撲で楽しませた力士を古書や資料を探して昔をしのぶことにした。

春日かすが山盛行、川上村上の町生まれ。頭取小松川四作の部屋内であった。若くして海軍に志願をして合格、呉海兵団に入団をした。後、佐世保の砲術学校を優秀な成績で卒業をして、軍艦「春日」に乗り組んでいた時、連合艦隊で相撲大会があり優勝をした。時の司令長官「有栖川宮ありすがのみや」より軍艦の名を取り春日山と命名されて大日本海軍横綱となった。海軍を退役後は郷里の川上村の村会議員を勤めて、貧困者救助や現在運動し



昭和4年 頭取四代目小松川襲名記念相撲

ている同和教育の先覚者でもあった。また郷土にかかわる問題や相撲によって起こる事件には一役買って仲裁をし、円満に解決をした。内子、五十崎、松山地方の相撲大会には出場して技術を発揮し、優勝も数多く、

大阪相撲の二段級の力量があつて、四国素人相撲では数少ない力士と当時の人は言っていた。また子供や青年の心身鍛練に相撲の指導をした。記念碑は川上神社の前の川端にある。



初代小松川良右衛門の碑

この写真は初代、小松川良右衛門の記念碑である。

大阪押尾川部屋素人相撲、頭取取締初代、

小松川良右衛門、北方生まれ、嘉永七年没。記念碑は上砂橋の東にある。

部屋内力士には、熊錦岩吉、岩浪庄太郎、初代音の瀬四作、初代八幡崎兵次、二代入汐藤次、入汐慶蔵、初午佐太郎。



二代小松川慶蔵の碑

上の写真は二代小松川の記念碑である。菅原神社の境内にある。二代小松川は北方生まれ、頭取取締二代小

松川慶蔵、明治十六年歿。記念碑の文字は坂本親三郎書。

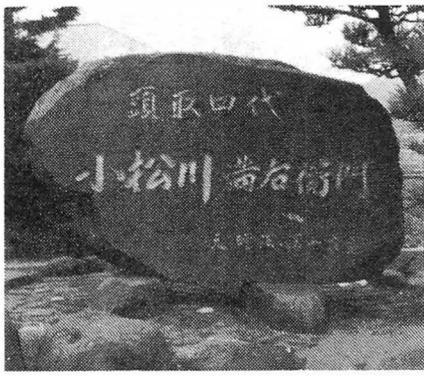
部屋内力士には、柏木岩太郎、二ツ石又五郎、二代入汐藤次、三代入汐文三衛門。



三代小松川四作の碑

正十五年歿。

部屋内力士には、春日山盛行、八幡崎幸太郎、八重桜良貞、二代音の瀬徳太郎、小春日円平、時渡清一、



四代小松川満右衛門の碑

上の写真は、頭取取締三代、小松川四作の記念碑である。揚神社の境内に建立されている。北方の生まれ、大

千鳥川清一、高尾山高義、八幡森卯太郎、綾錦平、小染川幾太郎、小松風藤三郎、小松龍清久、八幡山栄行、光勇常一、西の海実、若柳茂、荒駒秀四郎、放駒善四郎、春の森元一

関勇徳長、都右与太郎

四代頭取取締小松川満右衛門、北方の生まれ、昭和二年襲名。昭和二十年歿。

部屋内力士には、小富士山福一、若見山時雄、遠州洋^発勇起王、綾尾山石松、熊ヶ嶽次郎



五代 小松川清一

五代 小松川清一。昭和四十五年時渡清一が四代小松川満右衛門の記念碑を建立して揚神社で披露相撲大会を開催し、五代小松川を襲名した。

行司 八嶋^{やしまがた}形熊吉

この写真は八嶋形熊吉の記念碑である。昭和三年歿。河之内の生まれ。生家は佐名木姓であったが、正月用品を商売していたので「正月屋」の家号があった。若い時代は相撲好きで、得意の手は「やぐら落とし」で

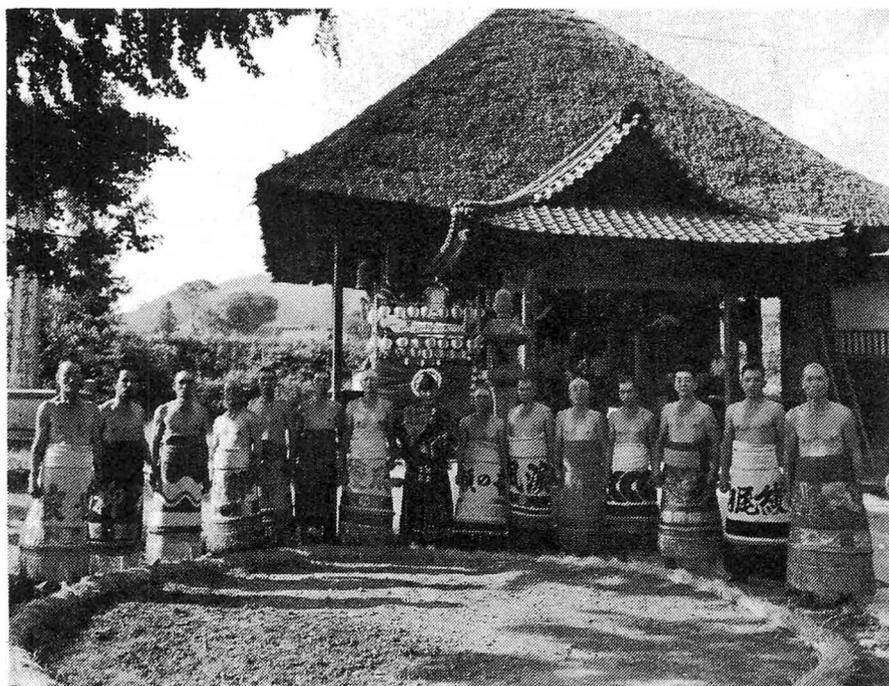


八嶋形熊吉の碑 行司

あった。本場の力士も初め一度はかかったという。身軽に動く相撲取りで気分の良い時は土俵を逆立ちをして何

回も回ったという。大正十四年、大阪押尾川親方より声が良いので行司を命ぜられた。記念碑は川上の天神町滝の下橋の近くに旧道端に建っている。松山の新立へ車で荷を運ぶ時代に、播磨塚の池の所で休んでいると、亀の子搦つなで何組も音頭を取って土手普請をしている。友人が、あの人夫が一度に顔をこちらに向けたら酒一升買うといった。八嶋形は大声をあげて、道路に逆立ちをして、くるくると何回も回ったところが、大勢の人夫が大声をした方に一度にどつと顔をむけて拍手をしたという逸話がある。また、老後は名越座の外

題ぶれをし、太鼓をたたきながら幟のぼりをかつき、所々で大声を張り上げ「チラシ」を読んでいた声が今に頭に残っている。



昭和54年 8月3日 北方医王寺にて

お蚕さん

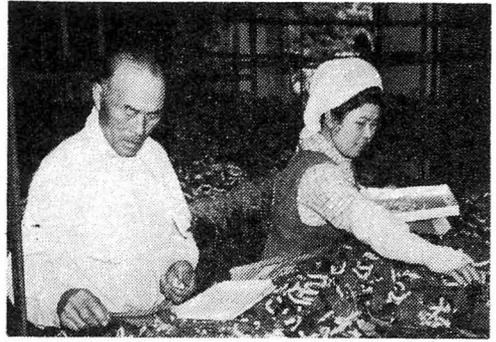


三津山養蚕室落成式記念

この写真は昭和初期の川上村前松瀬川の三津山氏の蚕室落成式の記念写真である。

蚕を飼うには先ず、桑の植付から始める。二年生位の三尺三寸くらいの桑苗を株間の一尺五寸間隔くらいに植えて肥料を施し、冬期には畦と畦の間を掘って堆肥などの有機質肥料を入れて土をかけ、雑草の手入れをする。次には、蚕の飼育箱の用意と、これに寸法の合った菰こもを編むあ。養蚕室を建てる余裕がない人は自宅の居間を急いそごしらえの養蚕室としたものである。いざ飼育となれば仕度を考え、家の内を利用する時は、本柱を立て竹で間に合せて十二段くらいの棚を作り、飼育箱を差し入れて飼育するのである。また温度が必要なので埋薪法まいしんといって、炉いりをつくった。くぬぎ、ならなどを一尺五寸くらいの長さに切り、炉の中に立て、焼き殻もみ殻がらで埋め木炭などで上より火をつけると、煙も出ずに燃えて保温ができる。

仕度が出来ると室内を密閉して、ホルマリンで消毒しておく。また、一方では組合の協同で蚕の掃立をする。第一組合では音田の大工が原に稚蚕飼育場があり、



上簇の捨いあげ

稚蚕桑園も共同で利用した。帰立から二眠までは共同飼育で、三眠からは各戸に持ち帰って飼うが、各戸の飼育枚数はまとめていた。一枚の蚕卵紙の収穫量は繭にして約十貫くらいで、量、質共に良く上の部であった。蚕は約七日位で眠につき、二日くらいの内に脱皮し成長して行く。成長しつつ一眠より五眠までをくりかえし、五眠では十日くらい飼育するが、この五眠が蚕の上り食いといって、食欲も旺盛で最上の成長期に入る。満腹すると頭が透明になり、徐々に絹糸を吐き、繭を作り始める。この五簇の時には、ワラなどでつくった、マブシの中へ一定量の蚕を入れて繭を作らせる。

この作業は仲々忙がしい。油断をすると、蚕は一面にはいまわり、どこへでも糸をはく、上簇が終れば温度を上げて繭づくりを助けるのである。数日後に繭が出来上

がると、選別しながら繭を取り、毛羽取機にかけて仕上りである。上繭、玉繭、屑繭、汚れ繭等に選別される。

玉繭とは蚕二匹が一ツ玉につくったもので大きい为上繭とはいえない。ある期間中置くと中側からさなぎが蛾になり繭を食い破って出てくる。こうなつては糸はとれなくなくなるので、それまでに加熱する。

蚕の飼育が盛んであった大正から昭和の初め頃は、繭の価格も大変よかつたので、農家は皆んな養蚕に力を入れ、水田にまで桑を植えた人もあつたが、価格の暴落等もあり、今ではごく一部の人が飼育するにとどまっている。養蚕の最盛期には、我が国の輸出品の中でも絹糸は、最も大きき地位を占めていたが、ナイロンが発明され、我が国の市場にも出まわり始めてからは、次第に衰え、現在は外国から輸入されている状態である。

結 婚

「釣り合われぬは不縁の元」という諺があつて、昔の

結婚は家がまず第一条件として考えられた。

もしこれを破って恋愛結婚でもしようものなら、野合ごうという焼印を一生背負うことになるばかりでなくその子供や孫に至るまで「あれはハシリの子」といわれ、蔑あざまれた。駆落者かけちものというのは住みなれた土地を離れた調子のはずれた者とされたのである。

恋愛はあっても、結婚までいくケースは少なく、ほとんど仲人によって取り計られた。仲人も家の格式に応じた人であることが喜ばれたが、世話好きの人によることが多かった。

仲人から話があると「きき合わせ」といって本人の身近な人が相手方の素行、財産等をさぐりに行く。「牛を見に行く」などといって、牛にかこつけてようすを見に行ったものである。だから娘のある家では、駄屋の口はいつもきれいにしておかねばならないなどといわれていた。本人の一生を決める大切な仕事であったが、もし仲の悪い家へでもいこうものなら、あることないこと聞かされ、縁談はまず駄目となるのが落ちであった。

紆余曲折うよきとせつがあり、やっとお見合いの段となるのであるが、男の人はまだしも、女の人は相手の膝ばかり見ている、顔などは見ず、結婚の夜はじめて顔を見たなどといううそのような話もあった。



昭和2年 結婚記念

結納は、大正の初め頃は五円ぐらいか、帯一本に酒、魚をつけて仲人が嫁方へ持っていく、仲人は双方の家でもてなしを受けた。

この日に婚礼の日取り、挙式に参加する人数などを決めたものであった。

結納からは、比較的早く挙式が行われたが、その間も当人同士はゆききなどはしなかった。

婚礼の日の朝、「婿入り」をする。この時、婿は伴人とも

(友人などを頼んで)と二人で嫁の家へ行き、酒肴のもてなしを受けてすぐに引き返す。

嫁入りは、仲人夫婦、両親、親戚が付き添って、夕方に出発する。山の方では、女達は晴れ着の裾をはしよって歩き易いように身仕度をしたものである。

提灯をつけた人を先導に、「ホウイ、ホウイ」と掛け声を出すと途中の人家から皆で出て花嫁を見送ったものである。

行列は途中、「中宿」という家がまえもって用意されていてそこで休息をとり、嫁はここで花嫁衣装に着替えたりもした。

また、家によつては人力車を利用することもあったが、これは道のよい地方であり、幾台もの人力車を連ねての嫁入りは豪勢なものであった。

嫁入り道具は、人足によつて運ばれた。よい嫁入りであれば、たんす、長持ち、下駄箱、糠箱、針箱、鏡台等が揃えられた。たんすや長持ちは太い青竹で担ぎ、こまごました物は釣台つりだいにのせ油単あぶたんをかけて運ばれた。大八車で運ばれたのは道のよい所であった。

人足は親戚の人や近所の若い衆が頼まれた。人足は両家から祝儀がもらえるのでみな喜んだものである。

嫁は婿方の家に着くと、仲人が手引きをして、必ず縁側から上がった。

挙式は、古老が司会を務め、三三九度の盃、親子盃、親類縁者との盃があり、その後「お名酒」と称して、嫁の名を書いた盃台がまわされて式が終わる。

後は披露の宴会が夜遅くまで行われたものであるが、嫁方の両親その他はどのように遠方であっても必ず帰ったものである。

二日目。嫁は丸髷に結び直して「ご近所歩き」と称して念仏組中を一戸一戸、姑に連れられて挨拶に回った。

婚礼の際の祝儀は、近親者で一円か五十銭、近所の者は十銭か二十銭であった。人足には、五銭か十銭が祝儀として両方から出された。

婚礼の膳は、すし、吸い物、煮付け、酢の物に決っていて、刺身などは特別の家でないとなかった。魚は松前のおたたさんに頼むか、松山まで行かねば入手

できなかったのである。

嫁の里帰りは、三日目とされていた。婿の妹か、妹がなければ従妹と一緒に行き、必ず日帰りとした。

婿方からは菓子箱を持って行くが、嫁方では紅白の餅を土産に持って帰らせた。

おきぬ婆さん

昭和の初期までの出産は、取り上げ婆さんによる自宅分娩がんべんであった。特に山間僻地へきちでは、産婆の免許ももたないその土地の巧者な婦人によって、妊娠から出産まで、いっさいが取りしきられていたのである。

そこでこの問屋部落に生まれて住んでいたおきぬ婆さんのことを書いてみよう。おきぬ婆さんは土地でも稀まれに見る巧者な人であった。無医村の、自転車も通れぬ不便な土地で、乞われるままに産婆の役目を果たし、民間療法も教え、医師が来るまでの応急処置も誤らず

数多くの人助けをした人と伝えられる。こういう私も娘の時に急性肺炎を患った事があった。風邪をひいた後、急に呼吸が苦しくなり、四十度を越す高熱にあえぎながら無我夢中で「おきぬ婆さんをおいで……お婆さんに早うみてもらって」と叫んだのであった。この夜更よふかけに山間の地へ医師を迎える訳にもゆかず、おきぬ婆さんは急いで来てくれた。「じよんさん（ふだんからこう呼んでいた）はお婆の判断では、急性の肺炎のようですから胸を熱いタオルで湿布をしておあげなさい。そして火鉢に炭火をおこして湯を沸かし、湯気をどんどんお立てなさい。そうすると呼吸がずつとらくになります」と母に教え、兄には「村長さん方に黒鯉くろいがおりましたからもらって来て鯉の生き血を飲ませておあげなさい。鯉の生き血は肺炎の妙薬です。明日は早くお医者さんをお迎えなさいよ」といわれ、かいがいしく指図をして帰られたのであった。翌日早く川上から渡部さんといわれる医者を迎えたのであったが、昨夜のこの応急処置に感心せられ、「この手当がなければ病気はもっと悪化しているであろう」といわれ、改めて

おきぬ婆さんに感謝したのであった。

話は横道にそれたが、この地の妊婦は五か月の戌いぬの日の帯祝いから出産まで、身も心もお婆さんに頼りきっていたのである。足がひきつるといってはこのお婆さんを頼り、逆さかか児もこのお婆さんの手に掛ると一度で平常位に戻ったという。しかし稀まれに異常妊娠もあったようで、異常と認めたらちゅうちよせず、直ちに松山の専門医に行くよう勧め、その判断の正しさには土地の人も舌をまいていた。当時は電話もなければ、電灯もない時代である。電話をかけるにも、八キロの道を郵便局まで行ってかけなければならぬ時代であった。おきぬ婆さんは産気づいた知らせがあると、取るものも取りあえず、七つ道具を提げて雪が降ろうと雨風の夜であろうと、使いの者と妊婦の家へ急ぐのであった。家に着くやいなや手際よく指図をし「さあお婆が来たから大丈夫ですよ。安心して丈夫な赤ちゃんをお産みなさいよ」と励ましたという。

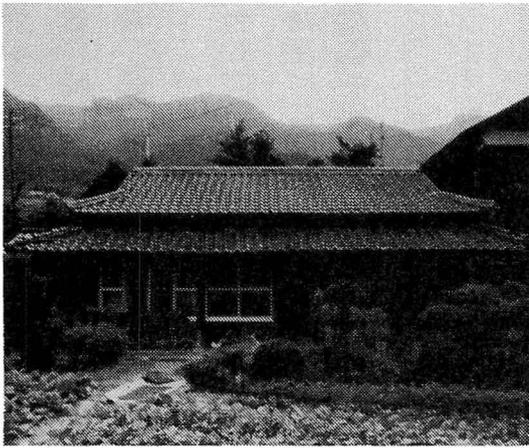
当時は優生保護法もなく、五人から多くは、十人位子供を産んだ人も稀まれではなく、このお婆さんが取り

上げた赤ん坊も想像以上の数であろう。その範囲も河之内から徳吉部落まで及んでいたという。

おきぬ婆さんはある時期東谷の学校の用務員をして



おきぬ婆さんの墓



おきぬ婆さんが住んでいた家

いたことがあったが、時の校長先生のご理解で、学校の用を果たしながらなお産婆役もつとめ、地域の人々に喜ばれていた。おきぬ婆さんは、問屋部落の生まれで同部落の近藤丈作氏の後妻に入っただ人である。同家で二女を得て上の娘さんに分家婿養子をして幸福な老後を送った人であ

るが、当時は一般に現在ほど長命ではなく、昭和十七年四月二十日、人々に惜しまれつつ七十三歳の生涯を閉じたのであった。その性格の潔癖さから前夫人と一つの墓に納まる事を遠慮して、その遺志により近藤家の墓地の一隅に一行の法名で寂しく眠っている。この事によっても名人の心の奥をかいまみた感じがするのである。なおこのおきぬ婆さんの話は一つの例にすぎず、これ程までにはなくとも当時は各地域に巧者な婦人がいて産婆役を果たしていたのである。

産婦の食事と育児

産婦には古血下しといって、黒鯛を八キロもある魚屋へ買いに行つて汁にしたり、煮付けにして食べさせたりした。また、乳の出がよいからと、糯米の粉で団子汁を作り、味噌仕立にして食べさせた。近所からのお産見舞も、必ずこの糯米の粉を重箱いっぱい持って行った。産婦は毎食この団子汁を食した。ふだんの粗食に比べ、産後の食事には気をくばり、脂肪の濃い魚は食べさせなかった。こうして食事を使い休養の

方も、日明けがすんで初めて床上げをするのである。日明けは産後男児の場合は十二日、女兒の場合は十三日で、その間は静かに休養をとった。一方赤ん坊の方は毒下しといって落の根と甘草を煎じて母乳を飲ますよりさきに飲ませた。現在は、母親の初乳によってその役は果たされているとのことである。また生後一週間は取り上げ婆さんが産湯をさせに毎日来ていたようである。

当時は母乳以外の栄養は考えられず、哺乳瓶もあまり見かけなかった。住民の食事はすべて菜食、麦飯であり、現在の人の考えも及ばぬ粗食であった。産後は別として授乳中の母親とても例外ではなく、魚類、肉類等も正月や祭等の他はめつたに口にする事はなかった。それでも母乳はよく出たようである。就寝時敷布団を濡らすくらいよく出て、乳不足などめつたに耳にできなかった。稀に乳不足の児がいても、近所の人からもらい乳をしたり、米の粉で作った重湯で補ったり、また飴を紅絹で包んでなめさせたり、いろいろ工夫をしていたようである。それゆえ農家の母親は田のあぜ

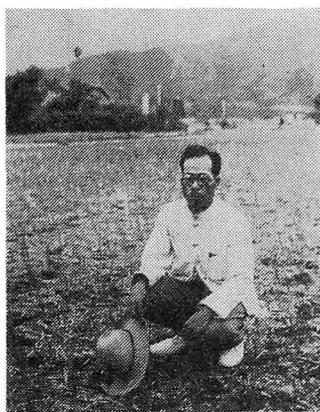
で乳を飲ませたり、外出先で胸をはだけて授乳をしたり、それがまたあたり前の事であった。

現在は乳児をつれての外出はあまり見かけないし、稀まれにあっても、それは哺乳瓶を赤ん坊の口に当てる母親であり、自分のふくよかな乳房を出して飲ませているほほえましい光景を見ることはない。変われば変わる世の中である。

衣服もまたすべて母親の手縫いで、ほとんど和服であった。夏は甚平じんぺいのような涼しい物、冬は綿入れの暖かい物と、いろいろと工夫をしたものである。

おむつも、黒い物でも白い物でも大人の洗いざらしの物で作り、今のおむつカバーの代わりに綿わたを厚く入れた綿わたおむつを使っていた。便利なゴム製品のカバーもなく、また、使い捨ての紙おむつもなく、昼間は子供を背負って野良仕事をしたり、上の子が学校から帰ると子守りをさせたり、大勢の子の妊娠育児と心も体も休まる暇はなかったのである。

大旱魃かんばつの思い出



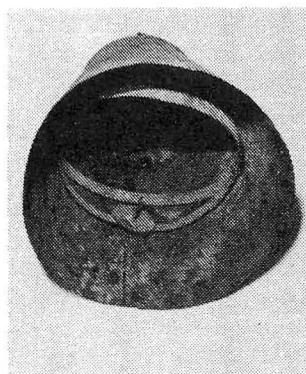
昭和9年の旱魃田

この写真は、昭和九年の旱魃かんばつの時の写真である。一水もない水田にうづくまり技術員の白靴は少しの汚れもない。その

年は春から雨らしい雨がなく、梅雨つゆに入っても日照り続きであった。それで田植は部落総出で、水上から、「押し田」という共同田植であった。植え終えた田の水口は、水の入らぬように止めてしまうので、翌日には足跡の窪みにさえ水のない状態であった。そうした中で平年より半月ばかり遅れて田植えは終わった。しかしこの植え終わった苗を何としても枯死させてはならないと、農民は水を確保するため、昼夜の別なく、泉を

掘ったり、既設の泉の揚水に努力をしたりした。

以前からの「沢の泉」「窪の泉」「古泉」「鯛ヶ淵泉」等に新しく掘った泉を加えると、南方地区だけに十三の泉があったと聞く。白く乾いた田へ水を引くのは容易ではなかった。来る日も、来る日も晴れきった空を仰ぎ見るのみで、いっこうに雨の降る様子もなく、川や池の水量も日毎に減少の一途をたどり、南方地区で一回補水するのに十日かかった。



提 燈

夜の補水にはこの「がん燈提灯」を腰にくくり付けて除草機を押し回すのである。水が回ってくると夜であれ、昼であれ、何をさして置いても、除草機を押し土を柔らかげ、根に水を浸透させた。このがん燈提灯は、ブリキ板で作った釣鐘形の

外郭内に、自由に回転するようにした。ローソク立てと反射鏡を備え、光が正面一方だけを照らすようにしたもの、一名「忍び提灯」または「盗人提灯」とも言った。赤穂浪士が吉良邸へ討入りした際使ったのがこれである。

人々は各地区で雨乞いの祈禱をした。皿ヶ嶺、大野ヶ原、塩ヶ森、雨滝へと雨乞いの参拝が続いた。

松前の魚売女も、御用櫃に海水を汲んで雨滝へ参拝した。魚売女にとつてもこの大旱魃は生活に係わる重大な問題である。このまま米の収穫がなければ、魚が売れないばかりか、今までの売掛金が、盆、節季になつても支払ってもらえないからである。雨が降りますように……農民は真剣そのものであった。しかし、そのかきもなく、毎日、毎日焼けつくような炎天で、稲は葉を巻き始め、遠くから見ると田の面が黒ずんで見えるようになった。それでも久しぶりに水が回ってくると、しわを巻いた稲の葉がみを震わせて広がってゆくのがいたましかつた。やかんで一株、一株水をかけて行く人もあつた。これを「どびん水」といった。また、田の

乾きを少しでも防ごうとして、株間に細く切った麦藁を敷きつめたりしたが、不心得な道行く人の煙草の吸い殻の火で、道端の水田が三畝せ（約三アール）ばかり火事になったこともあった。

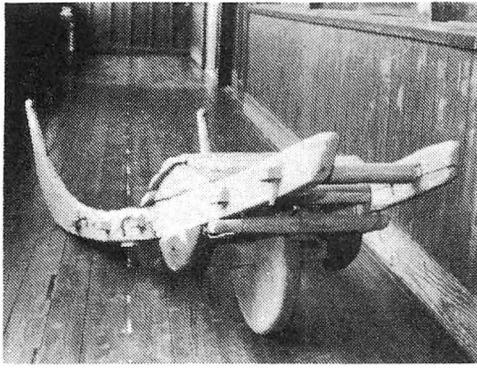
二回目の補水は十五日もかかり、ついには曲里まがりの十アール足らずの田に三日もかかったのであった。このままでは、二十日経っても補水の出来る見込みがたたないので、川原の瀬掘りをして、水の流れを一本にまとめ、川底への逃げ水を少くするため、二の堰せきから三島堰までの四百メートルばかりの川原を、井手がかりの農家が総出で瀬掘りをしたのであった。

この年の早魃は問屋部落の近藤氏の地元も例外ではなく、何時降るともわからぬ空を眺めてはため息をつき、不安は募るばかりであった。しかし近藤氏は村長の要職にある身、この早魃によって心の疲弊を恐れ、自ら率先して譲り合いの精神を示すべく、自分の田の水口を止めて下流の部落へ早魃見舞としたのである。問屋部落の農民もまた「村長さんに習え」と我が田の水口はいっさい止めて下流部落の田を救ったのである。



近藤氏の胸像

近藤氏はすでに黒森線開通のため私財を投じた後で同氏の田はすべて畑を田にしたもので、一般のそれよりも被害は激しかったといわれる。近藤氏のこの率先遂行により、白猪、唐岬かみの両滝を流れ落ちる水は問屋の部落を素通りして、下流の部落の水田を潤したのである。早魃時に他の何物にも代え難い尊い見舞品、それは水より他にあるまい。近藤氏の指導力と、部落民の心温まる心情には聞く者も、胸の内に湧わきくる温い物を感じるのである。下流の水をもらった側の農民もまた心から感謝の意を表明した事はいうまでもない。話は早魃からそれるが、ここで近藤氏の逸話いっかを書き



猫 車

残しておく。同氏は、県議会において「山村の農民にとって、唯一の運搬車である猫車に税金を掛けるとは如何にも不都合である。即日この税金の撤廃を要求する」と知事以下理事者を向こうに回して大演説をしたのであった。当時この税金は、七拾銭位であったかと思う。これがきっかけとなり、論議の末ついに猫車の税金は廃止されたのであった。それ以来議会内は勿論農民の間で、近藤氏の事を「猫金さん」の愛称で呼ぶ者があった。農民としては感謝の意味をこめた表現であったろう。



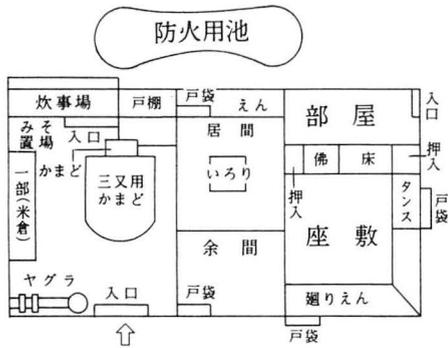
昭和30年7月 川内面河線開通式当日（黒森峠於）

いろりのある暮し

滑川の古い民家は、すべてかやぶき屋根で、昔の人の知恵というか、山間やまいの傾斜地の、一段道より高い所に、風をよけて建てられている。

表七間半、奥行四間の大きな家の半分は、田の字型の座敷と居間にしきられ、中央居間のまん中には大きないろりがあり、冬中

とろりとろりと火が燃えている。そのたき火のたき方が何とも豪勢で直径十五センチから二十五センチくらいの大きな木を四隅にくべて、まん中の通称おじざいさんと呼ぶ自在か



ぎの下では、三つ檼またから取れるかじがらをたくのである。夜、寝る時はその大きな隅木を中央から少ししりぞけておく。大きな木は一本になって外に接触するものがないと燃えないから、朝、火をたく時、元からくべたすま木の焼けづらを、火ばしでこつこつとほじくり、火吹竹で吹いてその埋もれ火をおこす。そのくり返しである。ちょうど居間で電信柱をたいているようなものであった。

居間に続いた土間のあがり口に炊事用のかまど、それともう一つ家の半分を取った土間にかまどがしつらえてある。冬の間、寒い時の仕事として三つ檼また、こうぞをむしあげるためのものである。三つ檼製造は屋根のはりから直径二メートル、高さ二メートル半はあるうかと思われる大きなこがというむし桶おけをぶらさげておいて、その下の大きな釜かまの中で三つ檼また、こうぞを大きな束にまとめ、こがをかぶせて全体をむしあげ、三つ檼またこうぞの皮をむく。広い土間はその作業場である。寒い雪の日を中心にして、一年の内、約半月はかかる三つ檼製造またのかげの特典は、家全体の保温、たき火

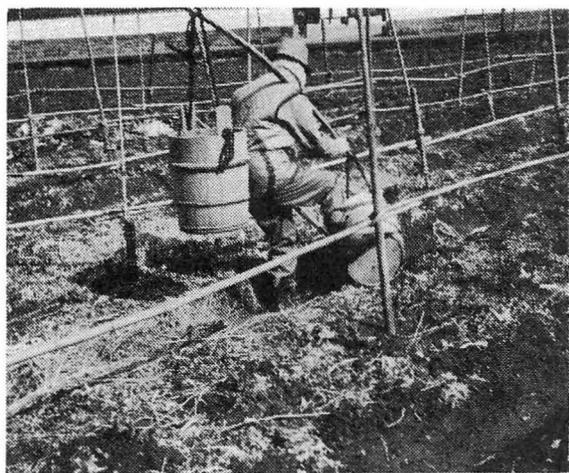
にするかじからの製造、外の仕事の出来ない時の家内近隣の人達の困らん等、昔の人の合理化された生活は滑川ならではの家のたたずまいである。

男の一人前

その一 一番担桶

青年男子で「一人前」とか「一人役」とかいわれるには、いろいろの条件や能力がともなうが、これらを熟さなければならぬ。例えば米俵（六十キロ）を中腰で軽く肩にかつき歩くこと、夜業仕事に稲藁のツガイを五百本作ること、田植えに一人で五畝以上を植えること等の標準があるが「一番たご」もその一つ。これは下肥を二つの担桶に入れると約六十キロあるが、これを天秤棒で担いで畑に行き、肩から下ろさな

いで片手で肥料を使い、肥をすくって畑にかける。最初から最後まで肩からおろさずに仕事をするには、力もいるし要領がとても難しい。片方だけが続けておれば重さが釣り合わないから、前後を調節してやり、最後は片足で立って、反対の上げた方の足で櫓桶の尻を持ち上げて残った肥を手杓にうつし取らねばならない。よろよろすると畑の物を踏み荒らすので技術がいる。



一番担桶

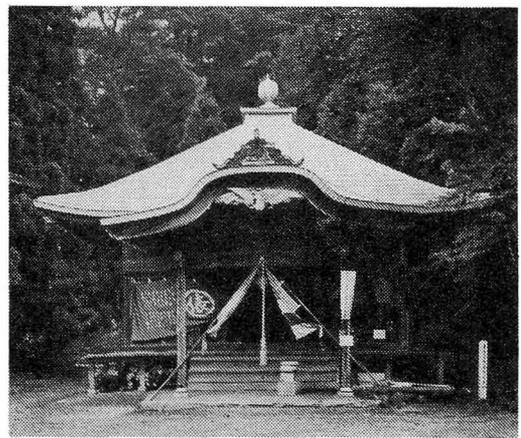
この動作が出来かけると「一番櫓桶」といって男の一人前として認められ、父親さんが煙草と煙管を買って祝福してくれたという。

その二 三観音まいり

中予地区には三観音さんといって北條に高縄山高縄寺。伊予市には谷上山宝珠寺。重信町山之内には俵飛山福見寺があつて、これら三ヶ寺を一日で回り歩いて参詣できることも男の一人前といわれていた。

旧暦の七月九日が観音様の縁日であるが、この朝二時頃から友人を誘い合せて家を出る。梅干入りの焼きむすびの三食分を背中に負い、腰には履き替え用の草鞋をつけた。まだ洋服の出回らない時代で、当然着物姿で後の裾は端折り後帯に挟さんでいた。

まず一番に福見山を目ざして、山之内岡から山道を登る。道をよく知っている者が先達で互に声をかけ合いながら胸つき坂を登ること二時間で、聖観世音菩薩をまつる水月観音堂に達する。この頃にはもう夜も明けかけている。参詣もそこに飛ぶように山道を湯山に向けて下りる。道は小砂のかたまりで油断すれば滑り転げる。福見川に沿う河中・東川・九川を急ぐ。弁当は歩きながら食べ喉は谷水で潤おす。青年達もこの時



俵飛山福見寺

分はまだ元気だ。夏の太陽は遠慮なく照りつけ汗は目にしみる。

今の高縄山道は頂上まで車が通るが、その頃は谷川添いに登り、最後は急な坂道で流石の若者も息も絶え

だえで言葉も出ない。この間四時間余りで漸く高縄山につく。

十一面観音に手を合せ下山する。めつたに人影のないこの寺も今日は縁日とて老若男女で賑か、急ぎながらもすれちがう娘さんの品定め出来るのも若者の特権か。

足下のように見える海も、吹き上げる涼風も味う余裕がない。和気の浜で一休みし、最後の谷上山へと勇氣を出す。この頃にはもう太陽も西に沈み、東には九

日の月が浮かぶ。軍歌を歌いながら夜の谷上山に詣でる。本尊は十二面観音である。縁日のこととてまだ人も多く残っている。買った菓子などほうばりながら大谷池堤を疲れた足を引きずる。池の面に月が映り昼の暑さを忘れさせた。

宮の下、津吉、下林と歩くが、もうやつとのことで自分の足か人の足か分らないくらいで、止つたり、腰を下したりすれば二度と立ち上がる気力が出ない。

最後の畑川渡りを踏み越せば一番鶏は過ぎて、二番鶏が啼いていた。そして早い家では雨戸を開けていた。これで一人前の健脚がついたと自信がつくのは暫くたってからのことだ。

その三 徒弟制度

明治の義務教育は初め四ヶ年であつたが、やがて六ヶ年に延長された。これを卒業すると裕福な家庭の子は旧制中学校へ進学し、大半の者は二年制の高等小学校に残つた。それ以外の子で家業を継がない二・三男坊は都会に流れて丁稚奉公か、あるいは大工・左官、

その他の手職を求めて見習に弟子入りするのが一般の例だつた。これを世間では「徒弟制度」と呼んでいた。

別に規約があつた訳でなく、ただ親が僅かの手土産を持つて親方の家に連れて行き、四、五年間の見習いを口約束で頼んで帰る。また中にはこの制度とは別に貧困の余り親の家計を助けるために、年百円位の前借りで旦那の家に下男・下女・或は子守等の年季奉公する者もいた。いづれにしても僅か十四・五才の幼稚な子供に、他人の飯には骨があるとのたとえの通り、余りにもむごいならわしであつた。一応は親方の家族としての取扱いは受けるわけだが、寝起にしても食事にしても一段低いところに置かれるのはやむを得ない。

一番辛いのは冬の朝まだ暗い内に皆より先にたたき起こされて、拭き掃除・ガラス拭きに使われ一寸の暇もなく、手足は赤くはれた。食事するにも一番あとから座り、先にすます。箸の上げ下げにも幼心を配らなければならぬ。

それも我慢が出来たが、出来の悪い兄弟子や、同年配の主人の子供の意地悪には泣かされる。

もちろん給金はほどはなく、僅かに益・正月の藪入りに親許へ帰らせてもらうのが一番の楽しみ位で、いささかの勝手気儘も許されない。親方の余程の気嫌がよい時に十五銭の木戸賃をもらって活動写真を見るぐらいだった。最初の一・二年は手職とは無縁の子守りから風呂焚きなどの雑用に使われ休む暇もない。

現代のように労働三法や児童福祉法がある訳でなく、八時間労働も人権もあつたものでない。夜業の十時及以上ぶことも珍らしいことではなかつた。

三年目になると次の新しい弟子が入ってくるので今度は自分が先輩格になり、漸く仕事の見習いが始まる。と言つても手取り足取りの順序正しい教えではなく親方や兄弟子の見よう、見真似であつて、つまり自分の器用の盗み習いであつて、その気構えのない者はいつ迄経つても腕前は上達しない。

このように親方や兄弟子に使われながら四年間、辛抱すれば一応の年季は終るが、技倆はまだ一人前には程遠い。そこでなお一年、お札奉公という名目の無給で働き、腕に磨きをかける。この一年が本人に取つて

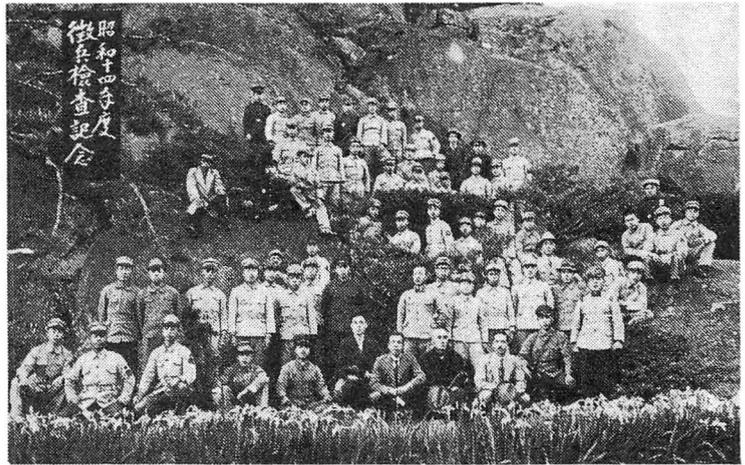
も親方にとつても大切な時期で、これを無事終つた頃は齡も二十の青春で、徴兵検査がやってくる。人間もここまできると技術も社会的常識も豊になつて言行も貫禄もついてくる。そうなると押しも押されもしない一人前の職人と評価されたのである。

その四 徴兵検査

終戦を迎えて半世紀に近い。自由と平和に馴れて今では徴兵検査の言葉そのものも色あせているが、後世のため昔の語り草として顧みるのも意義深いと思う。

富国強兵の国是は明治憲法に国民皆兵を明示し、男子二十才に達すると否応なしに徴兵の洗礼を受ける。たとえ徴兵忌避で行先不明であつても、草の根を分けでも探し出し不忠不心得者として嚴重な処分を受けたものである。検査日が確定すると全員一様に帰郷し男子の面目として勇んで受検した。

村の兵事係と校長に引卒され検査場に赴く訳だが、明治・大正年代は三津浜の公会堂に、また昭和に入つてからは道後公会堂になつていた。検査は毎年夏の初



昭和14年度 徴兵検査記念

めで、まだ袖つきの単衣の着物であつて洋服の者はいない。前夜は定められた宿で合宿し受検上の心得や携帯品の点検を受ける。一同は半ば不安と焦燥で熟睡の出来ない者もいたという。

検査は学科と体格に分れてい

て、学科は尋常小学校六年卒業程度の簡単なものだったが流石に身体検査は厳しかった。数名の検査官の立会で、越中禪の裸で列をつくり神妙に順番を待った。一言の私語も許されない。それが長い時間に思われたが、自分の将来を左右する運命の分岐点になるからだ。

最後のコーナーでは、板の上に両手・両足を圧える型が示してあるので、これに当てると自然大きく広がる四つ這の形になる。そこを後から軍医が親にも見せない男子の陽物を触ると言った生易しいことでなく、掴んでシヤクルのである。もし淋病、梅毒の性病があれば痛くて悲鳴をあげる。男子なら一生一度の経験である。

これが終ると連隊区司令官の前に直立不動して書記官立会で一人づつ次のいずれかの判定を言い渡たされる。

甲種合格 第一乙種合格 第二乙種合格

丙種合格 丁種兵役免除

この内甲種合格した者は更に七つの兵種と四つの部に所属が分けられる。しかし軍縮等のため、収容人員に過剰が出た場合は籤によって入隊を免除される場合があつた。いわゆる「くじのがれ」でこの籤は自分の知らない全くの「あなたまかせ」のもので異議や不服の申立ては通じない。

入営年限は明治の頃は三ケ年、昭和に入つて青年学校卒業生は一年半、飯盒の飯とおつき合いさされる。

また十八才で自ら進んで志願入隊する者がいたが、
反対に軍隊生活を嫌がり兵役免除にあやかりたいと東
予市にある権現さんに人知れず祈願する者もいたこと
も否めない。

徴兵検査は男子だけの裸の祭典とするに比べ、今日
の成人式は男女揃っての盛装華麗の祝典で全国民から
の祝福を受ける。平和な時代になったものだ。

障子ヶ谷の池普請

下の写真は、昭和十三年に徳吉区の障子ヶ谷の池普
請を始め、十四年の三月完成した時の写真である。

当時は不景気で、日華事変の起こる前で、不安定な
時代であったと思う。食料増産に水利の便は第一条件
である。池の土手を固める亀の子搦きの人夫や、経験
者を村内外より集めた。主に女子であった。当時の

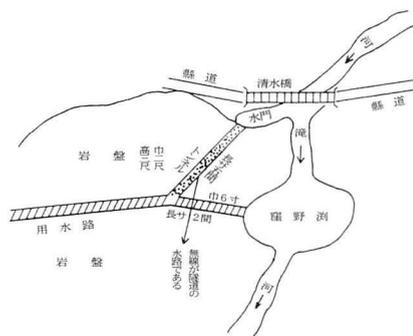


障子ヶ谷の池普請 昭和14年

明治27年巖石切抜功労者表彰石

窪野井手表彰碑	水利惣代	佐伯十一郎
	水利員	阿部太平次
		藤井 栄太
		玉井 藤七
		佐伯 房吉
		日野 庄藏
		千原 宇八
		小倉 宇八
表彰石発起人	請負人	
		佐伯 忠作
		奥村馬太郎
大正七年十一月建立		

水門略図



日役賃は男子上人で一円二十銭くらい、女子は七・八十銭くらいであった。亀搗きの下に置く土運びは、ざる一荷が何銭と云って受取りで運ぶ人や、日役で運ぶ人などもあった。突貫工事であるため、日役賃の上に分まわしと云って、小旗に六銭と書き鉢巻きにさして数取りして作業を進め完成した。

徳吉には外に、駄馬池があり、水源は音田の共用の窪野井手がある。この水口は窪野渚の頭にあつて自然の岩盤を掘り抜いて隧道とし洪水にも流れぬ水門であり、全国でも数少ない堅固なもので、下流の農民は水

利費が安いので助かっている。この隧道は明治二十七年、千原銅山の工夫半兵衛という人が苦心して、火薬を使用し、また手掘りで掘り抜いたといい伝えられている。この工事の旋行を思いついたのは、農民が井手掃除をしていると、見知らぬ旅僧が、この岩盤を掘り抜いて「トンネル」にしたら良い水路が出来ると話したのが原因で、後年実行完成したという土地の古老の話である。

お 吊 い

健全な社会生活をしてきた人も「死」というもの之境として人間の一生を終わるのであるが、これについては、遺族は勿論、念仏組、知人等は、故人への最後の儀礼として弔いを厳肅に行い、別れを惜しむのは昔も今も変わらない。

各地区には念仏組があり、当番制になっていて、毎年十二月末に順おくりとなっている。

組の内に死亡者がでるとまず当番の家に知らせる。当番の人は念仏組中へ通知をして回る。念仏組の者は取るものも取りあえず、不幸のあつた家へ行くのであるが、早く来た人でその家と縁戚関係のない人で遺族にまだ悔みをいっていない人に頼んで『オソレ』を張ってもらう。『オソレ』は半紙を六センチ幅に切つてこれを横にして、家の中の神棚や戸口に貼るのである。死者が出るとブクがかかったといつて、遺族は向こう一年間神祭りを遠慮し、神社の境内へも立ち入らないこととされる。

また、この「オソレ」をしてもらった人にもう一つの仕事がある。それは亡くなった人や、亡くなった人のために家族の者が神仏にお願をかけていることがあるので、これを一切解消してもらうことである。

そのために、死んだ人の着物を一枚取り出して、それを逆に持って、座敷の障子を開けて外に向かつて振りながら『○○年の男、又は、○○年の女は亡くなり

ました。お願ほどきをいたします』と大声でいってもらうのである。

それからその人ははじめて遺族に悔を述べる。

また、死者が出ると「服」がかかるという考え方がある。親・夫・妻・子・祖父母・兄弟姉妹等が考えられる。死者との縁の遠い近いにより「服」の日数にも長短があるが、これは神様に遠慮をするというだけでなく、日常生活を慎しみ、亡くなった人への追慕の意味も多分に含まれていると思われる。

念仏組の人達の仕事の第一は、親戚への通知である。電話等のない時代のこととて遠方は電報を打つが、松山あたりまでは組の者が手分けをして知らせに行った。それも必ず二人一組となって使者になったものである。自転車をぼつぼつ買っていた者もあるが、二人そろるとなるとない人もあるので、たいていはてくてくと歩いた。それで二人連れの人達が来ると、不幸ごとの知らせと悟つたものである。

また、役場へは医師の死亡診断書を持って行き、死亡届をして埋葬許可証を受け、この許可証で墓地管理

者から埋葬場所の指定を受けなければならなかった。

お寺へも行つて、葬儀の日、時間等の打合せ、遺族の依頼により僧侶の人数等も住職と相談し、住職の意向によつて、役僧を他の寺院へ依頼にも行つた。

僧侶の人数も、両鉢、片鉢、導師に副導師を付ける洒水等で九名、七名、五名、三名等があるが、貧しかった農村生活のことで、導師一人にそこらあたりから「庵坊」を雇つて済ませることが多かつた。

念仏組の女の人も、手分けして、向きむきのことに専念した。その一つに団子作りがある。平常は団子の粉を作るには米を洗つて干して粉にするのであるが、この際は洗わないでひく、ひき臼を箕の上に置き、箕の口は必ず北へ向けてすえてひかねばならないとされていた。粉ができると水で練つて、大きな団子を四個小さいのを六個作る。米一合をたい一粒も残さないように茶わんに盛る。

死者の枕元に、白布をかけた小机をおき、作つた生団子を四隅へおき、盛り上げた茶わんの飯の上には真中に箸を二本たてる。一本華といつて櫛を一枝立てる。櫛に

は毒があるので、野辺に葬られた人の臭に鳥獣が集らな
いようにと考えられた。湯のみに水を入れて櫛の葉を
一枝つける。これを「死に水」という。ローソクを灯し、
一本線香を立てる。四十九日までは一本線香で、それ
からは二本とする。大豆を煎つて本人が生前使用して
いた茶碗に入れる。この大豆をいるのは、藁でねじり
箒を作りこれである。このほうきは出棺のあ
と座敷を掃くのに使う。またこの大豆入りの茶碗は出
棺と同時に土地に投げつけて割るのであるが、この時
飛び散つた豆が芽を出すことのないように、特によく
煎らねばならないとされている。以上のものを小机の
上にならべおくのであるが、これを「枕机」という。
小さい方の六個の団子は、死出の旅の弁当である。
なぜこのように弁当をいそいで作るかと言うと、死
んだ人がこれから行く冥土への黄泉路は大へん暗くて遠
い道のりであり、そこを一人で歩かねばならないので、
信濃（長野県）の善光寺へお光りをもらいに行くのだ
といわれている。

遺体は北枕にねかせ、白い布で顔を覆う。蒲団の上

には、かみそり、刀等の刃物をおく。これはあの世の旅の途中で『火車』にとられないためだとされている。火車とは、生前悪事をした亡者をのせて地獄へ運ぶ車で火が燃えている車とのことである。また地獄で罪人をのせて責める火の車ともいわれている。

また、一方では裁縫の得意な人たちは、死出の旅衣装や持ち物を縫わねばならなかった。はさみは使わないので布は引きさき、尻どめはせず、返し針もしてはならないとされていた。着せる着物、手甲、脚絆、さんや袋、ふとん等を縫った。

男の人の仕事に墓穴掘りがあった。特に伝染病などで亡くなった場合は火葬にし、組の共同原野、または山の中などで組の人が木を積み上げ、松葉をよせ、藁も沢山持つていって一夜がかりで番をして焼いたという。このようなのは特例で、普通は土葬であった。墓穴は相当大きく深く掘らねばならないので、大変な仕事であった。どこの墓地でもあまり広くないので、鍬の柄なども普通のはは長くて掘りにくい。ため短かいのを作ったりしたといわれている。

『穴掘り酒』といって、冷酒が一升徳利で墓地に持って行かれ、野菜の煮メなどが肴として添えてあった。この酒は残して帰らないこととされており、その場で飲んでしまわなければならなかった。

また、どこの組にも共同の庵があり、「庵坊」といって独り者の老人が住みついていて、葬式にはよく雇われて行ったものである。この庵には葬式の野道具一切が置いてあった。天蓋、四ツ旗の頭、灯籠などの骨格があり、これに新しい紙を張った。柩、位牌、木鍬、香炉、紙華等もみな組の人達で作ったものである。

墓へおく、「三つ石」も川原から拾ってきて墓所へ供えておいた。これは墓直しの時、拝み石、膳石、脇石としてつかわれた。

葬式の当日、組の人達は朝早くから手つだいにいく。持つてゆく物は「一番いれ箱」に米二升とお悔十銭、その他、油揚十枚または二十枚、豆腐、野菜など思い思いに持ちより、組中で葬式をしてあげて、悲しみを分かち合うという考え方であった。

食事は女の人の担当で家の人の意向をきいて献立を

考えるのであるが、だいたいきまっていた。精進料理でにぼしさえ使わなかった。したがって油揚、豆腐が主役であった。

飯は大豆の入った豆飯が作られた。酒は昼食時にも夕食時にも出された。

買物は、葬具屋で僧侶の人数等をいうと、大体応分の物をそろえてくれた。その中で必要な物だけ買ってきた。食事の方の買物も別の店で買うのであるが、組の者が持ちよって不足の分だけ買えばよかった。

葬式の当日はなるべく早く納棺をした。これは死体の硬直を考えてのことである。まず「湯灌」をする。

この時、左縄になった縄たすきを、「片かけ」とし、ごく身近い者達で遺体を清めた。昔の家には必ず、竹の座の子の部屋があった。この部屋で畳を二枚上げ、タライに水を入れて後から湯を入れてぬるま湯で湯灌をした。この後の湯は日のあたらぬ所へ捨てなければならぬので、竹の座の子から下へ流した。そしてさきに皆で縫った経帷子を着せた。

男の人の場合は髭を剃ってあげる。白い三角布を額

葬式の行列



に付け、手甲、脚絆、白足袋（たびは左右逆にはかせる）三衣袋には六文銭、握り飯、五穀を入れてあげる。数珠を首にかけ、生前好きであった酒とか煙草、愛用していた物を棺の中へ入れる。

女の人の場合は、髪を整え、この世の最後の化粧をして上げて、親しかった人達とつきぬ別れをさせてあげるのである。

納棺が終わったらふたをして釘を打つのであるが、白い石、笹と蓬と一緒に握って打つ。後でこの石などは日のあたらぬ床の下などへ捨てた。釘を打ち終わる

と用意された左縄でしつかりと縛り、床の前に安置し、野道具屋から借りてきた上掛をかける。そして故人のいちばん上等の着物を棺の上に掛け、葬式が終わった後でこの着物はお寺へ納めた。

僧侶は一応家に来て、位牌、中陰の塔婆等を書いて簡単な読経をしてくれる。

葬式は組の庵で行うので、当番は遺族の意見をきいて『持ち方』の順位を発表する。位牌を持つということは、この家の相続を決定し、発表することでもある。「三の鐘」を合図に出棺される。この時豆入りの茶碗が地面に投げつけて割られる。この音は残る家族にとつては、一つは思い切りの付くけじめともなった。

棺のついてあった場所は『ねじり箒』で掃かれる。棺は四人で担ぐのであるが、たいてい故人と親しかった若い人が選ばれる。担ぎ手は頭に紙の三角形の飾りを付け、草履をはいた。この草履は埋葬が終わって帰る時、脱ぎ棄て必ず鼻緒を切つて裸足になって帰った。

葬式の行列の順序は図表による。

式場の庵に着いた葬列は左回りに三回まわる。これ



葬式

門、菩提門、涅槃門を表したものである。

それから、導師、役僧の読経が始まり、いろいろの儀式があつて後、導師から「引導」が渡される。その後喪主から始まって、次々に焼香が行われ、故人の冥福を祈り、式を終わる。

式が終わったら、親戚の者と念仏組の者で墓地まで棺を運んで埋葬する。家族や親戚の人達が帰った後、念仏組の人達で完全に土をかけ、三つ石をおき、藁束

は死霊がこの世にもどるのを防ぐためだといわれている。三回まわり終つたら、中央の台に棺をおき、いろいろなお供え物を前に並べ、棺には四本旗を立てかける。この四本の旗は、発心門、修業

一わに火をつけて墓の上で振り、ていねいに拝んでから遺族の家に帰り、手足を洗い、清め塩をふって家中に入り、遺族の人に改めて挨拶をして、親戚の人達と夕食をとにもする。

食事が終わると、新しい位牌いはの前で全員が念仏を唱えて役目を終えた挨拶をしてそれぞれ自分の家へ帰る。女の人は後片付けをして、仏前を拝んで後から帰った。

翌日「墓直し」を行つた。親戚の人や、親しい組の人達に手伝ってもらい、藁で屋根を作り、拝み石を立て、その前に野位牌を置き、まわりに造花を立てた。青竹ひとかし一節の華はな立てを両側に立てる。

華立ての櫛しは四十九日までは必ず一本とした。

四十九日まで家族の者は毎日夕方に墓へ明かりをつけに行き冥福を祈つた。

四十九日が二カ月越しになるといけないので、たいてい三十五日で申とむらつた。

医王寺の釣鐘の応召

昭和十六年十二月八日突如として太平洋戦争が、ぼつ発し、戦火は拡大の一途をたどり、日の丸の波に囲まれて出征兵士は毎日の様に戦場に向つていった。

また青少年は男女の別もなく、学徒動員で勇んで各種工場の勤務についている。農業もまた、男子手不足で、婦女子も食糧増産に昼夜の別なく精励する。

また兵器工場を守る事も銃後の責務であり、戦争たけなわとなると共に、金属類の供出が叫ばれた。

この時に当たり川上村民信仰の医王寺の釣鐘も応召する事となり、村民こぞつて見送つたのが、この写真である。

昭和十八年二月二十四日、いざ出発と決して、その仕度は長い。かき棒の中心に釣鐘（八十五貫）を支えて、医王寺さん、その右から岡之坊、応観寺、上福寺



昭和 18 年 2 月 医王寺の釣鐘 応召記念

の各住職さんが並び、医王寺さんの左には寺総代、渡部卯太郎氏、村長仙波秀一氏、宝泉区長仙波大八郎氏、消防団員の方々、村内有志男女大勢の見守る中で各住職さん一同の祈念の読経が長時間続けられ、勇ましく出発した。

村民こぞってこの釣鐘の見送りに参加した。四十年昔の写真は私たちに何を語りかけているのであろう。

川内と俳諧

幕末から明治初年における、川内の俳諧はいかいに関する文書によると、各地区において、発句、または俳諧はいかいと呼ばれて句会が持たれていたらしいが、あまり庶民的ではなく、いわゆる旦那芸だんなげいの一つであったらしい。

川内町内の、神社、仏閣等ぶつかくにある献句けんくの額などによると、松山、重信等の人の名も多く記されている。そ

の中でも、北方且ノ上の田中静民の句は、嘉永五年頃から明治二十六年までに残された句だけでも、一千句以上ある。

竹の子や齒のない同士の長咄し

戻る間に泥足乾く菖蒲かな

平易で、虚飾もいや味もなく、生活をうたった句は現代でもほのぼのとした好感がもたれる。

弘化二年の「知名美久佐」によると、これは桜の板に句を彫り込んだもので、遠く大三島、宮島、瀆の宮等の神社、仏閣へ献句したらしく、その世話人として、中の町の坂本茂松や願主五名の中に渡部玄来がある。

吹き折れの尾花はなれず戦ぎけり 坂本茂松

坂本茂松は中ノ町、鍵屋とある。

ほつほつと日暮れて過ぬ雪の馬 渡部玄来

渡部玄来は、小坂の西門の人である。

今折れた枝ゆれ見ゆる野梅かな 渡部因是

渡部因是は、南方八幡の人である。

くもらすに雲の添けり今日の月 近藤五揚

近藤五揚は、河之内の人で、名は林内という。慈善家で善根酒屋の名で知られた人であった。川内の人で他に二、三名の人の名があるがはつきりしない。

俳諧友千鳥「桑村郡散人一得齋埋蛇」の書によれば風雅を愛し、風流の道に遊んだ人達の名がいたずらに埋れることを愁えて、この人達の句を集めて一書をなすむとある。その中に川上からは、野口道楽翁五白の句が記されている。

名月やいかに更行くくらふ山 五白

野口五白盛芳は、川上大宮神社の神官で、神・儒・仏の諸学に通じており、多数の後輩を指導した。

明治の終わり頃から、大正の初め頃には、松山の人、野間豊柳の指導で、「三川会」というのがあり、三内、川上の人達が松山、重信の人達と盛んに交流して句会を催したらしく、そこここに詠草が残されている。

大正五年一月の句会に、川内関係の人達の名が教名記されている。

苗代や水満々と月おぼろ 大西秋月女 川上下ノ町

池亭の灯柳にくれて春の雨 江戸志流 北方西中村

風つゝのる湖畔の松や天の川 渡部玉翁 北方下古市
等が天地人として名を連ねている。その外に小坂の熊
惠堂、井内下の宮内石山、中ノ町の渡部碧城、添谷渡
部桐の門等の名がある。

明治二十四年八月下旬、正岡子規は友人と白猪、唐
岬の滝を見物に行き、地酒ぢしゅに酔よつて、

滝湧くや秋のはらわたちぎれけん
と詠んでいる。その帰り道、則之内永野の鎌倉堂で一
服し、たわむれに、堂の柱に、

案山子かかしものいはば猶さびしいぞ秋の暮 西子
と落書をしたと記録されている。「西子」とは、親に似
ぬ子をもじった、子規の別号とのことである。その鎌
倉堂は今はなく柱もない。

川内町には現在句碑が十四基ある。南方上砂の佐伯
忠之氏の玄関に、佐伯嵐子の句碑がある。これは嵐子
の教え子達が師を慕つて句碑を建てようと、二個の石
を探して来て、彫り込みを佐伯氏に依頼し、嵐子の氣
に入つたのを河之内の家の庭へ建て、一個は彫刻者が
もらったとのことである。



暮る雪 なほ積む

雪で

ありにけり

嵐子

川上大宮神社には、渡部蘆村あしむらの句碑がある。蘆村は
南方八幡の人で、渡部英四郎家から分家した。大宮神
社の下に家があつたが、今も石垣の石積が少しばかり
残っている。



句は

初午や鶴の穂をまく

神の庭

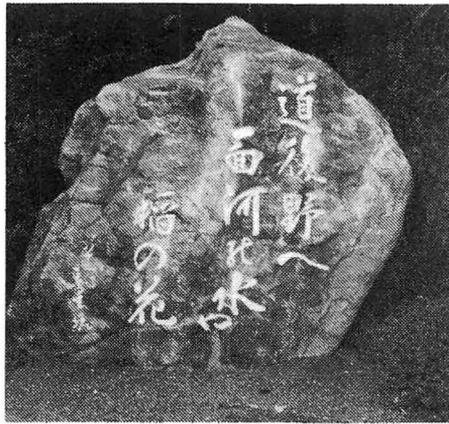
蘆村

老人ホームガリラヤ荘の庭に、安藤緑山子あふくさんの

風鈴やめしいの人の

澄す耳すま

青く澄む湖を守るかの如く碧い大句碑に達筆で刻まれている。

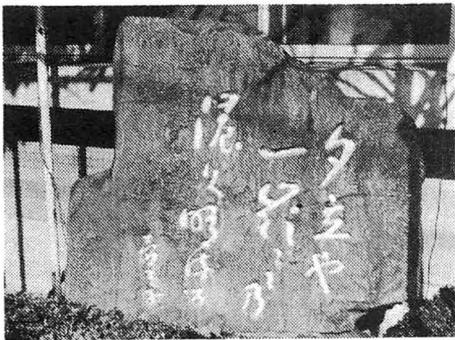


の句碑がある。緑山ろくざんの子は夫妻で入所し、ホームに俳句の種を播いた人で、今も毎月一回句会が開かれ、入所者の無聊ぶりょうを慰めている。

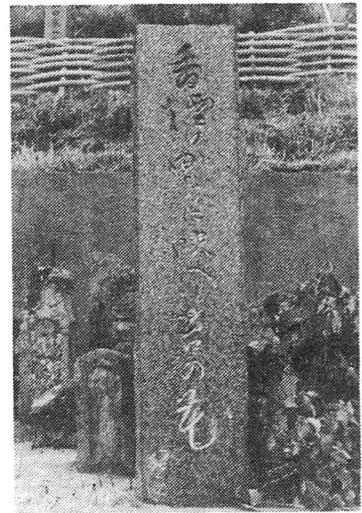
吹上池の端には、佐伯巨星塔の句碑がある。俳句の門下生、百余名に依り建立されたものである。句は、

道後野へ
面河の水や
稲の花

巨星塔



入籍せられた人で、「松山狸の狸通さん」として親まれた人で、遺稿集に「狸のれん」「俳画と句文」等がある。



前松瀬川横灘の墓地には、富田狸通りつうの句碑がある。狸通は横灘の寺田家の人で道後の富田家へ

下の町の重松医院の前には、村上壺天子こてんしの句碑がある。字がむつかしくて読みにくいと、だれもがいう。

夕立や一嶺一嶺の
濃く晴流留

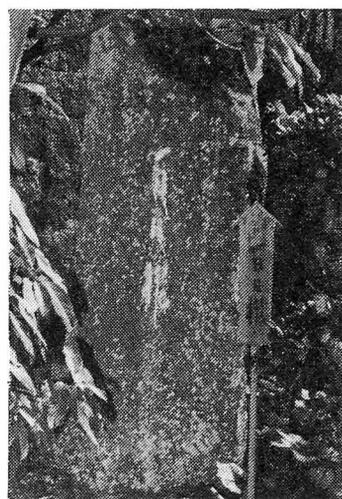
壺天子こてんしと重松医師は、共に越智郡吉海町泊の昔の庄屋の出で、壺天子こてんしは村上家

へ入籍されたが元は重松であったとか。俳画も賛の字も重松医師とよく似ている。



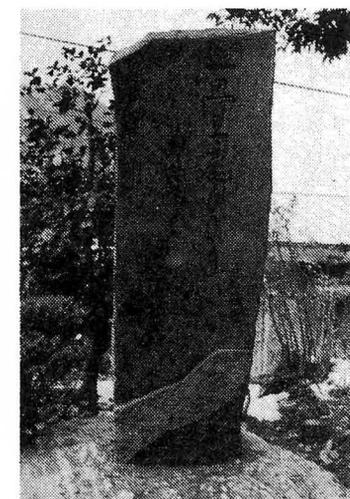
東谷、河之内に入ると、ここは、佐伯巨星塔の居城であり、俳句のメッカでもある。巨星塔が、生涯師と仰

がれた松根東洋城は伊予宇和島藩の城代家老の後裔で、式部官として長く宮中に勤められた人であるが、句縁をもって、河之内に來られて、前後十五か月も、巨星塔宅に滞在されて、地元の人達に俳句を指導された。明け暮れの山峡の風光を賞し『山屏風春の炬燵にこもるかな』と詠まれた。石垣の端の四季桜をこよなく愛されて、『春秋冬冬を百日桜かな』とよまれて、山家生活の情緒を楽しまれ、庭に鶺鴒が来て遊ぶのをめずらしがられて、庵の障子を細目に開けて、じっと見守り一人で悦に入っておられたときく。



今、一畳庵は、ほとんど閉ざされてはいるが、城師を偲んだ巨星塔の一句、

「一畳庵ひたき來るかと便りかな」の句碑がある。

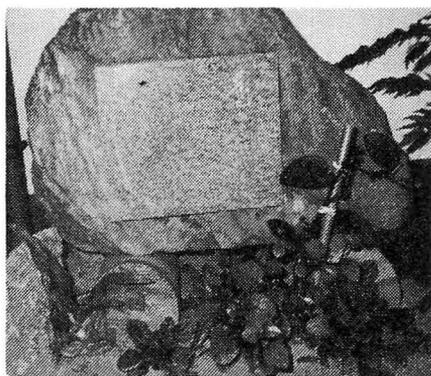


その側に「巖石」と名付けられた石が松の陰にひっそりと立っている。

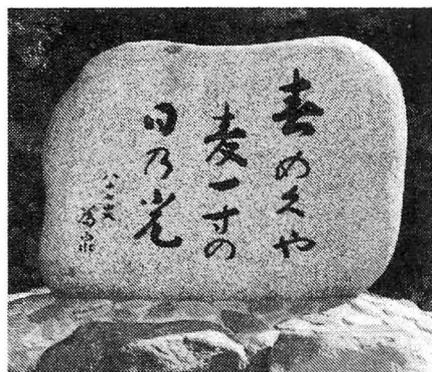
この石の下には、東洋城の遺髪と爪が納められている。

巨星塔を慕って、この地へ來る巨星塔の弟子達はここへお詣りして、お水を捧げて東洋城を偲び、巨星塔の長寿を祈るのである。また、佐伯松花さんは、東洋

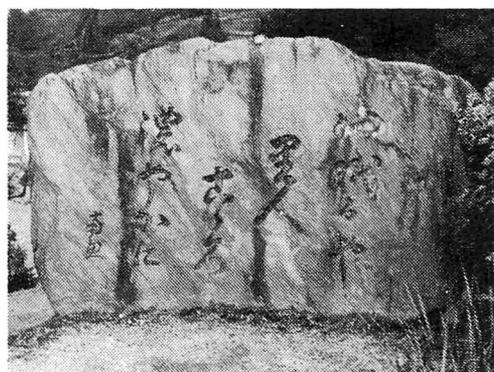
城の弟子が亡くなったときくと黛石に線香を上げ報告をされるという。



河之内音田の佐伯嵐子の庭に、上砂の佐伯家にあるのと同じ句碑がある。石のかっこうが違うだけ句は同じである。

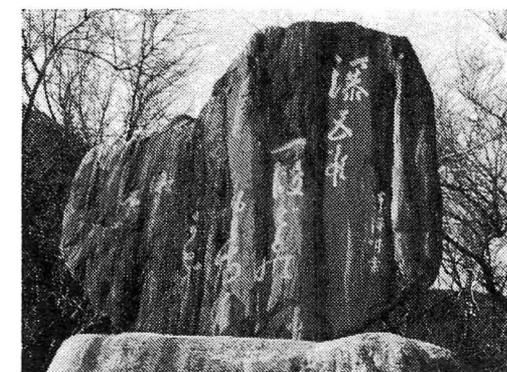


金毘羅寺には、近藤為泉の『春め久や麦一寸の日の光』八十七叟為泉とある。白い丸い句碑は翁の姿を象徴して余りあるものがあり、ほのぼのとした温かさを感じさせられる。



西谷への道をたどると西谷小学校校庭に、和田南魚の句碑がある。山眠るや里人こころ濃やかに

南魚は、昭和八年頃西谷小学校校長として赴任して来られて、俳句を通じて地元の人達と親しく交わりを持たれた。



句会名を『溪声吟社』と名付けられた。門下であった鶯童、東城、柴翠等の人達は今も健吟を続けている。

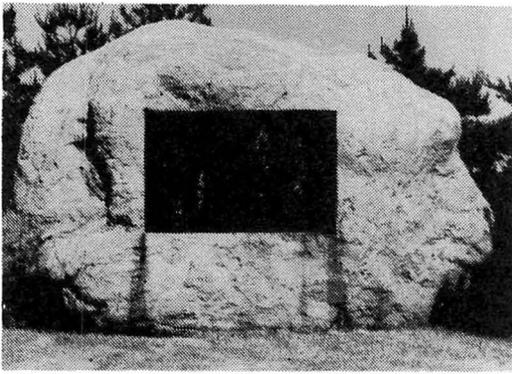
明治二十八年十一月三日、夏目漱石は、当時の天長節の日、雨の中を蓑笠で白猪、唐岬の滝へ紅

葉を見に行つたことが記録されている。

前日から、近藤林内の家に泊まり、朝早く雨の中を下男の案内で滝へ行かれたとある。

その時の句が

『瀑五段一段毎の紅葉かな』である。後年になって、伊予鉄社長宮脇氏によって、滝のはるか上の方ではあるが、黒森街道の端に、大きな句碑が建てられた。書は、松根東洋城である。



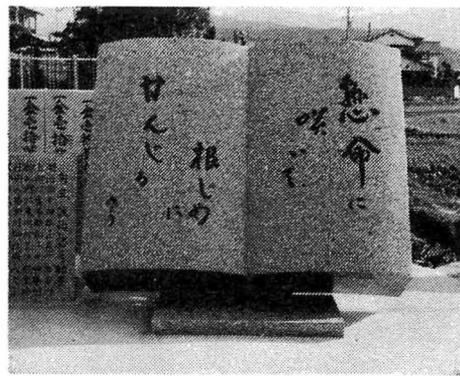
追ひつめた

鵲鳩見え

深の景

明治二十四年八月、当時東京帝国大学に在学中であった正岡子規は『そよ吹く風に驚かされて』、白猪、唐岬の観瀑紀行を思いつたと『山路の秋』という紀行文に記している。そして、川上より奥は山水の景色は尋常ならず、とほめて、

の一句を残した。この句碑は松山ゴルフ場の、玄関前にある。



南方、竹ノ鼻、一宮稲荷神社に、佐伯みどりの、句碑がある。

懸命に咲いて根じめに
甘んじる みどり

とある。佐伯みどりは、

松山川柳会の同人で、番傘川柳社の同人でもある。

西谷入口、恵雲地区で

近藤為泉を中心として、「恵雲吟社」があり、十名ほどの人が集っていたが今は川内吟社に合流している。

第二次大戦終了頃、北方に近藤栄宏の世話で若い人達が集まり、「苔谷吟社」があつて、松山から西岡十四王も指導に来られたこともあるが今はない。現在、佐伯巨星塔指導の下に次の吟社がある。「川内吟社」、「吹上吟社」、「表川吟社」、「南方吟社」、「三恵吟社」、また別に「筍子庵吟社」があり、それぞれ活躍している。

製炭業

十年一昔という言葉があるが、六十年程以前（大正十年頃）の山村における収入源の一つに、製炭業があった。

当時は電気もガスもなく、炊事、風呂、暖房（コタツ）に至るまでの燃料は、薪や木炭に、すべてを依存していた。秋の取入れの終わる頃より三月頃にかけては、山火事かと思われる程の煙を上げて製炭に励んでいた。

当時山里では、自ら求めて事業に頼らねば現金収入の道はなかった。いずこの部落でも、製炭者が多かった。炭焼きは、まず原木の買入れから樹種の見分けや、山よりの駄賃の高低、窯の場所の条件等、様々のことを考えて入札または個人売買をしなければならなかった。

窯の構築については、「窯五斗」といって、窯の仕入は大変骨の折れる仕事であった。日役の高低を考えると大窯ほど経済的には良かった。奥行が三メートル五十、



炭焼き小屋

横も三メートル五十の窯として、土圍の高さ、一メートル二十を土か小石で築き、中心の後ろに排煙口をあけて、前の焚口をつくるのである。

窯床の水平にも注意して、中に原木を立てる。木を立てた上には「コヘイ」といって、木を小さく切り卵の形に積みその上にムシロ等で、木の上へ巻きつけて天井上げとなる。

天井上げは、六人くらいの人で土を盛りあげてた

き固め、終わると小屋を掛け、屋根をふくのである。

天井上げのあとでは酒一升と餅等で祝った。窯かまを築く時は絶対にすきまのないように注意する。もし空気の出入りがあると木炭は窯の中で灰になつてしまう。窯かまは数日乾燥させた後に、原木に火入れをする。

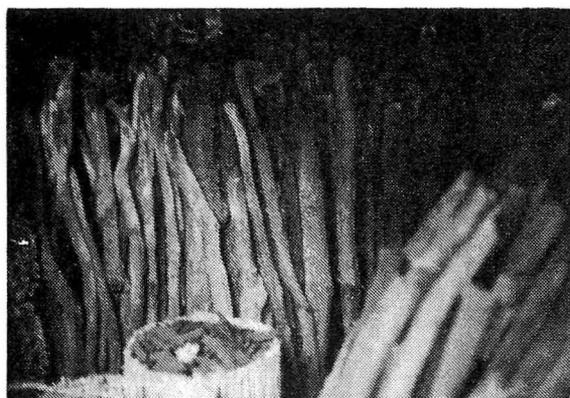
火を焚くと窯が乾いて、天井が下がるので、小屋の中に目じるしをさげておくことが大切である。そうすれば、どのくらい天井が下がったかがわかるからである。

延々と上る煙が四昼夜くらいすると、青い煙となり、煙が消えるようになれば、前のこがま（通風口）や後ろのくど（排煙口）を閉じる。

これで炭は焼けたのである。この窯止めは、夜中であらうといつでも絶対に気を許せない仕事である。

炭が煙あがって、窯の口を開ける時の気持ちは恐ろしいやら、また楽しいやら、不安と期待が胸一杯で経験者であれば誰だれしも味わう気持ちである。

また、窯の寿命についても、一山焼き終わるまで保てる窯であることを祈る気持ちで一杯である。



木 炭

焼けた木炭は、三

十センチくらいに切り、割、中丸、コミと四種類に分けて、

上、並の等級があり後に長さも七センチ

くらいに切り、樹種では、くぬぎ、なら、

雑の種類に選別し、

上と並の等級にまた、後には堅一級、二級、

雑一級、二級と変わり、最初から県営検査も行われ収

入印紙を添付てんぷして、受検申請を出し立会検査も実施され、量目、焼方、選別等により上、並、または一級、

二級と等級によって価格も違っていたのである。

焼け過ぎれば、窯の天井がこわれる心配があるし、早止めをすれば木炭にガスが残るので、検査には心配したものである。

いずれにしても、火を相手の仕事で苦勞をしたが一

つの山を買い、最後まで焼き終えて山を降りる時の気持ちは何んともいえない満足感で一杯である。

現在は、電気とガスの便利な時代となった。当時を思うと今昔の感また一入である。

井内の幸

皿が嶺連峰自然公園に包まれた、井内部落は小さな山の谷間ながら、天与の産物も数かずあつて人の心も懐も恵まれていた。そのなかには今も盛りの幸もあれば、遠く忘れ去られているものもあり、それらをふりかえると先代からの明暗が浮彫にされて興味が深い。

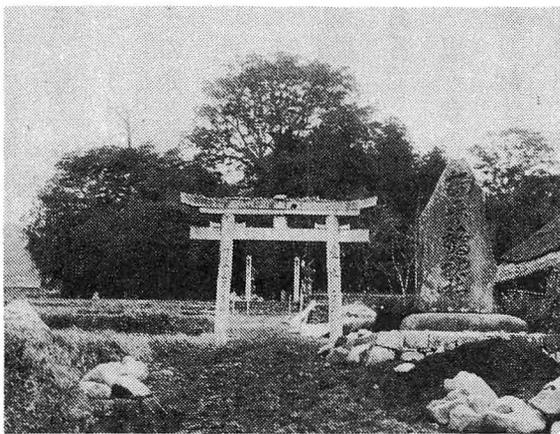
赤石、青石、それに茶褐色の大きい石などもその一つ。まず赤石であるが、その頃農家では麦、蕎麦―玉蜀黍を始め芋、野生の球根に至るまで粉にして食べて

いた。これを粉にするには当然、挽臼がある。従つて各戸に手廻しの挽臼が用意されていて、主婦は暇をみつけては粉を挽き、それを焼いたり蒸したり手間をかけ子供の間食や食膳を賑わせた。大変な重労働であったがよく働いたものだ。

その挽臼であるが、砥部方面の安山岩は軽くて使い易いかわり質が軟か過ぎるため歯目が磨滅しやすい嫌があり、またその反対に大島の御影石は堅くて重く

女手には不向きであるばかりでなく、出来た粉も荒くて不味い。

それに比べると井内の赤石は軽くて適度に軟らかく粉の木目も細やかに使いやすい上に味もよい。従つて挽臼は井内の赤石



井内の赤石 揚神社 (鳥居右側の碑)

に限るとの評判は近郷はもちろん、遠く海を渡つて広島・岡山あたりまで伝つていた。

石工の宮内安吉（石山）、その弟子、戒能幸二郎の作が多い。而し製粉事業の機械化と大型化の時代の流れに抗し切れず、次第にその姿を消して今では古い庭先に転がつて往時をしのばせるに過ぎない。

次は青石で、これは史跡で名高い小手が滝城趾の裏山から産出されるものだが、全山が青石で固まつているわけではなく、岩盤の中に青い段層があるのを切り出し、これを二十センチ角位の小型にまとめて運び出す。なかには鉄分を含んだ茶褐色の筋の入った悪質のものもあるので、これらを選び出す。そのため手間も費用もかなり割高についた。

ひところ、数名の石工が入り込み、ハツパをかけて大量に切り出していたが、史跡を破壊し環境風致を損なうので、山主の意向もあつて採石禁止されたのは地元民にとつては有難い。その跡は断岸絶壁の禿た岩膚が露出し危険をさえ覚える。

青石はその名の通り綺麗な青い底光りのする石で、

これを庭園造りや邸宅の積石に使えば実に豪華に見える。鼠入らずに積み重ねた格調高い岸はただただ美事という外はない。しかし憾むらくは永年経過すると、その光と艶が褪せてくるのは石の運命というべきか。

西谷の長曾我部邸の石垣にこの石が利用されている。時代も移り現在は安い無粋なコンクリートブロックが量産され代用しているがその美に於ては格段の差がある。

塩が森の裏にあたる久尾の深い地中から、恰も芋を掘り起すように出てくる大きな褐色の丸石は里に運び出されて豪邸の飾り石にされたり、燈籠石、記念碑に化けていて、平坦地のこうした太い石は、まず久尾の石と思つて差支えない。

「大根木牛蒡に伊台人參」とまで謳われた大根木の牛蒡もただ長くて太いばかりでなく、土壌が醸し出す風味が抜群であるからで、熟練の板前さんや料理にくわしい主婦なら、すぐに噛み分けられる、これも井内に恵まれた幸といつてよい。

その大根木も過疎の波はひどく十数戸もあつたもの

が今は人影はなく、ホノギ鎌漕、川道あたり一町に余る畑が泣いている。上林との村境に立てられている、害虫除けの祈りをこめた齊藤実盛の碑が草むらの中にポツンと立ち昔の農家の心意気を示している。



花のしきみ

何といつても井

内の特産は櫛の花
であろう。櫛の花
は各地から出荷さ
れるが、井内の品
が断然、優秀と評
価されるのは、気
候・風土・日照の天
然が味方している
ばかりか先覚者、

北川徳次郎翁以来、

地元栽培者の不断の努力、研究が実を結んだもので、その成果が枝の間隔が短かく茂りが目立ち枝葉の光澤に出ている。利用者に最も喜ばれているのは日特がよいこと、他所物の追従を許さない。従って今は県下一

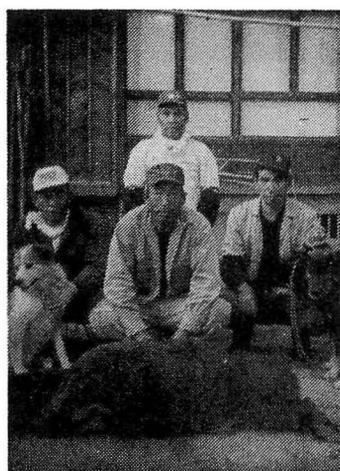
の良質はおろか関西一と業者は胸を張っている。

関東には育たないので、つまり日本一といつても差し支えない。

農業が米・麦・山林に夢をたくし得ない今日としては櫛に全力を傾注せねばならない。今後の問題は販売計画と価格の安定であつて、幸い阪神・広島方面より的大量注文が殺到しているが何分、需要時期が限られているので平素から緻密な販売計画が要求される。

なお、先覚者、北川徳次郎翁は第十代三内村長にも推されたこともあり幾多の徳行、篤農のエピソードが埋もれている。また別の稿で世に紹介したい。

猪 追 い



猪追いグループ

この写真は中島菊政氏等のグループで猪を獲った時のものである。昔の猟期は、十月十五日より翌年四月十

五日までであった。現在では十一月十五日より翌年二月十五日までである。狩猟者は、指折り数えて開禁の日を待ちながら銃の手入れをしたり、狩猟免状の許可書を持参して弾薬の買入れをしたりして万全の仕度をする。

初猟の十一月十五日には、各自が連絡し合って所定の場所に集まり、その日の相談をする。笛による合図

の仕方、それぞれの受持ち方向、出会う場所などを打ち合せた後、一人づつ別れて行く。これをフミキリ、またはミキリという。

山道を歩きながら、猪の足跡はないかを確かめながら行くのである。そのときは足跡があるようにと祈るような気持ちである。足跡を見つけたら、胸中は波打つ思いであり、前後を調べて、昨夜の跡か、何日前の跡かを判断してピーピーと重ねて合図のあるまで笛を吹く。笛を聞くとだれもが勇みたち注意を深めるものだ。集合場所で各所の報告がまとまり、跡がなければ次の山へと行く。

一日歩いても足跡のない時もある。そのような日は大変な疲労と失望でぐったりし声も出ない。折よく足跡に出会うと、よく調べてピーピーと合図して全員そろって細かくフミキリ、猪の寝山はどこか、この山の猪はどちらへ逃げるか、銃の数で逃げ場全部をおさえられるかを判断する。銃の不足の時は応援を求めに帰ることもある。銃がそろえばだれほどの待ち場、彼はどこと決めて追い始める。待ち場へ行く時間を考え、

勢子何人と犬で、何時には追い始めるという打ち合せが終われば、待ち場へ行くのである。待ち場のよしあしからこの打ち合せは長時間かかるもので、必殺の意気込みは狩猟中最大のものであり、まるで戦場の前ぶれのようなものである。

各所の待ち場へ行けばいずれから猪が逃げて来るか想定して、なるべく上り道で待つようにする。下り坂のような所では猪のこないように思うものである。また、初めての時はぶるぶると武者震いする事がある。

勢子が犬を連れて寝山に近付き、それつと犬を放すと犬は一目散に猪の跡を追う。暫時の間にワンワンというほえ声が聞えたら、犬は寝山で猪に出会ったわけである。犬と猪が格闘することもある。また小猪の時には犬が食い殺す事もある。あるいは勢子が近付き射止めることもある。このような時は、ねやうち、または中うちともいい、早い勝負である。

キャンキャンと声が変わって犬の鳴く時は、猪が逃げ始めた時で、追い鳴きという。その時は待ち場の者も、鳴き声で待ち場を変えて猪の逃げ場を追うことも

ある。猪追いは予定どおりゆけば一時間くらいで猪を追い出すのだが、寝山が違ったりするときは、二時間も三時間も待つこともある。

雪の中でも火は焚かれず、かすかな音にも気を付け



射止めた猪

ながらたびた
び時計を見る
ものだ。でも
連中への連帯
責任の重大さ
を考えるとが
まんも出来る

のだと思う。

たびたび猪にも出会い、見事射止めるようになれば連中にも認められ、良い待ち場へも進められ、肩身も広くなる。これが勝負の世界である。勢子の声、犬の鳴き声などが聞えてくる。でも笛の合図のあるまでは辛抱する。やがて銃声のとどろきとともにピーピーと連絡のある時は、足は地に着かず一目散に現場へ急ぎ、全員そろおうのも速い。

猪の大きさやだれが射止めたかその時のようす等早く聞きたいのである。

かき棒にしばらく、荷作りも終え肩にかついで運ぶ時はなんともいえぬ満足感でいっぱい、全員そろって笑顔で代わる代わる持ち帰るのである。

射止めた者は地方によっては相違はあるが、川内町では猪の胃の先取りができる。

さばき方は大猪の場合だと皮をはぐのに三時間余りはかかり、肉を切り取り、骨を切り割り料理をして、一人前の肉の割当等をして終わるのは十時過ぎである。獲物の配分は銃持ちを先頭に勢子及び犬にも一人前ずつ等分に分配される。

早朝より、それぞれ好きな道で一生懸命働いて、夜おそく食べる猪汁は、猟仲間でなければ味わえない珍味である。

勢子が猪を追い出した時や犬がほえたり、鳴き声に変わったり、待ち場へ逃げ出したのを射止めたりしたときの手柄話は大変勉強にもなり、この味こそが狩猟の醍醐味というものであろう。

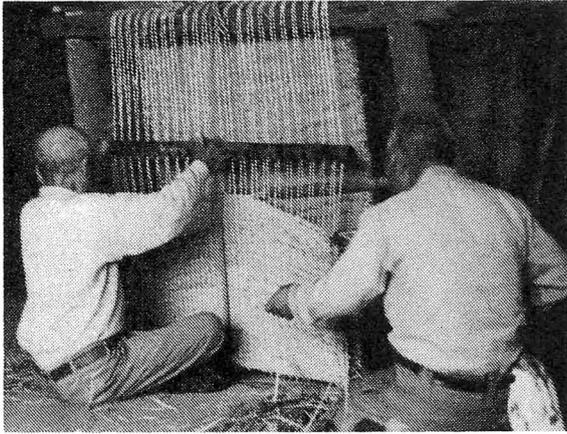
筵機むしろばたを囲んで昔を語る

北方東部の老人会の席で昔の思い出話をした。そのとき、松本千次郎さん宅には、古い筵機むしろばたがあるので、倉庫の奥から引き出して組み立てた。



筵機を囲んだ古老

この筵機は、明治三十年代から使われていたものであり、特に貴重なもの「オサ」であり、桜の木で作ったものでなければ（要は材質が堅いものでなければ使えない）との事で、この「オサ」



筵を織る老人たち(昭和57年3月)

の穴が大きく磨滅して、きれいに艶が出ている。また「エサシ」も竹であるが、これもきれいに艶が出ている。この二つが筵機の生命である。いかに永年にわたり大切に使用されていたかがうかがえる。

そこで、この昔の筵機を使用した経験者が松本さん宅に集まって、思い出の多い筵機を囲んで雑談に花を咲かせて、かわるがわる筵打ちをした。

出席者は、石谷沢一、山下文四郎、河端栄行、越智

徳次、橋本義之の五人であった。筵を織る事はだれにでも出来る藁細工ではあるが、熟練が第一で、米・麦が漏れるようでは使い物にならない。筵の縦縄が一枚分六十尋じゅうじゆを要するのであるから、せい

ぜい一日に一枚くらいしか織れないのである。

筵は農家にとっては必需品であり、消耗品であるから毎年少しは追加せねばならないので、大正から戦前頃までは、農村不況のため、南予方面から婦人が二人組となつて、当地方まで筵織りに来て、次々と農家に注文を取つておつた。この人達は二人で一日に十枚は確実に織つていた。勿論縦縄は夜なべにさらさらとなつていた。藁は打つて渡し食事、宿泊付きで一枚二十銭くらいであったが、順次、三十銭、五十銭くらいにまで上がった。

夜は地方の若衆が遊びに来て、藁打ちを手伝いながら面白い雑談の中で、いつしか心安くなって結婚の話も成立したとか。

また、南予の娘さんは一度は中予地方へ筵織りの出稼ぎに行った経験者でなければ、地元でもお嫁に行けないとさえいわれた。人気仕事であったが、この筵機も昭和十五年頃になつて、足踏み機械となつて能率が上がるようになり、したがって縄ないも藁打ちも機械化されて、農家も自由に筵打ちができるようになった。

このため南予地方から来ていた娘さんの顔も見えないようになった。以後筵機の話は永久に昔話として歴史を閉じるであろう。

松本千次郎さんもまた、この明治時代の筵機で立派に一枚織り上げて川内中学校の郷土館に残した。

編集に當つて

ふる里の記録第二集の編集に當ることになりました。かねがね尊敬している東会長さんの辞を低うひかへしての御依頼とふる里の記録にかける御熱意には抗し切れず、浅学非才を顧ず引き受けざるを得ませんでした。幸い委員の皆さんが一体となつて、それぞれに個性豊かな手腕を發揮して下さったおかげで、途中くじけることもなく何とか一応の体裁を整えることができましたことを、この上もない欣びに思っております。

特に八十四才の御高令で編集にたずさわつて頂き、私たちを常に励まして下さつていた橋本義之さんが、思いもかけず編集途中で故人になられたことは、かえすがえすも残念でなりません。橋本さんのあの叡知えいちと意欲は編集の最後まで私たちの心の中に生き残り、大きい力となりました。

古い写真を足でかせいで集めて下さつた協力委員の皆様方、或は写真をもとに当時のことを思い出して、色々語つて下さつた老人クラブの皆様方、いわば川内町老人クラブ全員のお力と意欲で、やっと編集にこぎつけられたわけで御座います。内容は貧くともこの老人クラブ員の意欲を買つて頂ければ幸いです。

主として明治、大正、昭和の初期を中心に、当時の世相や出来事、くらし、町のうつり変わり、など幅広く写真をもとに編集しました。昔をなつかしむとしより趣味的な面も感じられますが、次代を担う若者に書き残しておきたい気持ちから取りくみました。こういった時代を経て現在があるのです。「温古知新」ということばがありますが、はげしい社会変化に身を処する上で、いささかでもお役に立てば幸甚です。

予算の関係でお寄せ頂いた原稿の一部を次回まで温存せざるを得なかつたことを許して頂きたいと思いません。

終りになりましたが監修をして頂いた森正史先生、橋本矩之先生、又この記録を高めて頂いた表紙の佐伯惟揚これあき先生、矢野信次郎先生に厚く感謝申し上げます。

昭和五十九年二月十一日

編集委員長 菅野良知

◆「ふる里の記録」編集委員（順不同）

委員長 菅野良知

副委員長 中川喜十郎

委員 渡部団正

橋本鬼士男

高須賀久之

菅野タツ子

井内

奥松瀬川

前松瀬川

友沢富一

大石隆子

高須賀忠五郎

神野林子

田中照子

高須賀薫明

渡部国恵

田部早蔵

林カツ

町西

町東

南方東

南方西

高須賀秀吉

森長栄

渡部富市

友沢富一

大石隆子

高須賀忠五郎

神野林子

田中照子

高須賀薫明

渡部国恵

田部早蔵

林カツ

町西

町東

南方東

南方西

東太市

道満兵五郎

高須賀久之

友沢富一

大石隆子

高須賀忠五郎

神野林子

田中照子

高須賀薫明

渡部国恵

田部早蔵

林カツ

町西

町東

南方東

南方西

◆昔話を集める会協力委員

滑川 玉井信義

土谷 佐伯太郎

河之内 中川喜十郎

近藤政雄

近藤幸三郎

則之内東 小倉正雄

小倉元一

則之内西 高須賀平太

田井勇

池川光永

渡部一子

今井ギン

近藤慎一郎

日野知明

近藤安長

大野千尋

宇和川顕一

大石茂三郎

富久富晴

富久富晴

北方西

北方東

町東

町西

町東

町西

南方東

南方西

高須賀秀吉

森長栄

渡部富市

友沢富一

大石隆子

高須賀忠五郎

神野林子

田中照子

高須賀薫明

渡部国恵

田部早蔵

林カツ

町西

町東

南方東

南方西

東太市

道満兵五郎

高須賀久之

友沢富一

大石隆子

高須賀忠五郎

神野林子

田中照子

高須賀薫明

渡部国恵

田部早蔵

林カツ

町西

町東

南方東

南方西

東太市

道満兵五郎

高須賀久之

友沢富一

大石隆子

高須賀忠五郎

神野林子

田中照子

高須賀薫明

渡部国恵

田部早蔵

林カツ

町西

町東

南方東

南方西

東太市

道満兵五郎

高須賀久之

友沢富一

大石隆子

高須賀忠五郎

神野林子

田中照子

高須賀薫明

渡部国恵

田部早蔵

林カツ

町西

町東

南方東

南方西

東太市

道満兵五郎

高須賀久之

友沢富一

大石隆子

高須賀忠五郎

神野林子

田中照子

高須賀薫明

渡部国恵

田部早蔵

林カツ

町西

町東

南方東

南方西

東太市

道満兵五郎

高須賀久之

友沢富一

大石隆子

高須賀忠五郎

神野林子

田中照子

高須賀薫明

渡部国恵

田部早蔵

林カツ

町西

町東

南方東

南方西

東太市

道満兵五郎

高須賀久之

友沢富一

大石隆子

高須賀忠五郎

神野林子

田中照子

高須賀薫明

渡部国恵

田部早蔵

林カツ

町西

町東

南方東

南方西

東太市

道満兵五郎

高須賀久之

友沢富一

大石隆子

高須賀忠五郎

神野林子

田中照子

高須賀薫明

渡部国恵

田部早蔵

林カツ

町西

町東

南方東

南方西

東太市

道満兵五郎

高須賀久之

友沢富一

大石隆子

高須賀忠五郎

神野林子

田中照子

高須賀薫明

渡部国恵

田部早蔵

林カツ

町西

町東

南方東

南方西

東太市

道満兵五郎

高須賀久之

友沢富一

大石隆子

高須賀忠五郎

神野林子

田中照子

高須賀薫明

渡部国恵

田部早蔵

林カツ

町西

町東

南方東

南方西

東太市

道満兵五郎

高須賀久之

友沢富一

大石隆子

高須賀忠五郎

神野林子

田中照子

高須賀薫明

渡部国恵

田部早蔵

林カツ

町西

町東

南方東

南方西

東太市

道満兵五郎

高須賀久之

友沢富一

大石隆子

高須賀忠五郎

神野林子

田中照子

高須賀薫明

渡部国恵

田部早蔵

林カツ

町西

町東

南方東

南方西

東太市

道満兵五郎

高須賀久之

友沢富一

大石隆子

高須賀忠五郎

神野林子

田中照子

高須賀薫明

渡部国恵

田部早蔵

林カツ

町西

町東

南方東

南方西

東太市

道満兵五郎

高須賀久之

友沢富一

大石隆子

高須賀忠五郎

神野林子

田中照子

高須賀薫明

渡部国恵

田部早蔵

林カツ

●資料提供者（順不同 敬称略）

南方西	和田源三郎	相原芳明
渡部福三	渡部浪子	
菅野タツ子		
川内町役場	川内中学校	川内町教育委員会
川上小学校	東谷小学校	重信町教育委員会
坂本公保	渡部団正	菅野良知
花山光重	渡部福三	岡山久子
中川喜十郎	渡部浪子	野中友親
橋本鬼士男	田中花子	野中時子
菅野タツ子	大石茂三郎	中島菊政
松本千次郎	桑原八郎	相原芳明
和田源三郎	宇和川俊之助	八木岩市
仙波知	富久知明	和田スキエ
高須賀久之	佐伯巧	藤井茂
大西政之進	高須賀秀吉	田部早蔵
田中照子	川端栄行	大西恒子
高須賀良蔵	渡部千代子	森操
大石岸春	近藤磨須夫	

表紙	矢野信次郎
題字	佐伯惟揚
写真	高木国雄
表紙	橋本矩之
監修	森正史
	田中道徳

ふる里の記録

くらしの思い出篇

編集者 川内町老人クラブ連合会
 昔話を集める会
 発行所 川内町社会福祉協議会
 発行日 昭和五十九年三月十日
 印刷所 松山市東石井町
 アマノ印刷



信
2